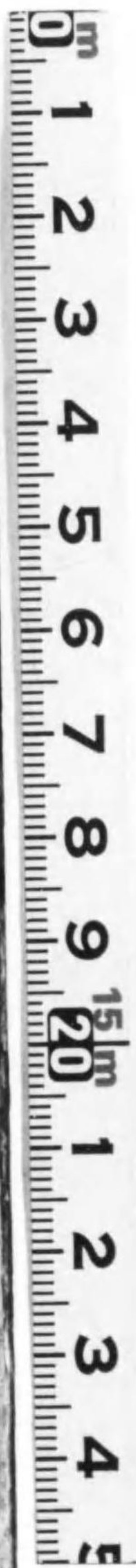
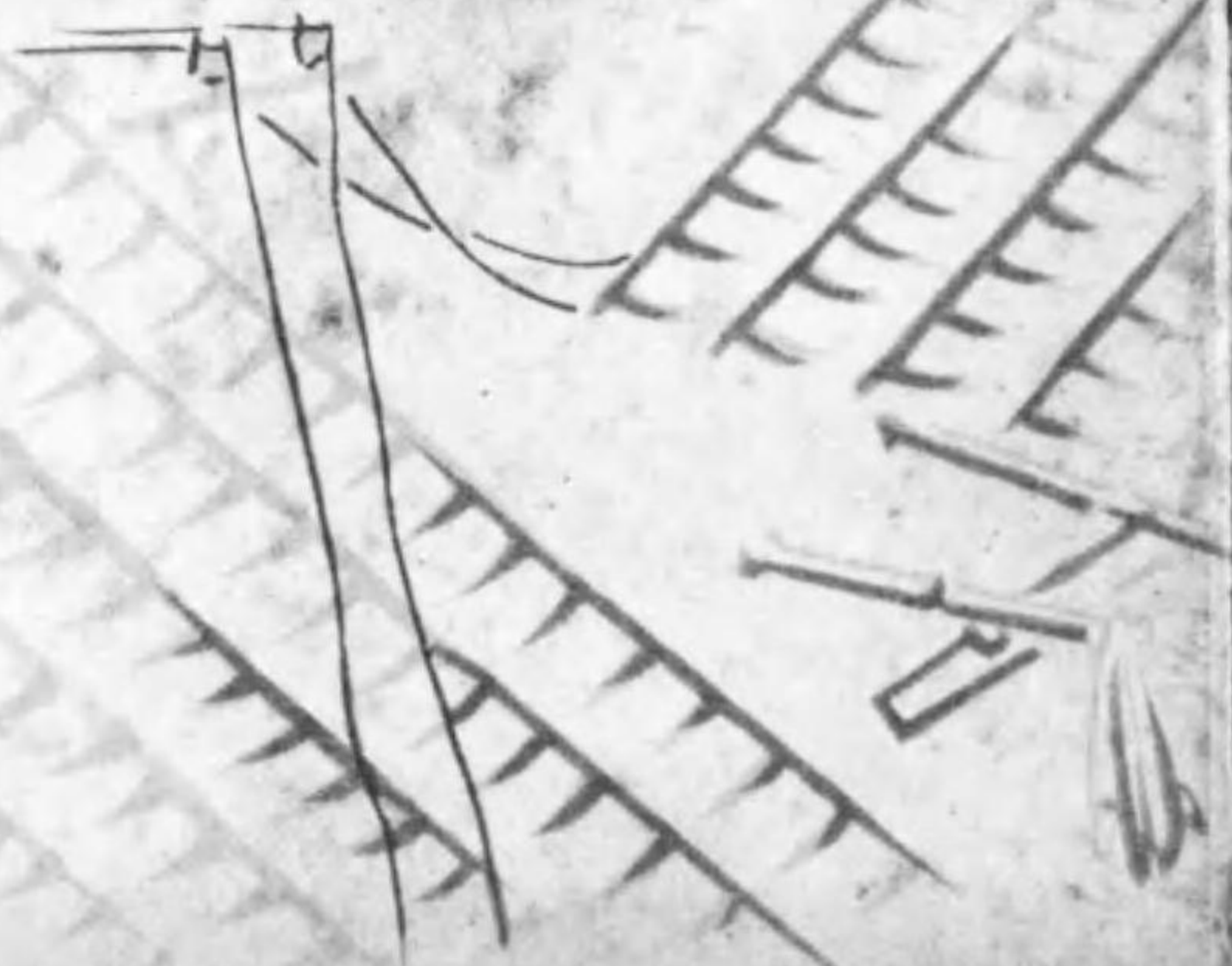


月魄

菊池幽芳著



始



特233
377



魄

菊池幽芳著



月 魄

藤乃の巻

菊池幽芳

(一)

東京に名を知られた番町の某女塾の同期卒業生が、同窓會を開くについて、その幹事會を
樂町一番町の立花錦子方に催はした。主人の錦子の外に川上倭文子、遠山藤乃の二人が寄合つ
たので、同窓會は來週の土曜日に開く事に極ると、後は互ひに遠慮ない同志の打解談が始まる。
『遠山さんはやつぱし飯田町の御親戚の方に居らつしやつて？ お處が一寸分らなかつたも
んですから、失禮でしたけれども川上さんにお願申して置ましたの。』
『は、前の通り、伯母の宅に同居して居ます。』
『そして何か遊ばして？』と錦子は藤乃の身の上に好奇心を濫ぐ。

『えい、いつまで厄介にもなつて居られませんので、このごろ家庭教師のやうな事をして居るんでございます。』

『え、家庭教師？ どんなどこへいらしつて？』 錦子は驚ろき顔に、而して蔑すむやうに藤乃を見つめた。

『富士見町の梅小路さんのお邸に……休文字さんの御盡力なんですの。』

錦子はまた驚ろかされて、

『それちやアノ伯爵の……？ 大層ピアノがお上手だと新聞に出で居つた方でせう。』

『はア、それはほんとお上手——』 藤乃は力を入れて云さしたのを、錦子は夢のやうな眼で遮ぎつて、

『そしてまだ獨身で居らしやる方ね。貴嬢、ヴァイオリンをお合せ遊ばして？』

今度は藤乃が驚ろかされて、

『あら、どうしてそんな事が……お目にかゝつてお話しする折さへ少ない位ですもの。』

『……でも小説的ねえ。私、貴嬢が羨やましいわ。』

『まア——』と藤乃は眼を睜る。

休文字の視線さへもちつと自分に透がれて居るのを見ると、錦子も心づいてほーつとなつた

顔を『おほ。』と笑ひに紛らした。そして倭文字に向つて、何氣なく、

『貴嬢、梅小路さんと御親戚か何かで居らつしやるの？』

『いゝえ、お亡なりになつた伯爵のお父様と、父がお心易くして居つたものですから……』

倭文字は始めて口を開く。
錦子と倭文字が二十歳、藤乃が年長の二十一であるが、倭文字が一番の姉で、錦子が一番の妹に見える。錦子が若く見えるのは粧の派出なのにも依らうが、第一小柄で丸顔で色白なのに依るだらう。額がやゝ廣過ぎる感じはあるが、廂で隠してあるので眼に立つほどではない。一寸人好のする派出な顔立である。藤乃は色はやゝ浅黒いが締つた、きりゝとした、眼に張のある細面で、背も一番高く、姿において誰よりも秀でゝ居る。三人の中では倭文字が中庸を得て、最も優艶の色を具へて居るのに、それで居て老て見えるのは顔立に多少陰氣なところがあるためかも知れぬ。この缺點を除いては、どこに云分のなき善き家庭の淑女である。と一目見て首肯するゝ人品である。

藤乃は思ひ出したやうに話を轉して、

『立花さん。あの濱野さんはどうなさいましたらう。』

『おゝ！ 貴嬢方はまだ御存知ないでせう。濱野さんはたうとう離縁されたのよ！』

「えッ、離縁？」と聲は二人の處女の口から出た。而して深い同情の聲が二人の顔に上つた。
「そりや残酷なのよ。やい／＼所望して置いて……濱野さんはそんなに望んでも居らつしや
なかつたのを、卒業式を待かねて、式を擧げた位ちやありませんか。それが肺病になつたから
つて、さん／＼冷遇した上、たうとう離縁なさるとは……男はなぜそんなに無情なんでせう。」
と錦子は一方ならず憤慨するのである。

「ほんとにねえ。」と溜息を漏した倭文子の眼には早や涙を持つた。

「そして詩人で神聖の戀とか何とか云つて騒いで居らした方なんでせう。全く戀の假面を被
つて、性慾の満足を遂やうとなすつたのよ。でなきやアそんな無情な處置の出来る筈はないわ。」

「さうですともね。」と藤乃は素直に合槌を打つ。

「お互ひに警戒しなくちやいけないわ。私なんかほんとに清い戀を解した方でなけりや……ほ
ぼ、ねえ、遠山さん。」

「ほ、さうでございますわね。」と藤乃は他人事のやうに云ふ。

「だつてさうですもの、ねえ、川上さん。」と今度は倭文子の同意を求めぬ。

倭文子が躊躇つて居ると、藤乃が引取つて、

「倭文子さんは決して御自身では御洗濯遊ばさないさうですよ。」

「では御両親にお任せ遊ばして。」

「えい……」と云つたが倭文子はやゝ恥たやうに差俯むく。

「でもお近い中にお極りなさるでせう？」と錦子は妙に倭文子の顔を覗き込んだ。

「いゝえ、そんな事は——」と倭文子には何の感じもないので少してれたが何を思つてか、

「さうですか。貴嬢のお母さんは繼母で居らつしやるわね。」

「は、さうですけれども私には生の母のやうにして呉ますから……」なぜか斯ういふ倭文子の
顔は冴なかつた。

話が一寸途切れたが、錦子はすぐ藤乃の方を見て、

「貴嬢は御自由ね。」

「伯母は私に一任して置くんですけども、當分結婚するやうな考へはありませんわ。ひよつと
すると私は、一生獨身で終る運命を持つてるんぢやないかと、考へる事がありますの。」

「おや、なぜですか。」と二人は藤乃を見つめた。

藤乃は暫らく黙つて二人の友を見たが、藤乃の眼には何か人と違つた、隠れた運命を啗やく
かのやうな神祕の光が宿つて居て、それがいつも人を惹つけるのである。或はこれを小説的
光とも形容する事が出来やう。

『たゞ何となくそんな気がするんですの。』

『だつてそれぢや無意味だわ。』

『全く無意味でせうよ。ですけども母の小説的な血が私にも通つてゐるんですから……』と笑ながら云つた。

二人は不思議さうに、説明を求むべく藤乃のその小説的の眼を見た。倭文子は最も親しい學友であつたけれども、嘗てかの女の母の事は聞及ばないのである。

『ほゝ、うっかり餘計な喋舌をしてしまつたのね、仕方が無いからさつと申上げませうか。』

藤乃の語り出るところによると、藤乃の母は十八の時或男を戀して一心に思ひつめた結果、三十歳まで獨身を通して來たが、その間にはいろいろの小説的の波瀾があつて、たうとう三十二年目に不思議と思ひを遂る事が出來たのである。それが結婚をして見ると、始めから嫌ひに嫌ひぬかれた女が、どういふ奇縁か、がらりと變つて、十八九の戀人のやうに、嫌はれた男に愛され人に羨やまれる家庭を作つた、といふので。

『それも考へて見ると夢のやうですわ。すぐ私が生れると翌年、母はふとした病氣から果敢なく世を去つたのですが、その時父に向つて、草葉の蔭からお待申して居りますと、最期の一言葉を残しますと、父は來年は遭に行くから待つて居ると申しましたさうです。父は至つて壯健

だつたさうですのに、どうでございませう。翌年母の一週忌に、突然心臟麻痺で亡なつたのでおやいます。』

藤乃は語り丁ると共に自ら無量の感に閉されるものゝやうに首垂れた。

『マア、ねえ？』と倭文子と錦子は顔を見合せたが、これもそれ以上の言葉はなく、何か惹入れられるやうに覺えて、太息を合せるのである。

『まアほんとに小説的ね。』と暫らくしてから錦子が口を開いた。

藤乃はなほ黙つて居たが漸く、

『ですから私も——』と云さして急にまた口を噤む。後を云はうとして思はず何か心を寒くしたのである。

錦子はそれを看破し得たやうに、

『ですけどもそんな事は遺傳するものぢや無いわ。ねえ、倭文子さん。』

『さうですともねえ。』

『母の血はきつと私に通つて居ますわ。』と藤乃は頑固に云ふ。

『でもそれならそれでいゝぢやありませんか。貴嬢もその血を湧すやうな方をお見つけ遊ばせな。』

『そんな苦勞をするよりか、獨身で通した方が樂ですわ。』と藤乃は眞面目であるが、その目には夢のやうな光を宿して居た。

暫らく話の絶た後、錦子は妙にまた倭文子を見て、

『倭文子さん、私は二三日前、松平さんのお馬車が、お宅を出るところを拜見しましたの。』

『おや、さうでございましたか。』と倭文子は相變らず無神經である。

錦子は穴の開くほど倭文子の顔を見て、笑を帯ながら。

『私、松平子爵が申込なすつたやうに聞いて居ますよ。』と冗談のやうにいふ。

『え、そんな事は……』と始めて氣が附いて顔を赧め『私ちつとも知らない事ですもの……』

『眞實ですかしら……貴嬢が御存知遊ばさなくつても……』

『正木さんと御同窓であつた、あの松平さんの事を仰しやるの。』藤乃は倭文子が迷惑して居る

のを見てかう言葉を挿んで『あの方なら立花さんの邪推だわ。』

全く眞實らしいのを見ると、錦子は何か満足らしい色を浮べたが、

『さう伺つてから申すんぢやありませんが、松平さんのやうな氣障な方つてありませんわね。』

私、あゝいふハイカラの方大嫌ひ。學校でもあんまり成績がよくなくつて、途中から退學遊ばしたさうでございますね。』

『さアどうでございますか。』と倭文子は當らず障らすの返事をする。

『今正木さんと仰しやつたのは誰方？』と今度は藤乃に向つた。

どういふものか藤乃が顔を赧めて、

『え、あの正木さんと仰しやるのは……』

『私の宅の書生でございますの。』と囁やくやうに引取つていふ倭文子の聲には優しさが籠つて居た。

これから後の話は多く記すほどの事はない。その上に暮近くなつて來たので、藤乃と倭文子は、俥で送るといふのを辭して、遠い所では無し、途すがら行春の風情を賞でつゝ歸らうと、そのまゝ錦子方を出ると、二人は右と左に別れた。

倭文子は元園町へ歸るので、五番町の入口にさしかゝると、まだ暮はぬせが淡すりと夕月が見えて居る。英國大使館前から御濠端に林をなして居る櫻の梢に、花は大方散失したが、まだちらほら若葉蔭に咲残つて、それが臍に露みかゝる風情得も云はれぬ。中に雜る楓の若芽さへ花に優る眺めがあるので倭文子はいつ眼を惹かれて林の中へ分入らうとする時、後から來た馬車があつて、それが行過たと思ふと、中に乗つて居た黒鹽瀬五ツ紋の羽織、お召らしいのを着流した貴公子が慌たゞしくわが馬車を呼駐めた。

併し倭文子は馬車には目も留らず、木立の中に踏入つたが、後から、

『倭文子さん。倭文子さんちやありませんか。』

かう呼ばれたので、立留つて不思議さうに見返ると、

『おや松平様でございましたか。』

先刻話の出で居た子爵松平亮二郎だったので、思はず顔を赤くしたが、すぐ迷惑の色を浮

べてもじくして居ると、

『貴嬢、今ごろお一人きりですか。』とつかくと傍へ進んで来た。

『ハイ、一寸そこまで参りましたので。』

『おゝ、それなら幸です。お宅までお送りいたしませう。』

『いゝえ、あの決してそれには及びません。すぐもうそこでございますから。』

『さうですか。それなら私も暫らく櫻の下を散歩いたしませう。』

『あの、もう暮かゝつてまゐりましたから……』といよゝ迷惑さうに倭文子はいふ。

『倭文子さん、そんなに仰しやらずと宜しいではありませんか。まだなかゝ暗くはなりません。少しお話ししたい事もあります。』

倭文子が途方にくれて佇んで居るのにも構はず、亮二郎は獨りぎめに『も少し中へ入りま

せう。』と濠端の方に進み入る。

倭文子は往來の人に姿を見られる事を恥たので、機械的に子爵の後に續いた。木立の下には全く人氣がなく、下の柔らかな草原には、隙間もなく花が散つて居る。

『倭文子さん、貴嬢にこゝでお目にかゝるとは何といふ幸でせう。』

『あの、松平様、何か御用でございますか。』

『倭文子さん、さう眞四角に仰しやられては困るすな。』と亮二郎は微笑を帯びて、かねて機會があれば私の意中を、申上たいと考へて居たところだ倭文子さん、この切なる意志は、まだ貴嬢にお分りにならないですか。』

『え……私、そんな事を伺ひましても……』と倭文子はおづ／＼しながら云つた。眼の縁がほんのりと染出されて居る。

『私はこの世に終生の苦樂を共にするものは貴嬢の外に無いと、深く思ひ込んで居るのです。若し貴嬢が拒絶なされば私は全く厭世の男になるでせう。どうぞこの切なる思を汲んで私の將來に光明を與へて下さい。貴嬢の一言で私の運命は決するのです。』

倭文子の花のやうな顔には、此上もない當惑の色が上る。

『でも私……そんな事にお答致しますことは……何もかも兩親に任せて居るのでございますか

亮二郎の顔は輝やいて、

『それなら御両親が御承諾なされば、貴嬢には御異存がないのですか。』

『え、いえ……そのやうな仰せには全く……お返事が致しかねます。アノ遅くなりましたから、これでお暇いたしましたうございませう。』

倭文子が去らうとするのを慌て、

『ちよつとお待ち下さい、實は私の方からは御両親にも略お願してあるのです。たゞ貴嬢が御返事さへして下されば、事は仔細なく運ぶものと信ずるですから……』

『でも私、両親を置いて御返事申上ます事だけは、どうぞお免し遊ばして——』

『さうですか。』吐息を漏らして『貴嬢は實に物固いですな。それでは致方がありません。直接御返事を伺ふ事だけは兎に角見合せます。併し倭文子さん。』と言葉を換へて『そろそろ暮て来ましたから、お宅までお送りする事だけは、是非許すと仰しやつて下さい。』

『でも貴君、僅か二三町のところではございませんか。』

かういふ時御濠の土手に突然女の泣聲が起つた。二人は驚ろいてその方を見ると、つい鼻の先へ乳呑兒を負ふた女が、書生風の青年に擁へられて泣ながら上がつて出たのである。

女の容子といひ、人の立入るべきでない土手を上つて来たところを見ても多分身投を企たしてようとして、書生に助けられたものであらう。倭文子はまづ同情の感に打たれた。亮二郎は話の腰を折られたのに驚ろいて、共にその方を見つめたが、書生の顔を見ると倭文子は驚ろきながら、

『おや、正木ぢやなくつて?』

書生は名を呼ばれて始めて倭文子を見た。

『お、お嬢様でしたか。貴嬢は何して。』といふ中傍に連立つた貴公子の顔を見ると、不快な色を浮べて、

『貴君は松平さんですね。』

『ウム、正木君、全體どうしたのかね。』

松平の顔にも不快の色が上る。

倭文子は無言に正木の説明を待つた、女は啜泣をしながら立つて居る。まだ二十七八で三ツほどの兒を負うて居るが、服装は貧民といふほどの風ではない。もし兒を負うてまで投身を企だてたものとすれば、何かの深い事情が無ければなるまい。

正木は子爵には目もくれず倭文子に向つて、

『今この婦人が濠に身を投やうとするところを危ふく抱留めたのです。事情を云はんで只泣てゐるんですが……』

『さう、やつぱし身を投やうとして、まア……お前、どうおしなの？ どんな事情があるのか知らないが、私もこゝへ來合はしたからは、決して悪いやうにはしないから、話せる事なら話して御覽な。』

女は優しく云はれて、倭文子の顔を見ると、また情が迫つたやうに堰上げて泣始める。

『お前、事情を話して見たらどうかね。場合によつたら我輩でも力になつてあげよう。』とこれは亮二郎が云つた。

『まアこないゝ兒があるのに。』と倭文子は負れた兒を覗き込んで『事情が云へなければ無理に聞かうとはしないけれども、何か他人が力になつて上られる事なら、どうぞしてあげますから……』

『い、御親切に、あ、難有うムいます……』と咽びながら云つたが、なほその事情を語らうとする様子は見えぬ。

『それで家はどこののかへ。僕が送り届けてあげよう。』と正木は口を押さむ。

『いえ、もう、よろしうございます、一人できつと歸りますから。あの山元町で……どうも飛

んだ御厄介様になりましてございます。』

『併し何だか家まで送り届けなければ僕には安心が出来ない。ねえ、お嬢様さうして來ませう。』

『あゝ是非さうして下さい。』

『どちらのお嬢様が存じませんが、御親切にいろく〜と……もう寧ろ何もかも……』

『さア云つて了つたらどうだへ。』と亮二郎が口を入れる。

『まアさう強て聞く必要も無いでせう。さアお嬢様もさう仰しやるんだから、僕はお前さんを送つて行かう。』

女は涙を収めたが、

『こんな苦勞をするのもみんな亭主がさせるんで……女は男を持損なつたほど悲惨なものは有りません。』と獨語のやうに呟やいた。

この言葉は妙に三人の胸に響いたので、倭文子は黙つて俯むいたが、正木は鋭どく亮二郎を見た。亮二郎は正木と顔を見合はせると、何か『はゝゝゝ』と苦笑したのである。

『それでは倭文子さん、貴嬢は私がお送り申しませう。』

『いゝえ、私、よろしうございます。』ときつぱり斷つて『正木、私もそこまで一緒に行きま

す。』

松平は齒嚙をして正木の後姿を見送つた。

(二)

倭文子は退役陸軍少将 男爵川上益荒の娘で、父は六十を越えて、なほ鑲鑲として居るが、生の母は倭文子が七歳の時に亡なつて、今の男爵夫人はさる幕臣の家から嫁いで来た繼母である。繼母に二人の兒があつて、家庭は萬事が舊弊に傾むく風はあるが、至極平和で、腹の違つた同胞の間も睦まじく、繼母は取分け倭文子を大事にして居る、殊に倭文子は男爵の秘蔵子で、男爵は同じわが子の間に分別を設ける事はないが、それにも拘はらず倭文子は父が最も自分を愛して呉る事を知つて居るのである。併しそこにまた倭文子の人知れぬ苦痛が存するので、自然何かにつけて氣苦勞を要する事が多かつた。

『倭文子さん、お邪魔ではありませんかへ。』と倭文子が今居間へ入つたところへ、襖を開て姿を表したのは男爵夫人民子である。

『おや、お母様、御用なれば私がまゐりますのに……どうぞお入り遊ばせ。』と倭文子はいこやかに座布団を勧める。

夫人は年のころ五十格好、瘦肉のやゝ神経質らしい、上品な人柄で、髪は丸髷に結つて被布を被つて居る。につこり座について、

『いゝえね、別に差當つて用といふではありません。少し貴嬢とお話したい事があるので……何も今には及ばないのだが……』

『いゝえ、たゞ今何も用事はございませぬ。』

そこへ後からついて来た小間使の春が、煙草盆を置いて行く。夫人は煙管を抜取つて、煙草をつめながら、

『また縁談の事ですがね。倭文さんは私達の擇んだものなら異存がないと仰しやるけれど、肝腎の倭文さんの好まぬところへ、無理強するやうな事があつては、亡なつたお母様に申譯がありませんからね。貴嬢が若しも遠慮などおして、充分意見を仰しやつて下さらないと、私は却つて怨みに思ひますよ。ですからね、倭文さん、お厭ならお厭とちやんと仰しやつて下さるんですよ。』

倭文子は當惑の様子で、

『ですけどもお母様、私はまだ結婚の考なんかございませぬから……』

『またそんな事をお云ひですか。』とたしなめるやうに倭文子を見て『丁度紀尾井町の松平様か

「らも、内々御相談があるのです。」

倭文子は扱はと思ふと、さつと頬の邊を彩どつたが、すぐ差俯むくと、電燈に照されたその横顔には、次第に蒼味が上るのであつた。

「倭文さんは松平様をどうお思ひです。お父様も倭文さんも爵位などにはお望がないと仰しやるけれども、そりや誰にしても有るに越した事はありませんからね。私はあの方なら大した不足もないやうに思ひますが——」

此方は俯むいたまふ言葉がない。

「それに松平様の方では是非倭文さんでなければいけないつて、大變に御執心で居らつしやるさうです。」

倭文子は漸やく顔を上げたが、

「お母様、私、當分全く結婚するやうな氣は——」と云ひさしてまた差俯むく。

夫人は倭文子の顔の蒼さめて居るのに氣づいて、

「では倭文さん、お厭かへ。」

「いえ、お母様、決してそんな——」と打消さうとしたが、夫人は進まぬ容子と見て取つたので、眉を擧めながら、煙草の吸殻をトン／＼と軽く落し、

「倭文さんお厭ならお厭でお断りするのにも何も仔細はありません。松平様の方からお望があつたので、貴嬢にお話をしたまでですから……その實私もあんまり氣乗はしないのです。たゞね、お父様が大層進んで居らつしやるやうですから……私にお断りがしにくいならお父様にさう仰しやつてもいいのですから。」

「いえ、私、お父様にお断りするものならば、お母様にもお断りいたします。」

双方に言葉がなく一寸しらけたが、夫人は煙管を收めて、

「それでは倭文さん、何も急ぐ事では無し、よく考へてお置きなさい。お断りをするならいつでも出来ますからね。」と出来るだけ優しく云残して夫人は席を立つた。

母が立去ると、倭文子は机に向つたが、何をするでもなく、手を懐に差入れてがつくりと差俯むく。折柄襖がさら／＼と開いて手を支へた小間使の磯「お嬢様、只今正木さんがお歸りになりましたでございます。」

「おや、さう。」と始めて倭文子の顔は芽て「それではすぐこゝへ來て下さいつて……」

一寸こゝで正木貞雄の身の上を語らう。

彼は倭文子の乳母の子で、倭文子とは乳兄弟になる。倭文子より六ツの兄であるが、倭文子が七歳の時、乳母は倭文子の母と前後して世を去つたので、忠實な乳母の記念として、貞雄は

爾來川上邸内に養はるゝ事となつた。振分髪の幼立から倭文子と貞雄とは眞の兄弟のやうに睦んで居たので、二人の中には互ひに遠慮のない、骨肉同様の情が成立つて居た。父の男爵は乳母の死際に、貞雄を立派な一人前の男にしてやると受合つたので、小學校から中學校と、貞雄は順次教育を受け、今では大學の理科を修め、今年卒業の筈である。

貞雄は意志の強い、健實な青年で、今の學生に見る浮薄の氣は毫も無い。男爵の恩を感じる事極めて深く、川上家の利益、別して倭文子の利益のためには、如何なる犠牲ともならんと常に考へて居る。

年頃になつてから後の倭文子と貞雄は、幼ない時のやうに互ひに行交うて睦み合ふ事は無くなつた。自然兩方から遠慮を仕合ふやうになつたが、しかも互ひの心は今も昔のまゝに通つて居る。倭文子は父の外には誰よりも貞雄を頼りにして居るので、全く眞實の兄に對する心を有つて居る。いや或はそれ以上であるかも知れぬ。併しまた何も意識しては居ないので。意識しては居ぬものゝ、今松平家からの縁談を聞くと同時に、何とも云へぬ淋しさを感じ、何か人生の味氣なさを覺ゆるやうな、堪へ難い心持を起したので深い溜息も漏れて居たが、丁度その時貞雄の歸つて來たと告げられた言葉は、倭文子の胸に、端なく一道の温味を湧かしめたのである。

貞雄はすぐに倭文子の居室へ入つて來た。倭文子はまづ感謝の眼光で迎へて。

『無事に送つて來て下さつて？』

『はア、いろ／＼事情も聞いて來ました。随分氣の毒な女です。』

『やう。』

『名はお豊といふので、始めつから悲劇の材料にでもなりさうな運命を有て生れて來た女です。舊は日本橋で可なりに暮して居た商家の娘ださうで、姉一人と弟二人あつて、不足なく暮して居つたところが、弟二人が同時に流行病にかゝつて死んだので、父は氣が狂出し、母はそれを案じて病氣になり、さうかうする中父も母も亡なつたといふので、その時十七のお豊は、姉の縁付先へ引取られたさうです。それがどこへ行つても不幸が附いて廻るので、姉婚の處へ引取られてから、何でもその姉婚の弟で大阪へ奉公に行つて居るものと、お豊と許嫁の約束が出来たのですが、その時お豊はまだ顔も知らなければ、十七の初心な小娘で何の考も無かつたさうです。其弟は十九とかでそれが約束の出來た間もなく、不仕合せに脚氣で大阪から送り歸されたところが、どうでせう、東京へ着いた晩に衝心して、お豊と碌々言葉も交さぬ中死んで了つたといふのです。』

『まア不運な女だわねえ。』

「お豊はまだ戀といふ事も何にも知らない身にも、ひどく動かされて、自分も死たいと思つたさうです。さうかうする中にまた不幸が起るんですから驚ろくでせう。姉といふのが産後の肥立が悪く——死産したんださうですが、そのためたうとう亡なつてしまふ。さうすると今度は姉婿が脊髄病でどつと床についたといふのですから、まア一家は呪はれたやうなものですね。」

『まアほんとうにねえ。』と同情の眉が顰む。

「姉婿の家は可なり大きな足袋屋だつたさうですが、さういふ譯で商賣も出来なくなつたのでせう。店を畳んで山の手の方に移り、居食で小さく暮すといふ事になつたので、お豊も遊んでは居られませんか、手職を覚えこみ、自分の身の廻りは一切それで賄ふやうにして居る中、繚織も悪くないので、そここゝから縁談があつたさうですが、許嫁の男の死んだ時から多分生理的變化を來したのでせう。男がいやでくたまらないので、自分は頼のない姉婿の世話旁々獨身の生活を遂やうと決心し一切縁談を斷つて廿四の歳迄通して來たさうです。」

さうする中義理に迫られ、また姉婿の家に居悪いやうな事情も出來たので今の亭主に身を任せたとはいふのですが、やつぱりそれが失策で、私はどちらの缺點に基づく不幸か、斷言はできませんが、お豊は人の妻になつても、果して妻らしい感情を有つ事が出來ず、男に添つて居るといふ事が相變らずいやでたまらないといふので、それでも妻としての道は盡さなければならぬ

と、勉めて居る中、あの先刻脊中に負うて居た赤兒が生れたのです。

亭主といふのは戸籍役場の代書人とかをして居る男ださうですが、いづれ品性は下劣な奴でせう、是がまた殊の外嫉妬深く、お豊が前々から引續き職に行つてる先の男と通じてると云つては擲る、蹴る、髪を掴んで引摺廻すといふ亂暴を演ずる事は屢々で、今年三歳になつた女の兒まで情夫の胤だらうと云つて虐待するさうです。その癖自分では情婦を拵らへて、女房の稼ぐ錢まで捲上げてはその情婦に入揚る。そんな紛紜からお豊はますく世を果敢なんで、これまで二三度死なうと思つた事があるさうです。

ところで一方の姉婿の方ですが、これはその母親と二人暮し、今は財産も使ひ盡して、殆んどその日の糊口にも困つてゐるらしいです、お豊に取つては最早縁の切れた赤の他人で知らない顔をして居たつて濟む譯ですが、感心に良人に隠しては僅かな稼高の中から不具の姉に貢いで居たので、それをまた嫉妬深い良人が、何か情人に入揚るだらうと邪推しては、苛責の笞を加へるといふのです。

それがつい差迫つて、その姉婿の方に災難が起つて來たので、二十圓の金が出來なければ、明日高利貸に差押へられるといふ羽目になつたのですな。そこでお豊はそれを助けようと、良人に隠して祕て置いた七圓ほどの金子と親方に泣いて借出して來た十三圓の金子と合せ、漸や

二十圓を工面して、良人の歸らぬ中家を出様とする所へ、生憎と代書先生が歸つて來たので

大活劇が始まつたさうで、姦夫の兒を連れて遭ひに行くのだらうと、さんくなくりつけた末、奪つた廿圓を懷中にねち込んで、ふいと出て了つたので……お豊はたうとう赤兒と共に投身の覺悟を極めた譯なんです。

正木が語り終ると、ひどく動かされた倭文子は涙を漑へて、

『どうも何といふ可哀相な女でせう……まア亭主といふのは憎らしい男だわねえ。』

『さうです、憎むべき男です。併しこの話は何かの教訓を有て居るやうに思ひます。』と貞雄は倭文子を注視した。

倭文子も何か暗示を得たやうに俯むいたが、別に何も云はず暫らくして顔を擧げると、

『だけでも正木、二十圓のお金がなければ、お豊とやらは難儀をするでせう。』

『さうです。お豊には是非とも二十圓の金の必要があります。私はその位の金ならば、お嬢様がどうにでもして下さると慰さめて置きました。』

『さう、よく云つて下さつたわね。それぢやすぐ届けて來て下さい。』

『いや、それには及びません。お豊の亭主は今夜歸る氣遣はないといふので姉婿の家へは此方

が途になるさうですから、兎も角一緒に連れて來て、私の室へ入て置きました。』

『まアさうなの。』と驚ろいて『それなら正木、私がお金は持つてッて渡してやります。』

『さうですか。貴嬢が直接そのお金をお恵み下されば、當人はどれほどか喜ぶでせう。それでは一足お先へ行つて話して置ませう。』

貞雄は立つて行く。倭文子は箆笥の小抽斗を抜いて、其中から十圓紙幣三枚を取出し、二包にして室を出て行た。

正木の室へ行くと、お豊はすやく眠つて居る兒を抱いて、しよんほり坐つて居たが倭文子が入つて來たのを見ると、

『お、お嬢様？』と聲を震はせ『飛んだ御心配を頂きまして、何とも恐れ入りました。』

『まア、よく來ておくれたたわね。お前さんの事は、今正木から聞いて、貰ひ泣をして來たところです。ほんとに何といふ氣の毒な身の上だらうね。私は人事とは思はないよ。』とまたほろりとして、家のものがお前さんを助けたといふのも何かの因縁だらうから、これからまた身に餘るやうな事が出來たら、決して短氣な眞似をせずに相談にお出なさいよ。そしてこれは差當り入用のお金と、これは少しばかりだけでも小供の着物でも取つておくれ。』

お豊は涙に咽入りながら一方の包だけを収めて、

『御親切のお言葉を頂きまして、何ともお禮の申上やうもございません。このお金は明日に迫つて難儀の場合でございますから、お情に甘へて頂戴いたしますが、その上にまたお恵を受けましては、何とも心苦しいございます。これだけはどうぞお手元へお収め遊ばして——』

『いえ、そんなに遠慮するほどのものぢやないのだよ。ほんの私の志なんだから。』

『お嬢様もさう仰しやるから取つてお置き。』と正木は言葉を添へる。

お豊は漸やく受収めて、

『それでは頂戴いたします。このお情は死んでも忘れは致しません。何かの時にはきつと御恩返しを致します。それでは早速先方に喜ばしてやりたうございますから、これでお暇を——』

『兎に角僕が明日は御亭主にも遭つて、よく不心得を悟してあげるとしよう。』

『いえ、貴君、もう決してそんな御心配までして頂くには及びません。……飛んだお邪魔を致しましてごさいいます。』

お豊は情の露に、萎れた葉の蘇生つて、いそぐと邸を辭して行く。貞雄はお豊を送り出して室へ来て見ると、まだ倭文字は坐つて居た。

『正木、何といふ氣の毒な運命だらう。私は全く人事とは思はれないわ。女といふものは考へ

ると詰らないわねえ。』

貞雄はそれには答へず、

『お嬢様、私がお豊を助け上げた時、貴嬢は松平さんと御一緒に居らつしやいましたね。』

倭文字の顔は赤くなる。

『でも正木、松平様とは彼處でお目にかゝつたばかりなのよ。今日は藤乃さんと一番町の立花さんの處へ、同窓會の打合せにあがつた歸途、五番町を上つて來ると、あの方が馬車でいらつしやつたんですもの。』

『あゝさうでしたか。併し私はこのごろの松平子爵の舉動を怪しんで居ます。子爵は貴嬢に何か云はれたでせう。』と掛念の眼光で『今日お春が、松平家から貴嬢に申込のあつたやうに話して居ましたが、事實ですか。』

倭文字はそれを認めるやうに俯むいたが、言葉は無かつた。

『お嬢様、立入つた事を伺ふ失禮をお容し下さい。身分こそ違へ、私は血を分けた兄妹の間柄ほどに、貴嬢の將來をお案じ申して居るのです。』と眞摯に満た語氣で云つた。

『正木、私だつても貴君を……兄のやうに頼にして居るのよ。身分なんかそんな事を思つてはしませんから……どうぞいつまでも私の力になつて下さい。』とこれも力を籠めてしみく

云つた。二人は今までとても互ひに了解し合つては居たが、併し表面に打明けて云ひ出たのは今が始めてである。

雙方暫らく伏目になつて居たが倭文子の方が顔を擧げて、

『正木、私は今困つて居るのよ。』

『松平家からの申込に對してですか。』

『あゝさうなの。』

『貴嬢の意志に反して居るなら、お断りになればいゝでは有りませんか。』

『だつてお父様やお母様にお任せしてあるんだから……』

『お父様もそのお積なのです。』と驚ろき顔に云つたが、倭文子の首肯くのを見て、

『貴嬢は運命に服従するお考なので……？』

『それより外に途は無い時は……』

『私は力の及ぶ事なれば、この御縁談には断然反對します。』

倭文子はちつと貞雄の顔を見て居たが、

『それなら其通りにお父様に仰しやつて下さい。』

『場合によつては申上げませう。』

暫らく言葉なく、二人はまた思ひくの考に沈んだ。丁度そこへ十歳ばかりの可愛らしい令嬢——富美子が入つて來て、

『あらお姉様はこゝに居らつしやるんだわ。お父様が呼んでらしつてよ。』

『おや、さう。』と胸騒ぎのする風情で、訴ふる如く正木を見る。

『正木。』と富美子はその肩に縋つて『今歸つてつた女なの？ 身投をしようとしたのは？ してなぜ身投なんかしようとしたの？』

『それが——間違つた結婚のために、一生を過まつた女の運命なんです。』と正木は咬やいた。

『え？』と富美子には何の事か分らぬ『どうなの？ お姉様、さうでせう。』

『あゝさうですよ、富美さん。』と倭文子は淋しく首肯いて『であのお父様はお居間に居らつしつて？』

『あゝお居室よ。』

倭文子は富美子を殘して正木の室を出た。今夜は何か進まぬ足を父の居室へ運ぶのである。

奥羽の戦から十年の亂にかけ、勇名噴々たりし當年の鬼將軍は。今鬢髮銀の如き好翁と化して、

その美しくい髯を撫ながら、獨り碁盤に向つて石を下して居る。

髮こそ雪のやうであるが、血色はなほ壯者を凌ぐ許で、堅く結んだ口、眞一文字の肩、力の

ある眼光、廣い額、今もなほ昔ながらの面影を存して居るやうに見える。倭文子の入つて来た姿を見ると、鐵のやうな眼に和らかな光が宿つて、

「お、倭文か、さア坐るがよい。今聞けばお前と正木が投身者を助けてやつたさうぢやの。」

「ハイ、ですけどもお父様、正木一人で助けたのでございます。」

「ウム、さうかの、全體どういふぢや。」

倭文子は委細の事を父に語つた。この話の段落がついてから、

「倭文、お前を呼んだのは外でも無いがの。民からも話をしたさうぢやが、紀尾井町の松平からの縁談ぢや。そちはどう思ふかの。遠慮なく云うて貰はんで困る。」

倭文子は俯むいて、

「お母様には當分結婚の考が無いと申上りました。」

「いつまでもそんな事をいうて居つては困るの。不満足かどうぢや。」

暫らく返事が無かつたが、

「お父様はどう思召て居らつしやいます。」とかういふ倭文子の顔には云知ぬ苦痛の痕が描かれた。

「いや、そちの考を聞くのぢや。厭かの。」と父の言葉には優しさが籠つて居る。

「お父様。」と青白い顔に父を見て「私、お父様やお母様がお擇び下さる方ならば、どちらへでもまるる覺悟でございます。たゞそれに就て私、お願ひが——」

「ウム、何ぢや。」

「それは——お擇び下さるについて、充分にお調を願ひたいことでございます。」と詞を切つてまた「その上で嫁けと仰しやるなれば、どちらへでも快よくまるる決心でございます。」と言葉尻は消える様になつたが、よほど重大な意味に聞えたので、益荒は何か胸を刺れるやうな感じを覺えた。

「ウム。」と考へて居たが、改まつて「倭文、乃公が輕卒にそちの答を促したのは間違ぢやつた。この問題についてはなほ熟考する事にしよう。民が大層進んでるので、つひ乃公も誘はれたのぢや。」

倭文子はほつと思つたが、同時にまた眉が撃む。

「え、それではあのお母様がお進み遊ばして——？」

母は左程にも思つて居ぬのに、父の方が乘氣になつて居るのだと母からは聞取つた。今それと表裏であると知つた倭文子の胸には、又苦勞の種が蒔きつけられるのだ。

「なに、民の事は案ずるに及ばぬ。彼女もそちの幸福を祈つて居るのぢやから……いや倭文、

この話は當分見合せぢや。彼方へ行つてよい……序に正木を呼ぶやうに、誰かにいうてくれ
こ。』

倭文子はなぜか胸を騒がせて、

『あの正木に何ぞ御用でございますか。』

『ウム。』とばかり父は何も云はぬので、倭文子は繼穂なく父の室を出る。
すぐに正木が閨際に手を支へた。

『もつとこつちへ進んでくれ、少し聞きたい事があるのぢや、お前は紀尾井町の松平と學友ぢや
つたとかいふたの。』

『ハイ。』

『よく松平の人物を知つて居るぢやらう。』どういふ人物ぢや。お前の見る所を腹藏なく話して
貰はう。』

『併しそれは迷惑です。』

『迷惑ぢや。』と眼鏡越しに貞雄を見て『さうかの、併し正木、實は松平から縁談があつて迷つて
居るのぢや。それで前前の考へを借りたいと思ふのぢやが……』

『ハイ、それに就ての私の考へならば申上ります。お嬢様の將來の幸福のためには、斷然お見合

せになるが宜うございませう。』と力のある言葉で云つた。彼がかく語るには必らず其根據のあ
る事を態度に示して居る。

『ウム。』と男爵は穴の明くほど正木を見詰めて『なぜかの。』

『理由を申上なくて、お用ひが無ければそれまでです。』

益荒は暫らく腕を拱ぬいて居たが『正木、お前が學友の非を他言するのを好まぬといふなら
ば乃公も武士ぢや、必ず此胸だけに（と胸を叩いて）收めて置くから云ふてくれい。何もかも
倭文の爲ぢや。』

この最後の言葉は貞雄を動かすに力があつたに相違ない。考へた末、

『それならば申上ませう。私は或事情から松平子爵が學生で居つた間に或婦人の節操を弄ん
で悲惨な境遇に陥らした事實を知つて居ります。花柳社會に足踏するため、學生間から指彈さ
れた事實も有ります。大學の方は不成績のため半途に退學したのです。これ以上に立入つてお
話を申上る必要はございませぬ。子爵はお嬢様の將來を託するに足る人物ではありません。』
『ウム。』と太い息を吐いて『正木、よく云ふてくれたの。』

遠山藤乃が自分には母の小説的血潮が通つて居ると信じ、或は一生獨身で暮す運命を持つて居るのかも知れぬと語つたのは、必ずしも無意味に云つたのでは無かつた。それは丸四年ごし抱ける戀の、このごろいよ／＼根を下して行くばかりなのに、母の身の上へ思ひ合はされ、何とも知れぬ悲哀を誘はれるからで、藤乃のその戀は世のかいなでの浮たる戀ではなくて、極めて沈んだ戀なのであつた。

さらば藤乃は誰に戀をして居るのか？

藤乃の眼は小説的であると云つたが、小説的なのはその妙に人を惹つける眼ばかりでなく、藤乃の心も不思議に小説的に働らくところがあつた。藤乃が倭文子を始め見たのは足掛五年前、番町の學校で顔を合はした時で、それから一番仲の善い無二の友となつた。その五年以前、藤乃がまだ十七の時、始めて倭文子の邸へ誘はれて来て、丁度門のところ、高等學校から歸つて来た正木貞雄を始め見た時に、その小さな胸に一點の火が點ぜられたのである。

藤乃は浮いた性質の女ではない。殊に當時まだ十七の小娘の、少しも戀を解しては居なかつた。それにも拘はらず、貞雄の姿を一目見た刹那に、自分が將來良人に擇ぶべき男は、この青年の外にないと感じたのである。五年越の今日、藤乃の正木に對する感情には少しの變化もない。たゞ五年前に芽を吹いた初戀がいよ／＼培かはれて行くばかり。それにこれも母の血が通

つて居るためかも知れぬが、戀は楽しいものではなくて、悲劇であるといふ意識が常にどこかに働らいてるので、勉めてわが不思議の戀を打消さうとして見た。併しどうしても打消す事が出来なくて、今では切取る事も掘起す事も出来ぬ深い根を心の奥に下して居る。

尤も藤乃はこの戀は必ず末遂けられぬものとは思つて居らぬ。また目前に何等かの障害が潜んで居るものとも思つて居らぬ。或は此戀は無事に遂げられるであらう。藤乃は若し何の障りもなくこの戀の成就する事があれば、それは必ず倭文子の力であると考へて居る。少なくとも倭文子を最後の頼りにして居る。併し藤乃は意志の強い女で、嘗てわが戀を素振に表はした事がない。意志の力で烈々の情を立派に制へつけて居る。倭文子も藤乃が正木に戀をして居やうとは知らぬ、正木も五年以來戀はれて居ながら、又度々言葉も換しながら少しも悟らないで居るのである。若し倭文子が知つたら、正木が知つたら何なるであらう？

藤乃は丁度三月ほど見習家庭教師といふやうな格で、飯田町の伯母の宅から、毎日富士見町の梅小路邸に通つて居た。併しこのほどからは本極りになつて、全く邸内に起臥する身となつて居る。一寸こゝで伯爵家の家庭を説かう。

梅小路伯の一家は他人の想像して居るやうな幸福なものではない。伯爵は二十五の年に同族の間から貞淑な夫人を娶つたが、今から七年前に膠漆膏ならざりし最愛の夫人は三歳の女の兒

と當歳の男の兒を残して此世を先立つて了つた。伯爵の失望云はん方なく、その年に洋行の途に上つたまゝ、五年間歐羅巴に居たので、歸つて來たのは一昨年である。伯爵は今年三十六で、まだ若くもあり、殊にまた名門でもあるので、そちちから後妻をとの縁談の煩さいほどあるのを、亡夫人の記念なる二人の愛兒に憂目を見せじと、いまだに獨身を守つて居るのだ。

伯爵の父君はこれも十年前に世を去り、今は母君のみが残つて居るが、これは目下中風症で起臥さへ儘ならぬのを、その妹で寡婦になつた、伯爵の叔母なる不幸の婦人が來て世話をして居る。以上五人の家族に婢僕を加へて伯爵家の家庭は成立つて居るのである。

梅小路家と川上家とは、以前親類のやうに交際して居たので、倭文子の小さい時、善く富士見町の邸へ遊びに行き、伯爵からも亡夫人からも大變に可愛がられて居た。夫人が亡なつて伯爵が洋行の途に上つてからも、夫人の残して行つた幼ない兒等のいとしさに、倭文子は、度々見舞に行つて居た。伯爵が歸つて來てからは、妙に遠慮が出るやうになつたが、二人の兒が姉のやうに慕つて居るので、藤乃を世話をしてからは、またちよいと尋ねて行くやうになつた。殊に倭文子は伯爵には大變に同情を寄せて居るのである。

藤乃が來るまでは、伯爵家に年を取つた家庭女教師が居た。それが一身上の都合で暇を取て行つたので、藤乃の地位が出來たのである。藤乃の職務は二人の兒を監督し教育するにあるので、

二人が小學校から歸つて來る迄は格別用がないから、何でも自分の事をして居られる、藤乃は倭文子のためにこの好地位を得た事に最も謝意を表して居るので、また性來子煩惱である上二人とも珠のやうな愛くるしい兒なので、藤乃は始終二人を抱しめて居たい程に可愛く思つて居る。小兒ほど感情の鋭敏なものはないのに、姉とも思つて居る倭文子が、自分達に連れて來てくれたのだと思ふと、小兒はその日からもう藤乃に懐いて了つたので、今まで居た家庭女教師に對してはこんな感情は決して表はさなかつた。姉の瑞枝が今年十の富美子と同年、弟の勝人が八つの腕白盛りである。

伯爵邸の後園の芝生は、兒等の運動場に開放されて、木馬や鞦韆などの運動具さへ設けられてある。藤乃の監督の下にこの芝生の上を嬉々として幼なき者の駆廻る姿は美しく一幅の畫面のやうだ。殊に今日紫の袴を着けた、脊のすらりとした形の善い藤乃の姿に、晩春の風が來て、袂を軽く弄つて行く風情は繪も及ばぬ赴を見せて居る。兒等は遊び疲れたか、藤乃を拉して今葉櫻蔭の榻へ引張つて來た。

藤乃は二人にせがまれて一場のお伽噺を始めるのだ。恐らく小供ほど嗜好きな動物はあるまい。大抵な兒は噺さへしてやれば、大抵な時には機嫌が直る。少し舌が廻るやうになれば、繪さへ見ると噺をせよとせがむ。世間の母親は小供のこの好奇心を利用すれば、其品性を養なふ上

に多大の効果を擧げる事が出来やう。併し大抵は嘸をする事を煩さがつて、お爺さんやお婆さんに任せきつてある。藤乃はこの點を取取してお伽話からいろ／＼の智識を注入する方針を取つて居る。兒等の方でも普通の修身談が何かよりも、遙かに身を入れて聞く。その代り暇さへあるとせがまれる。端分煩さいと思ふ事もあらうが、藤乃はついぞそんな容子を見せる事がない。

今一くさりのお伽話が済むと、水兵服を着た勝人は、輪本を取つて來ると云つて、櫛を放れて駈出したが折柄丁度切戸を開けてこの芝生へ表はれた、薄紫紺色矢筈緋の縞縮緬に、小豆色の裾廻をつけた袴を着て、金茶地花丸模様の博多の丸帯を、お太鼓に背負あけた、上品な倭文子の姿を認めたので、

『あゝ元園町の姉様だ！』と叫んでその方へ駈けて行く。と見ると姉の方も飛んで行つて、右から倭文子の袂に纏つた。

倭文子は滾れるやうに笑傾けて、

『瑞枝さんも勝人さんも何をして居らつして？ いゝ先生が出來て嬉しいでせう。』

『僕は先生が大好きですよ。』

『私もさうよ。』と瑞枝も力を入れて云ふ。そして『アノ姉様、富美子さん連れて來て下さらな

いんと。』

『あの今日は廻り道をして來ましたから。今度こそきつと連れて來ますからね。』

勝人は繪本の事などは忘れて、大聲に、もう分つて居るのに。

『先生、姉様が來ましたよ。』

藤乃は榻の前に立つて、にこやかに倭文子を待構へて居る。

倭文子は姉弟の手を引きながら藤乃の前へ來て、

『藤乃さん、今も二人で先生が大好きだつて、私を見ると仰しやるのよ。私まアどんなに嬉しいでせう。』

『私もどうかと案じて居ましたのに、こんな嬉しい事はございませんわ。倭文子さん、ほんとに貴嬢にはお禮を申しますよ……ですけれどもね、この先ほんとに責任を盡せるかどうかと、たゞそればかりが案じられますわ。』

二人は幼兒を挟んで腰を下した。

『いゝえ、貴嬢なら大丈夫よ。勝文様も大層満足して居らつしやるのよ。』

二人の對話は兒等の爲に妨たけられた。暫らくは幼なきものゝ相手をして無邪氣に笑ひ興じて居たが、その中に姉弟はまた芝生の上へ駈て行く。

「錦子さんはあれからまたいらしてっ。」

「は、あれから一度入つしやりました。あの方はヴァニチーに富んで居らつしやるから、お心ではきつと繁々尋ねて入らつしやりたいのでせうよ。ほ。」

「さア、どうですか。それでも淡泊な、露骨な方だからいゝわね。」

「あゝ、それはほんとにさうよ。こゝへ入つしやるのでも、私よりか伯爵殿様にお目にかゝりたい御希望で居つしやるのでせう。いゝえきつとさうですの、この間なんか、一度でも伯爵夫人になつて見たいつて……それは冗談のやうには仰しやつたのですけども——それでもさう仰しやるだけ罪がありませんわね。而して殿様の事を根掘り葉掘りお尋ねなさるから、私は最早夫人をお迎ひ遊ばすやうな事はあるまいと申しましたの。」

「そりや錦子さんを夫人になさるやうな事はどうあつてもねえ。」

「それに第一お身分が違ふのですもの——」

「併しお身分の事などは、何とも思召して居らつしやらないかも知れません。」

「でも貴嬢、由緒のあるお家柄ではございせんか。」

「えい、それはそうですけども……」と倭文子は何か語らうとして逡巡つた後「藤乃さん、貴嬢ぢやないけども、もし勝文様にも御両親の小説的の血が通つて居らつしやるなら……私こそ

んなお身分の事なんか——」

「えっ」と藤乃は驚ろき顔に口を挿む。

「でも御両親の御結婚の事情は、全く小説的なのですもの。」

「まアさうでございせんか」と藤乃は好奇の眼を睜つた。

「貴嬢ですから申上ませう。御隠居様——お母様のお身分は、士族は士族でも極く身分の卑いものゝ娘で、夫人になさる當時、御親戚中ではどうしてもお邸へは入れぬといふのを、先伯爵が無理にお入なすつたのださうですが——何でもその前にも色々込入つた小説的の事情があつたさうでございせんよ。で夫人になすつてからも、まだ御親戚からの壓迫がひどく、御隠居様は云ふに云はれぬ御苦勞を遊ばしたさうですの。勝文様はそんな事情を御存じですから、それなほど御隠居様を大事に遊ばして居つしやるんですわ。ま、さういふ譯ですから、假に二度目の夫人をお迎ひ遊ばすにしても、固苦しいお考へは有て居らつしやらないだらうと存じますの。」

「まアさうですの。御隠居様はそんな御苦勞を遊ばした方なんでございせんかねえ。」と藤乃はひどく心を動かされて云つた。こゝにも戀の悲劇の例を見出したと思ふのであらう。

二人は話に氣を取られて居たが、

「お父様だ？」と呼ぶ勝人の高聲が耳に入つて、其方を見るとシガーを唾へた伯爵梅小路勝文の姿が芝生の上へ表はれた。濃い口髭を生じて眼鏡をかけた、品格のある中肉の、凛々しい紳士で、大島を着流した其風采に少しの厭味もなく、紳士らしき紳士と評されて居るのも、成ほど首肯れる。

勝文はすぐ倭文子を認めて、此方へ進んで来るので、二人は榻から立上つた。

「倭文子さん、貴嬢のいらつしやつた事は、少しも存じませんでした。」

「ハイ、すぐお庭先から廻つてまゐりましたから……」

此時父の後からバタンと瑞枝と勝人が駈て来たが、いきなり藤乃の右左に縫つて二人とも息をせい／＼云つて云る。勝文はさも満足らしい微笑を浮べたが、

「勝人、そんなに先生に煩さくするものではない。」

「だつて姉様も煩さくするんですもの。」

「瑞枝もいけません。併し勝人は亂暴だから……」

藤乃は勝人の背を撫で、

「いえ、ようございませぬ。たんと煩さく遊ばせよ。」

「我儘に育つてますから存分に矯正して下さい。」二人が立つて居るので「お掛なさい。倭

文子さん。」

「いえ、貴君こそどうぞお掛遊ばして……」

「あのお椅子を取つてまゐりませう。」と藤乃は十歩の彼方に置かれてある藤椅子に目をつけた時、

「僕がお父様の椅子を取て来て上やう。」と勝人が走る後から、瑞枝も行つて二人がかりで椅子を持つて来る。

「お、これはよく持つて来てくれたな。それでは掛すばなるまい。」と笑はれて腰を卸す。とその膝の上に勝人がちよこなんと乗かつた。

「あ、お父様よりもお前が掛たかつたのだな。あは、ムム。」

藤乃も倭文子も聲を合はして笑つた。瑞枝は不平で、

「あら勝人さんはずい、いわ。」

「おほ、瑞枝さんは私が抱こしてあげませう。」と倭文子が瑞枝を抱寄せて榻に着いた。

「ウ、ン。」と勝人は鼻を鳴したがすぐと「善いや、僕は男だからお父様に抱れるんだ。」

二人の兒等の睦んで居る姿は、伯爵に取てどれほど清い慰藉であらう。何でもないこの場の光景が、いたく藤乃の心を惹くのであつた。

『遠山さん。瑞枝も勝人も貴嬢を母のやうに慕つて居ります。幼ないものに取つても私に取つても、これより以上の満足はありません。私は倭文子さんの前で、又小供の前で、改めて貴嬢に感謝の意を表します。』と美しく笑んで『また倭文子さんにはお禮の言葉が有りません。』
藤乃は當惑の面色で、

『あれ、そんなに仰せられますと、私、全く御挨拶が……不束もので経験も何もございませぬのですから、實際責任を盡す事が出来ますかどうかと、たゞそればかりが案じられてなりません。どうぞ足らぬところはお心添遊ばして……幾重にもお指圖を願ひました上、それにお縋り申して、身に及ぶだけの努力を致す積でございます。』

『いや貴嬢ならば安んじてお任せ申す事が出来ます。どうぞ將來とも長く二人の力になつて下さい。』

藤乃は軽く俯むいたが、伯爵が斯ほどまで自分を信頼して居るかと思ふと情に鋭い女のひどく感激すると共に、俄かにまた心の重くなるのを覺ゆるのであつた。

話が沈んだので、
『倭文子さん。』と勝文は氣を換て『牡丹が一ツ二ツ咲始めました。どうです花壇の方へ御案内致しませう。遠山さんも入らつしやい。』と勝人を膝から下して立上がる。

『おや、左様でございますか。それは定めてお美事でございませう。』と倭文子は藤乃と榻を放れた。

『次の日曜日に園遊會を開きます。全く家族的にするつもりで、いづれ御案内は致しますが、皆さんで入らつしやつて下さい。』

この時小間使が藤乃の傍へ来て、一葉の小形の名刺を渡した。藤乃はそれを手に取つて、
『おや、錦子さんよ。どうしませう。』と倭文子を見返る。

小耳に止た勝文は、二人が逡巡つて居るのを見ると、
『錦子さんと仰しやるのは、この間お目にかゝつた立花さんでせう。こちらへお呼びになつたらどうです。』

『よろしうございますか……ちやさう致しませうか。それでは貴嬢、こちらへお連なすつて下さいまし。』と小間使を返して藤乃は倭文子と目を見合せたがにつこり、小聲に『でもいゝところへ入らつしやつたわねえ。』

『どれそろく彼方へまゐりませう。』と伯爵は歩み始める。
『さア瑞枝さんもいらつしやい。』と倭文子は瑞枝の手を取つて、靜かに勝文の後に續いた。
紫の花の匂ひそめた藤棚の下へ来て、暫らく立留つて居る處へ、勝色地のお召縮緬へ、銀鼠

色の瀧綺を織出した派手な袴を着て、友仙風の蝶を二三羽縫せた、クリーム色セルカン織の丸帯を締めた錦子が、水色シホンのショールを手につけて、小間使に案内されて来た。

錦子はまづ藤乃と倭文子に會釋した後、やゝ離れて立つて居た伯爵の方に進んで、

『おや、殿様で居らつしやいましたか。先日は伺ひまして誠に失禮を致しました。』

『善く入らつしやいました。今倭文子さんに牡丹を御覧に入れ様とするところです。幸ですから貴嬢も御一緒にいらつしやい。』

『おや、大層善いところでございました事。それでは是非お供をいたしませう。』と倭文子に向けた錦子のバツチリした眼は、瑠璃のやうに浮渡る。すぐその可愛らしい眼を瑞枝と勝人の上に移して、滾れるやうに愛嬌作り、

『まア姫様、若様、お可愛らしく居らつしやいます事！ お人形さんのやうでございますわ。こんなお可愛らしい方をお相手には遊ばして、藤乃さん、貴嬢はほんとお合せでございますのね。』

錦子は實際に羨しいと思ふのであらう。

『アノ若様。』と勝人を抱へるやうにして『私のところにも丁度若様と同じ年位の弟がございませよ。いたづらものですけれども連れて上つたらお遊びして下さいませうか。』

『あゝ僕はいくらでも遊びますよ。』

『さう、それではいつか連れてあげりませうね。』

『まアいらつしやい。』と主人の伯爵は藤棚の下を放れる。

そこを廻ると程なく牡丹の花壇で、凡そ二百株ばかりを、葎張の蔽の下に區劃をつけて植込んである。なか／＼美事な華壇で、これだけに育てあけるには少し許りの丹精ではあるまい。併し花はまだ二三輪より、咲いて居らぬ。

『どうもまア美事でございますこと！』と錦子はまづ花に見とれる風をする。

『折角御覧に入れても、花はまだ殆んど咲いて居りません、丁度園遊會のころが眞盛りになりませう。』

『おや、園遊會を遊ぶのでございませうか。』

『日曜にやります。貴嬢もお遊びにお出下さい、至つて平民的な寄合にする筈ですから、どうかそのおつもりでいらつしやるやうに。』

『ハイ、難有うございます。それでは是非あがる事にいたします。今からまアどんなに楽しんでございませう。』と嬉しさを包むに餘る風情である。

『随分澤山な種類でございませうね。』と倭文子は左右を見渡しながら云た。花の如き人は打連

て、華壇と華壇の間の、花の中を分入るのである。

『こゝには、六十種ばかりあります。全體の種類は百二十もありません。苗は皆大阪の池田在から取寄たのです。彼地が牡丹の本場ですから、四ツ目の牡丹などもみな大阪から引くのです。』

『おや、さうでございますか。』

『始めて伺ひました。』

『お父様、牡丹は支那から渡つて来たんでせう。日本には無つたのですね。』

『おゝ、勝人はゑらい事を知つて居るな。全くその通りなのだ。』

『だつてお父様、勝人さんは先刻先生にお話して頂いたのよ。』

『あは、さうか、それで知つて居つたのだな。』

『でも勝人さん、よく忘れずに覚えて居らつしつてね。』と倭文子に賞られて小公子は得意の態。華壇の前には毛氈を敷いた床几が置かれてある。華壇の中を出ると、伯爵と倭文子はまづ床几へ腰を下した、錦子は立止つて何か小聲で藤乃に話しかけて居る。

伯爵は鷹揚に、

『さア立花さん、暫らく御休息なさい。』

『ハイ。』と云つたが錦子はもじもじ。

藤乃は勝文の前へ来て、

『殿様、あの立花さんが、ピアノを伺ひたいと、熱心になつて居らつしやいます。』

錦子は面はゆけに小腰を屈めた。

『は、ア、ピアノですか。』と伯爵はたゞ打笑ふ。

『アノどうぞお聞せ遊ばして——』と錦子は全く熱心である。

『私も伺ひたうございます。』と倭文子もこれに和した。

『それでは遠山さん、貴嬢、何かヴァイオリンをお弾なさい。私が伴奏いたしませう。』

『あれ、私はヴァイオリンなどは逆も伴奏をして頂くやうな——学校の唱歌位しきや弾は致し

ませんもの。』

『それなら私も同じ事です。』と笑つて『それでは兎に角音楽室まで御案内しませう。』と伯爵は

床几から立上る。

藤乃はためらつて、

『あの私、お庭でお二方のお相手をいたして居りますから……』

『さうして貴嬢は逃るつもりですね。それはいけません。』と勝文は笑つて『二人は暫らく放任

してお置なさい。瑞枝、お前勝人と一緒にお婆様のところへ行つて、先生から伺つた面白いお話を聞かせ申すがよい。お婆様はどんなにかお喜びなさるから……』

瑞枝は領づいて勝人の手を取りながら、睦まじく花壇の前を立去り行く。

『遠山さん、貴嬢のお身體は暫らくお樂です。』

『ハイ。』と羞かしげに笑んで伯爵の後に続いた。

伯爵家の建物は日本式のものに、洋風のものを取合せたので、伯爵自身の書齋として、西洋室を選び、これに隣つた室を音楽室として用ゐてある。音楽は伯爵の最も嗜むところで、亡なられた夫人もピアノの上手であつたが、今備へつけてあるグランドピアノは夫人の忘記念なので、伯爵が毎日必ず二時間をこの音楽室に費やし、そしてこのピアノに馴染んで居られるのは、ピアノが好だからそれに耽るといふだけの、單純な意味からでない事は明らかに看取される。伯爵のピアノがインスピレーションに充て居ると云はれるのも、伯爵の心の底に潜む悲哀の情緒が、樂の音にその噴火口を求むるためであらう。

三人の淑女は導びかれて、華やかな繡珍張の椅子についた。錦子はこの室へ入るのは始めて、その美しい裝飾にまづ心の時めきを覺ゆるのである。

伯爵はモロツコ皮のケースからヴァイオリンを取出して藤乃の前に持て來ながら、

『さアこれは貴嬢のです。』

『あれ、私には逆も……錦子さんはピアノを伺ひたいと仰しやるのでございますから……』

『いゝえ、藤乃さん、貴嬢のも伺ひたい事よ。』

『あら、錦子さんまでが、そんな事を仰しやつて……』

『あは、それでは私が何か小手調をやりませう。』とかう云ひつゝ勝文はピアノに對し樂譜を繰廣げてフォーストのファンタシーを奏で始める。藤乃は譜の頁を返すべく、ピアノの傍に席を占た。

銀鈴を轉すやうな音が鍵の上を滑り出る。三人はしんみりとして聞惚れる中にも錦子は伯爵の美しく、感情の漲る横顔を見詰て、夢のやうに恍惚となつて居る。メロジの處は幽冥界の底までも惹つけられるやうで、一轉して急絃涼々の妙處になると、指はたゞ鍵の上を飛ぶかと思へ、そこら中には室の中にも外にも目に見えぬ天使が群り飛びめぐつて居るかのやうな、何とも云へぬ美しい感じを、聞手の心の底に浸込ませるのである。弾じ終ると今迄息もつけなかつたのであらう。三人の口からほうと長い溜息が漏れて、

『まア難有うございました！』會釋をして伯爵を見た錦子の眼は融るやうであつた。

今日は梅小路伯爵邸の園遊會當日である。伯爵家の親戚知人等重に親しい間柄の家族を、儀式立たず平民的に招待し、われ人共に楽しく行春の半日を過さうといふ趣意で、無論來賓にもシルクハットや白襟紋付にきまつたのではないが、其家族的といふだけ婦人が最も多く、殊に可憐な服装をした男女の兒の、多く連れられて來て居るのは、主人方に瑞枝勝人の二人があるからであらう。いろいろの模擬店も出來て居る外に、玉ころがしや達摩落し、輪投福引などの餘興があつて、姫様若様達が大喜びなばかりか、鬚の生えた叔父さんや、丸髷の奥様の、興に乗じて他愛もなく笑ひこける聲さへそここゝに起つて居る。

花壇の牡丹も丁度今日あたりが眞盛りで、濃艶の色、芳烈の香正に人を酔はしむるものがある。その花の中を装を凝した貴夫人令嬢の練つて行く有様はいづれが花、いづれが人、暮行く春をたゞこゝもとに繋ぎ止めたかと許り艶めかしい。

立花錦子は無論待かねて居た事であらう。今日はまた特別に新粧を凝して來て居る。紫氣の少ない桔梗色眞田縮緬の三所紋、裾には寫生風の百蝶を華やかに友仙で染出し、それに色糸で派出な縫を入れた二枚重ねの袷に、白の湖絹縮へ同じ蝶の模様を縫のみで表はした半襟を、

剛石の入つた襟止で止め、帯は白地紋鹽瀬に、芭蕉の葉を大きく金銀で箔捺にし、それに蜻蛉をあしらつたのを、朱藍色紋緋の帯揚で背負あけた。帯や帯揚や衣服の取合せが一際目立つて華やかなのに、銀線の平戸の蝶と眞赤な大輪の西洋花を挿して、水色のリボンで髪を派出に結んだ麻髪の揉上から少しばかり、態と縮らした毛を下て、白いが自慢の顔にはこれも態とばかりの薄化粧、首掛の細鎖を襟からかけ、指にも金剛石を輝かせて、紫表の雪踏を穿たハイカラ風、今日の來賓の中にも殊に目に立つ姿であつた。

倭文子は母が差支があるとの事で、富美子を連れ、父の益荒と共に錦子より早く來て居た。これは櫻散しの紋縮緬に、瀧縮風に山嵐の入つたのを、薄小豆色に染た無垢の二枚重ね、半襟は白鹽瀬へ金糸で、光珠風の楓を影と日向で縫取したのを掛け、帯は薄色納戸の唐織へ落の葉を金糸と色糸で配置よく織出したのを、藤の花を紅交りに縫取た白縮緬の帯揚でお太鼓に結びあけた、上品を主とした出立に、髪はエス巻の前髪を純白のリボンで結び、三枚揃だけを挿して、千代田草履を穿た姿、どことなく品位に富んで、また人を惹く別様の趣がある。今咲く花に譬論を取れば、錦子は牡丹の濃艶なるもので、倭文子は瀟洒たる藤の花の、床しき色を示したものである。

藤乃は今日は小さな來賓の保母の役目、お召納戸色三ツ紋の紋羽二重に、海老茶カシミヤの

袴を着た相應しい姿で、遊戯のお相手をしたり、怪我や喧嘩のないやうにと監督をして居る。自から樂はあつても定めて氣苦勞な事であらう。倭文子と錦子は暫らく藤乃の傍に無邪氣な兒等の遊戯を見て居たが、そこを放れて靜かな庭の方へ行かうと、連れ立つて藤棚の下を歩き過ぎた。

恰度その時藤棚の下の陶器の椅子に腰を卸して、話をして居る二人の軍服を着た紳士があつた。一人は海軍中佐の服装で、一人は陸軍少佐の肩章をつけ、参謀の飾緒を下た三十一二の體格の大きな而して八字鬚の末をはね上た、眼の鋭い軍人らしい立派な男である、二人は頻りに話をして居たが、参謀少佐はふと今自分の傍を歩き過んとする、倭文子と錦子の姿を見ると、話をビタと止めて、じつとその方を見入つたまゝ、二人が行き過つても尙茫然としてその後姿を見送つた。

海軍の士官は笑ひながら相手の肩をトンと叩いて、

『おい久松君、どうしたのだ。』

久松参謀は始めて此方を見て、

『實に美人だね。ウーム。』と溜息を吐く。

『どうだ、歐羅巴にもあるまい。場中に異彩を放つて居るのは全くあの美人さ。』

『あんなのは歐羅巴にはない。』とまた美人の後を見たが、その時は最早二人の姿は隠れて了つた。参謀少佐は啞然として、

『妻を娶らばまさに陰麗華を得べしだ！』

『どうも大變な執心だね。僕は先刻伯爵からあの美人に紹介された。何でも立花とかいふ紳商

の娘ださうだよ。』

『紳商の娘だ！』と考へ込んで『全體君のいふのはどつちだ。』

『どつちつて何さ、蝶の裾模様を着たハイカラの方さ。』

『いや違ふ。僕のいふのは今一人の方だ。』

『えい、さうか。』と海軍中佐鍋島は驚ろいて『ウム、あれも美人だ、あれなら僕のよく知つてゐる女で、元園町の川上少將の令嬢さ。』

『なに川上少將？ 川上益荒……か。』

『ウム、さうさ。倭文子さんといふのだが極めて貞淑な令嬢だ。』

『どうだらう。僕に吳なからうか。』と久松は眞面目である。

『僕には分らん。併し君にその意志があるなれば、目的を達する事が出来るかも知れんよ、今日は川上さんも来て居つた。兎に角君を紹介しようか。』

「是非頼む。」

「ちやアこつちへ來給へ。」と鍋島が立上る後から久松も腰掛を放れる。

二人は廣い庭内をそここゝと尋ねて歩たが、やがて築山の後へ廻つた時、恰かもその築山の上の四阿から下て來た益荒に出遭つた。偶然に遭つたやうに鍋島は二三の言葉を交したが、忽ち思ひ出した風で、

「おゝ閣下に御紹介いたしたい友人がございます。」と久松を顧みて「此間歐羅巴から歸つて來た久松喬君です。久松君。川上少將閣下で——」

益荒は見惚たやうに、久松の軍帽から靴の先までを見下して、

「おゝ貴君が久松さんか。かねて黒木からも聞いて居りました。今日はよくお出なすつたな。」と自から握手を求めぬ。

「ハイ、鍋島君に連れて來られてまゐりました。閣下に拜顔を得ましたことは何よりの光榮です。」

「いや、乃公も愉快じや。鍋島さん、どうです。ビールでも一杯やりませうかな。」

「我々は今充分伯爵に強ひられて來ましたので——」

「それでもよろしいぢやらう。久松さんには彼地の話も聞きたいものぢや。」

丁度こゝへ錦子に分れたと見えて、倭文子が只一人、父を求むるかの様に来かゝつたが、二

人の軍人の姿を見てためらつた。鍋島がまづ認めて、

「おゝ倭文子さんです。」

かう注意されて益荒はその方を見たが、

「おゝ倭文か。こゝへ來い。」と願で差招く。倭文子は父の傍へ來て閑雅に二人に會釋した。益

荒は笑傾けて、

「よいところへ來てくれた。久松さん、乃公の娘ぢや。どうかお見知り置き下さい。」

久松は帽子を取つて、丁寧に倭文子に會釋して、

「參謀本部に居る久松喬といふものです。今後はお心易く願ひます。」

「始めてお目にかゝります。どうぞ私こそ——」と倭文子は靜かに挨拶する。

鍋島はそれを機會に、

「それでは陛下、いづれ二三日の中久松君を連れてお邪魔にあがりますせう。」

「おゝそれではさうして下さい。お待ちして居ますぞ。」

鍋島は残り惜けの久松を拉して立去る。

「どうだい、巧い順序に行つたらう。それで二三日の中に君を連れてつてやる。川上さんもうどうやら君に惚込だらしいぜ。今度行けばきつと令嬢を接待に出すだらう。」

『併し僕に呉るだらうかな。僕に呉なければ行つたつて詰らん。』

『さう短兵急に云つたところで仕方がない。かういふ事は徐ろに機を待つべし。』

二人は話しながら植込の中を行過ぎる。

子爵松平亮二郎もこの日の園遊會に招かれて来て居た。彼は今鍋島と久松の二人をやり過ぎて植込を横ぎらうとする時、彼方にほんやり立つて居る錦子を認めためたので、

『おゝ立花さん、何をほんやりして居らっしゃいます。』

『おや、松平様。』と不意だったので、錦子は顔を振らめて『いえ、あの……ちよいと休んで居るところでございます。』

『貴嬢がさうして居らつしやるところは、實に萬緑叢中の紅一點ですな。』

『あれ、存じません。』

『いや、實際です。今日は貴嬢が注目の焼點で、鍋島などはすつかり貴嬢に魅されて居ますよ。』

『あれ、またそんな事を仰しやつて、お擲擲遊ばすものではございませぬ。』

『全くですから仕方がありません。鍋島ばかりぢやアないですよ。』と笑ひながら『私でも貴嬢の足を接吻しろと仰しやれば、喜んで接吻します。』

『そんな事を仰しやつてもいけません。貴君はお心にもない事を仰しやるのですもの。』

『これは怪しからん。心にある事が無い事か。どうして貴嬢にお分りですか。』

『それはちやんと分ります。私にそんな事を仰しやつても、ほゝ、お門違でございませぬもの。』

『お門違ひ？ いや、分りませぬな。』

『お分りになりませぬの。貴君は私のやうなものに、お目などをかけてはいらつしやいませぬ。』

『それでは誰に目をかけて居ると仰しやるんです。』

『それは——申しますまい、ほゝ。』

『はゝ、仰しやれない譯だ。そんな事を仰しやるなら、貴嬢だつて私などにはお目をかけて居らつしやいませぬからね。』

『あら、そんな事が——』

『では圖星を申して見ませうか。』

亮二郎は何も見極めをつけて云つたものではないらしい。併し錦子は、

『えゝ。』とどきまぎして『そんな事は、何を仰しやるのか、私にはちつとも分りませぬ。』

『まア云はぬが花ですかね。はゝ。』と笑つて『併し立花さん、あちらの方へ御一緒にまゐりませうか。』

「ハイ御伴をいたしませう。」と楣ある態度をして亮二郎に引添った。

二人は歩を移しながら、

「貴嬢は大層音楽がお好ださうですね。」

「は、貴君は如何でございます。」

亮二郎はそれには答へず、

「殊にピアノには御執心なさうで——」

「え。」とどういふものか赧くなつたが、澄して「ピアノも大好でございます。」

「梅小路から貴嬢のピアノのお好きな事を聞いて居ます。」と錦子の顔を見返る。

「おや、さうでございますか。」と俯むいて何気なく紛らせる。

二人はそのまゝ三四歩歩いたが、

「おゝ、立花さん、貴嬢のお妨げをするでもありませんから、私はあちらの方へまゐりませう。」と子爵は忽ち右へ分れた。

何か餘り突然に感じたので、錦子は立止つて子爵の方を見返つた。亮二郎は木立の中を分て早足に行くのであつたが、何か目的物があるらしいやうに思はれたので、なほその方角を隠し

て見ると、木立を出た築山の裾は人氣のない蔭になつて、紫の山躑躅の咲いてる中に、今一人で進み入る倭文子の姿が目に入つた。さてこそ亮二郎は倭文子を認めたので、自分に分れて行つたのだと思ふと、何とも知れぬ嫉妬心が起つて、

「やつぱり倭文子さんを追つてたのだ、あゝ悔しい。」と足踏をしたが、それでも思ひ返して「だけでも松平さんならいゝわ。あの方と伯爵とはとても——」

かう云つたが亮二郎も今躑躅の中に隠れて了つたのを見ると、何か法界悋氣で悔しくつてたまらぬやうな氣になる。ちつとその方を見つめてなほ佇んで居る時、

「立花さん、貴嬢、お一人ですか。」と後から聲をかけられて驚ろきながら見返ると、それは主人の伯爵だつたので、

「おや、殿様。」とまた頬を彩どりながら、われを忘れて勝文の前に寄添つた。

亮二郎は躑躅の中で倭文子に追つた。川上家からは民子夫人が曖昧な挨拶をしたので、彼はまだわが縁談に望の無いものとは思はず、倭文子さへ動かせば、この上どうにもなるものとの考を翻さないのであつた。

「倭文子さん、一寸お待下さい。」と後から呼びかけると、

『おや、松平様』と赧くなつて倭文子は途方に暮ながら佇んだ。

『こゝで貴嬢をお見かけ申したのは幸いです。』と亮二郎が何か語り出さうとする時、がや／＼と騒がしい聲が起つたかと思ふと、

『おゝ姉様がこゝに居た？』と勝人を先登に、同じ位の男の兒と富美子と瑞枝がどや／＼と倭文子を取巻いた。

『さア姉様、遊戯のところへ来て下さい。』
倭文子は救はれたのである。

(五)

樂しかりし園遊會の日は暮れた。瑞枝や勝人は晝の遊び疲れで早くから床に入つて了つた後、に藤乃は用事が無いので、たゞ一人圖書室に入つて居た。藤乃は自由に伯爵の圖書室に入る事を許されて居たのである。

暫らくは何かの調べものをして居たが、室を隔て、先程からピアノの音が聞えて居る。音楽を嗜む身の、つい聞惚れて安樂椅子に寄つたまゝ、聞耳を澄し始めたが、さうかうする中次第に晝の疲れが出て来て、何が眠いやうな、夢を見て居るやうな、恍惚と何とも云へぬ心持になつ

て、椅子を離れるのが懶くなつて了つた。

藤乃はかゝる状態の下に二三分を費やしたらう。ハタとピアノの音が止んだので、始めてわれに返つたが、猶懶くて椅子を離れる氣にならず。其儘暫らく身を横たへて居る時、忽ちハタ／＼と入口の方に登音がしたので、氣がついて見返るとそれは思ひ掛ぬ伯爵であつた。

『おや、殿様。』と藤乃はわが不謹慎の態度を恥ぢて顔を赧らめながら、安樂椅子を滑り下るのを、勝文は笑顔に見やつて、優しく、

『藤乃さん。そのまゝにして居らっしゃい。』

伯爵が藤乃の名を呼だのは始めてである。

『いゝえ、ちよいと調べものにまるつて居ります中、あまりピアノの音が好うございましたので、ついつつとりと——』

『ちやア彼方へ入らつしやれば善つたのでした。さアどうぞそのまゝかけて居らつしやい。』と自分は手近の椅子を引寄せた。

『いゝえ、あの、もう調べものも済ましたから……』

『それならなほいゝではありませんか。私も格別用事ありません。お差支が無ければ暫らく掛けて下さい。』

優しい伯爵の言葉に動かされて、藤乃は會釋して小さく他の椅子の端に腰を卸した。

『今日は貴嬢には大變にお骨折を願ひました。よくお世話をなすつて下さつたので、小さな人達がどんなに面白く遊んだか知れません。併し貴嬢は嘸ぞお疲でしたらう。』

藤乃は伯爵にこれほどの思遣があれば、如何に身を粉に碎いても遺憾なしと思ふのである。

『いゝえ、一向行届きませんで……私は別段に疲れるほどの事はございません。却つて大變に樂しみをいたしました。貴君こそ嘸お勞れ遊ばしたことでございませう。』

『なに私は至つて暢氣なものでした。』

『みなさまが大層御満足遊ばしてお歸りになつたやうでございます。』

『大勢の小供を愉快に遊ばして下さつた事が、私に取つては何よりの満足です。』

『でもそれは私の力ではございません。』

話の暫らく途切れた後、

『藤乃さん。』と伯爵はまた名を呼びかけて『貴嬢に折入つてお話しして見たいことがあります
が……』

『は……』と伯爵の顔を見たが、藤乃は何の事とも測りかねながら何か改まるやうに覺えて伏目になつた。

勝文は一寸逡巡つて、

『外でもありませんが……私の一身上——といふよりは寧ろ二人の子の上に関した事で——今日まで充分利害を考へて見た上、思ひ餘つて貴嬢にお打明申すのです。』

どうやら重大の事らしいので、藤乃は胸を騒がせながら、

『どんな事でございますか、私が承まはりましたも——』

『たゞ貴嬢の力にだけ出来る事です。併し貴嬢が御承諾下さるかどうか、私はそれが案じられるので——』

『でも私に出来ます事なれば——』

『併し貴嬢に出来る事でも……これは事柄が違ひます。私が申上ぬ中に、お請合なさる事の出来る性質のものではありません。』

藤乃は無言で俯むいたが、心臓の鼓動が高まつた。

『遠山さん。』と勝文はやゝ重い調子で徐ろに『之は私に取つて重大な問題で充分利害を考へ抜いた上、御話に及ぶ次第なのです。併し貴嬢に取つてもまた同様重大な事柄と信じますから、決して御即答を願ふといふのではありません。たゞ私は眞面目に御相談をするので貴嬢もお聞取の上は、どうか眞面目に御考を願ひたいのです。』と力を籠めて云つた。

「ハイ。」と云つた藤乃の身體は幽かに震へる。

「私はいつも二人の兒の上を考へて居らぬ事はありません。小供等の品性をどうして陶冶するか、小供等に家庭の幸福をどうして與へられるか——寢ても醒ても思を費やす問題は夫です。ところが貴嬢に来て頂いてから、瑞枝や勝人の性行に、善い傾向の表はれて来たばかりか、二人は今これまでに味はふ事の出来ぬ幸福を味つて居ります。姉弟は全く貴嬢を姉のやうに母のやうに慕つて居りますが、貴嬢にもそれはよくお分りでせう。」

「藤乃さん、小供はそれほどに貴嬢を慕つて居ります。けれども貴嬢はいづれ他へ嫁せらるゝに極つたお身體で、さうすれば小供はいくら貴嬢を慕つて居つてもお分れしなければなりません。そしてそれは必ず遠からぬ來來に起るでせう。私はそれを考へていろ／＼煩問した末、小供の幸福のため、若貴嬢を事實上母としてやる事が出来れば、私に取つてもどれほど幸福であらうと考へて見たのです。」

勝文は熱心にかう云つて、藤乃の顔を見た。藤乃は破裂するかと思ふばかり、又も昂まる心臟の鼓動を覚えるので、顔は上氣した儘暫らく俯むいて居たが、纏て口籠がちに、

「私のやうな不束ものを、それほどまでにお惜み遊ばして下さる思召——私身に取つて……お禮の言葉もございません。お二方が不思議に私のやうなものをお慕ひ下さる——それもよく存

じて心には泣いて居ります。たゞそれにつけ教育上の經驗も智識もない私がいつまでもお附添申して居りましては、却つてお二方のお爲によろしくあるまいと、このごろはそればかりを案じて居るのでございますから……」

藤乃が尙云ひ續けやうとするのを遮つて、

「それは貴嬢の謙遜です。いくら教育上の經驗や智識のあるものでも、小供に對する貴嬢のやうな親切と同情がなければ、安んじて小供を託する事は出来ません。私は將來長く二人を預つて頂く事が出来さへすれば、この上の幸福は無いと考へて居るのですから——」

「殿様。」と情に激して伯爵を見上げた藤乃の眼は濕みを帯び「それほどまでに御信任のお詞を頂きましては、私、何とも心苦しく……きつとこの末御失望遊ばす折がまるるのに違ひございませぬから……どうぞ私のやうなものを過分に御信任遊ばす事は——」

「いや、私は假令失望する事があつても、決して悔みません。またその爲に決して貴嬢に對する態度を改めません。どうかその點は私を飽くまでも信頼して下さい。……そして二人の兒のために、この切なる希望を容て下さい。」

「えー」と藤乃の顔は蒼ざめた「私、出来ませぬ事なれば、いつまでもく。」とやゝ神經的に「お二方のお傍にお付添申したいと存じます。また實際長くお添ひ申す事の出来る身の上となるか

も、知れないのでございます。』

『それでは貴嬢は私の希望を容れてもよいと仰しやるのですか。』と勝文の眼は希望に輝くのである。

『え？』と藤乃は却つて驚ろき顔に伯爵を見詰めて『何と仰しやるのでございます。』聲は震を帯びて響く。

『私は貴嬢に妻になつて頂きたいと申すのです。』

『あの私に——』と夢みるやうに云つて『それではあの私のやうなものを夫人に——』

『さうです。』と首肯して『貴嬢は小供等のために、枉てこの希望を入れては下さいませんか。』藤乃は餘りに心の騒ぐ風情で、暫らくは口も利得なんだが、漸く蒼白い顔を擧げて、

『殿様、身に餘るお志は死ぬとも忘れは致しません。』と聲を顫はせ『ですけれども私、お受けを致します事は……。私のやうな身分の卑しいものが、夫人になれます事か、なれませんか、お考へ遊ばす迄もないことゝ存じます。たゞそのやうな仰はございませんでも、私、いつまでも——』

『身分拵とそんな事を仰しやつても私は素より人爵などを眼中に置かんです。』

『それでも由緒のあるお家柄に私のやうなものが——』

伯爵は遮ぎつて、

『現に私の母は身分のないものです。併し私は少しも母の素性を恥る事はありません。却つて母が梅小路の家名を辱しめぬ婦人であつた事を誇つて居るのです。』

『御隠居様はかね／＼婦徳に富んだ方と承まはつて居りました——さういふお方なればこそ却つて御家名をも高めたのでございませう。私のやうなものは逆も／＼——ただ御家柄を汚すばかりでございますから……その勿體ない仰せを受けましたことを、私、生涯の榮譽と致しまして、平に御辭退を申し上げます。』と藤乃は一所懸命に云つた。

此時突然伯爵の胸に或苦しい疑問が起つた。

『藤乃さん、貴嬢は若しや——外にお約束でも——なすつた方があるのではございませんか。』

藤乃の顔には微かな紅が上つたが、きつぱりと、

『決してそんな事はございません。』

『それなら貴嬢は——』とほつとして云ひさした勝文は、また躊躇して藤乃の顔色を窺ふのである。

『殿様、私のやうなものをお望み遊ばさずとも、外に云分のない方が——貴君をお慕ひ申して居ります。』

勝文は驚いて、

『貴嬢は何を仰しやるのです。』

『錦子さんが——立花さんがどれほど貴君をお慕ひ申して居りませう。』

伯爵は意外の感に打たれたかの如く、やゝ暫し藤乃の顔を見つめて居たが、

『貴嬢は私を誤解して居らつしやるんですか。私は戀愛に手引されて妻を迎へやうといふので

はありません。小供のために母を得ようとするのです。問題は貴嬢のために生じたので、毫も

立花さんの頂るところではありません。若し立花さんに貴嬢の仰しやる様なことがあるとすれ

ば、私は大變に間違つた感情を持たれた事を悲しみます。何とかしてその間違である事を悟ら

してあける手段を取りませう。

藤乃さん、私は始めから戀愛を度外に措いて居るので……、私には戀を語るやうな青春の血

は、枯て居るかも知れません。貴嬢を妻にしたいといふのに、主要な感情を度外視するのは、

或は間違つて居るのかも知らんですが、併し私は戀愛を語る事を好みません。この御相談に戀

愛が加はつて居つても居らんでも、それは私に取つて大して輕重は無いです。私は戀愛を制す

る事は充分に出来ると思つて居ます。若し今露骨に申上げて、私に青春の血が再び湧返つたと

すると、貴嬢の拒絶に遭へば、屑よくこれを制して元の孤獨に還る事は必らずしも苦痛とは考

へません。併し二人の兒のために永遠に貴嬢を失なつたと考へる苦痛は——あゝ藤乃さん私は

語るに堪へません。』と勝文は額に手を加へて俯むいた。思ふにその眼には涙を湧して居たらう。

藤乃も何とも答へる事が出来ないまでに心を動かされて居る。やゝあつて勝文は顔を擧げる

と、

『併し藤乃さん、私は前にも申上た通り、決して御即答を求めめるではありません。どうぞ私

のため、二人の兒のため、充分にお考へ置きを願ひます。』

藤乃はたゞ黙つて頭を下けた。

(六)

梅小路勝文が藤乃に意裏を打明てから三日の後である。勝文はその後藤乃に向つて回答を促

がしませぬが、藤乃もまだ何とも答へなかつた。併し勝文は直接藤乃の答を促がすを押しつけ

がましき事と考ふると同時に、藤乃の方にしても答へ難い事であらうと案じた末、仲介者とし

て倭文字を選び、何事も打明て其力を借りようと決心したのである。

藤乃は午後から二人の預兒を連れて、廣尾の方へ野外散歩に出かけた。勝文は丁度その會

を利用して元園町へ使をやつたので、倭文字は先程から尋ねて來て居る。日本風の離れの別室

で、主人の伯は今自分の意志を包まず打明終ると、

『私のこの決心を貫ぬくためには、如何なる障害も必らず排斥する覚悟です。また今日のごころでこの決心を妨げるやうな障害が、私の方には信じません。たゞ遠山さんの女に私に嫁せられぬ事情があるとか、また私の妻になる事を好まぬといふならば、それは全く致方もない事で、私はたゞ肩よく運命に服従するのみです。』

倭文子はひどく心を動かされて聞いて居たが、靜かに、

『それで、藤乃さんにはその通りを仰しやつたのでございますね。』

『充分に私の意志は述べたつもりです。』

『藤乃さんは何と仰しやいました。』

『私は兎に角熟考を求めて置いたまゝで……まだ毫も遠山さんの意志を忤度する事は出来ません。』

『ですけれども藤乃さんはどんなにか……きつと思召に感激なすつたでございませう。もしこれが事實になりましたなら、あの方に取つて、こんな芽出度い境遇の變化は無いのでございませう……』

『併し芽出度い變化と考へたら間違ひます。私はこの申込をするに就ては、實際藤乃さんには

氣の毒の感があるので、不知不識自分が利己主義の奴隷に陥つて居るのではないかと案じて見る位です。普通の道理から云へば、處女の身として、小兒まであるところへ後妻に來るといふ事は、寧ろ残酷な運命なのですから、たゞ瑞枝や勝人が母のやうに懐いて居る遠山さんの事ですら、或は得心して下さるかといふ頼みがあるだけ……それとても私の方でさう思つてるといふだけの事實際遠山さんが、それを望まれるかどうかは非常に氣遣はれます。』と暫く言葉を切つて『併し倭文子さん、貴嬢はどう考へて居らつしやいますか。私の希望の成立する事を喜んで下さいますか。』

『ハイ、私は貴君や瑞枝さん達のためにも御利益なり、また藤乃さんの爲には、この上もないお仕合せであらうと考へます。今までが決して幸福な境遇に居らつしつた方ではございませんから……』

『貴嬢がさう考へて居らつしやるなら、私に取つては非常に好都合です。附入つてお願ひするやうですが、それならば貴嬢からなほ一應藤乃さんに説いて下さいませんか。』

『ハイ、私はきつと出来るだけの御盡力を致しませう。』と力をこめて受合つた。『たゞ倭文子さん、私は遠山さんの意志を矯る事は好みませんから、別に約束なすつた方があるとか、或は他に何かの事情があるとか。また私に對して……その意志が無いとでも云はれる

なら、私は屑よくこの申出を撤回します。そして將來如何なる場合にも、私の遠山さんに對する好意に變りは有りませんから、快よく今の職務を執つて居て頂きたいのです。それでないと私の不本意であるのみか、二人の兒の不幸ですから……」

「お心はよく了解りましてございます。併し私は遠山さんには約束をなすつた方があらうとは存じません。また外に事情のあるやうな事も、決してあるまいと存じます。若し藤乃さんが夫人におなり遊ばすやうな事があれば、私に取つてもこんな嬉しい事はございませんから、きつと私の力に及ぶだけの事をいたして見ます。どうぞ暫らくお待ち遊ばすやうに……」

倭文子は伯爵邸を辭して歸る途々、いろいろの空想に充されて居た。若しこれが事實となつた晩に、藤乃は自分に引比べてどれほど幸福な身の上となるであらう。藤乃には妙に沈んだ人と違つたところがあるが、併し沈んだために陰氣に見えるといふ風ではなく、却つてそのために氣品を加へるので、倭文子は藤乃が伯爵夫人として恥かしからぬ資格を具へて居ると思ふのである。自分は一生獨身で暮す運命を有つて居るのかも知らぬと、藤乃の語つた事も覺えて居るが、それはたゞ無意味に云つたので、何かの事情のあるためであらうと、倭文子には思ふ事が出来なかつたのだ。

殊に浮いた戀の爲めに、伯爵が藤乃を要求するのでない事を知るにつけ、若しこの縁談が纏

まれば、必らず双方の幸福であると信ずるので、伯爵には多くの同情を持って居る倭文子、藤乃にはまた唯一の友の倭文子は、今二人の結びつけられん事を願ふ心に充されて居るのだ。また一方藤乃が勝文の誠意を了解した晩に、それを拒む理由はあるまいと信ずるので、倭文子には必らずこの話は成就するものやうに思はれるのである。そして母の小説的の血を受けたと考へて居る藤乃には、この思ひがけぬ結婚談も、却つて相應しく、或は定まつた運命であつたのかも知れぬ、とさへ考へるのであつた。

倭文子が家へ歸つた時には恰かも來客の最中であつた。母の民子は喜び迎へて、

「お、倭文さん、いゝところへ歸つてお出だつた。お父様が先程からお待かねなのです。珍らしいお客來で——」

「おや、誰方が來らつしやいましたの？」と倭文子は不審の眼を睜る。

「あの、それは横須賀にお出の鍋島さんが、貴嬢もこの間梅小路さんでお目にかゝつたといふ、久松さんを連れてお出になつたのです。かねてお約束があつたとやらで、お父様は大喜びでお話をして居らつしやいます。』

「おや、さうでございますか。たしかあの陸軍少佐の、お立派な方でございませう。』

「あゝほんとにお立派な方です。先達獨逸からお歸りで、大層御評判の方だといふ……それが

倭文さん、不思議な事もあるもので。もう四十年も前の事ですがね、私の實家の近所に久松さんといふのがあつて、そこにお友達があるので、私がよくお遊びに行つて居たのですが、その時久松さんに私より五ツばかり上の兄さんがあつて、よく私などをお調弄なすつたが、それが伺つて見ると久松さんのお父様なのですよ。』

『おや、まアさうでございますか。』と追がに倭文子もその奇に驚ろいて『ほんとに不思議な事もあるものでございますね。』

『これもきつと何かの御縁かも知れません。』と云ひさして『お、それ、お父様がお待かねなのですから、はやく御挨拶にお出がよい。』

『ハイ。』と云つたが逡巡つて『でも私何だか——』

『一度お目にかゝつた方ではありませんか。獨逸にまで居らした方だから、なか／＼如才のない方ですよ。何も氣の置ける事はありません。服装もそれで丁度いゝ按梅だから……どれ私と一緒にいらつしやい。』

繼母にかう云はれて、倭文子は何か進まぬながら、極り悪けに其後に従つた。客室に通ると實際に手を支へて、

『お父様只今歸りました。』

鍋島と久松は居るまゝを直す。父の益荒は満面に喜色を湛へて、

『お、倭文か。さアこちらへ入るがよい。この間お目にかゝつた久松さんぢや。』

倭文子は二人に會釋した後、母にも言葉をかけられて前へ進んだ。主客今まさにビールの蓋を傾けて居る最中である。

『さア久松さん、一杯あけやう。貴君は獨逸仕込ぢやから、こんな水のやうなビールでは應へんぢやらう。倭文、お酌をしてあけて呉い。』

倭文子はビールの罐を取上ると、久松は大きな膝を小さく折つて、

『どうもこれは恐縮ですな。』

(七)

鍋島と久松が川上邸を訪問した翌る日の午前、遠山藤乃は倭文子方に尋ねて來た。早速居室へ導かれると、

『今朝お手紙を拜見したものですから、お二方が學校へ行つしやるのを待つて、急いで出てまゐりました。』

『おやさうでしたの。でもよく入つしやつて下すつたのね。今日は暫らくゆつくりなすつても

いゝでせう。』

『は、ですけども何かお急ぎの事ぢやなくつて?』と藤乃は氣になる風である。

『いゝえ、別に急ぐといふほどの事でも……ま、兎に角ゆつくりなすつて下さいな、その中にお話しますから。』と倭文子は美くしい笑顔を作る。

『さう、でも何だか氣になるわ。』と云つたが、すぐに説明を求め風では無つた。

二人は園遊會後始めて顔を合せるのである。藤乃は素より自分の留守に倭文子の來て居る事も知らねば、勝文が自分の事で倭文子の助力を求めて居やうなどゝは、少しも思ひ設けて居なかつた。たゞ却つて場合によつては、伯爵からの交渉の仔細を、倭文子にだけは打明てもよからうと考へて來た位である。

二人は暫らく園遊會の話の時を移した後、藤乃の方から、

『倭文子さん、もうお話を伺つてもいゝでせう。何だか氣になつていけませんから……』

『ちや私も氣になつて居るんですから、申しませうか。』

『あら嬢よ。それならさつきから仰しやつて下さればいゝですのに。』

『でも何だか、言憎い事なのよ。』

『え?』と倭文子の逡巡つて居る姿を見て、藤乃はもしやと多少穩かならぬ心が兆した。

『あの藤乃さん。私、昨日貴嬢のお留守中梅小路さんへお尋ねしたのよ。』

『あら。』と顔を赧めて『なぜ今までそれを仰しやらなくつて?』

『でも秘密だつたのですもの。』と笑つて『藤乃さん、實はね、昨日勝文様からお使だつたので上つたんですの。』と藤乃の顔を覗き込む。

さてはと藤乃は全く悟つたので、いよいよ顔を赧らめながら『え?』とたゞ極り悪げに倭文子の顔を見返した。

『藤乃さん、伯爵は何もかも私にお打明なさいましたよ。』

『では書籍室で私に仰しやつた事を——』とかういふ藤乃の顔には最早紅が纏て居た。

『は、何もかも。』

『倭文子さん、どうしたらいゝでせう。御辭退の決心は極て居りますけども……どうしてお断り申したらいゝかと……全く惱んで居るんですわ。』

『だつて何もお悩みなさるには及ばない事よ。勝文様があればほどに思召して居らつしやるんですもの、貴嬢が御承諾遊ばしたら、たゞ勝文様だけのお任せでは有りませんわ。』

『いゝえ、そんな事があるものですか、私のやうなものが、どうして伯爵家の夫人になれませう。そりやア思召はどんなに有難いか、死んでも忘れは致しませんわ。ですけども第一身のほ

ども願みず、そんな身分不相當のお話は……」

「勝文様は少しも身分などの事を考へては居らつしやいませ。たゞ貴嬢の人格を認めて居らつしやるだけなのですもの。」

「そんな事を仰しやられるとなほ更よ。私はどうしても——お断りを申し上げます。」

「だつて貴嬢。」と倭文子はちつと藤乃の伏目になつた顔を見て居たが「藤乃さん、もしか貴嬢が伯爵をお氣に召さぬとか、二人も先妻の子のあるところへ嫁つしやるのは厭だとか仰しやるなれば、このお話はそれまでなのよ。ですけれどもね——」

「倭文子さん、そんな事仰しやるのは酷いわ。私、伯爵をお嫌ひ申すとか、お子達のあるところへ行くのが厭だとか、そんな生意氣な心は少しも無くつてよ。全く有難い思召に泣いて居る位ですもの、それにお子達と申したところで、姫様にせよ、若様にせよ、善く私には懐いて居て下さいますし、私も不思議なほどお二方がお愛しくてならない位ですのに、勿體ない、何で不足がましい事など申しませう。不足どころか、若様姫様と冊づかれる方々の母となるのですもの、氏も素性もない女の身として、これほどの幸運がございませうか。それを思ふと私にも

う——』と感情の昂ぶる風情で言葉が切れたが、やゝあつて煮ざめた唇から『ですけれども、時の虚榮心に驅られて良心を偽るやうなお受を申上げては——』と云ひ差してまた後が絶える。

「藤乃さん、貴嬢は虚榮心など自分からお咎めなさるからいけないのよ。そんな事は問題ぢやないぢやありませんか。勝文様も御自分から爵位といふやうな事は少しもお考へ遊ばさないので、貴嬢も爵位の事など忘れて居らつしつたらいゝんですわ。たゞどうしたら二人のお子のために、幸福な家庭を作れようと、勝文様もそれを第一に心配して居らつしやるんでせう。そして貴嬢ならばとお見込遊ばして、またお子達の方でも母様のやうに、貴嬢には懐いて居らつしやるのですもの、もう貴嬢が御承諾遊ばしたら、それこそ幸福な家庭が出来る事は目に見えてるぢやありませんか。私もさうなつたら、ほんとにどんなに嬉しいか知れせんわ。」

藤乃は暫らく無言で居た末、

「お言葉はよく分つて居ります……伯爵の厚い思召を無にしては濟ない事もよく存じて居ります。ですけれどもいろく〜と考へて見た末……思ひ返して決心を致しましたのですから……」

「決心を遊ばしたと仰しやつて？——では御承諾遊ばさないと——」

ども私は假に夫人になりましたところで、決して伯爵に御満足を、與へ申す事の出来ないのを、よく存じて居りますから……どうぞ倭文子さん、貴嬢からお断り遊ばして……』

『だつて貴嬢伯爵が御満足遊ばす事は分つて居るぢやありませんか。それにそんな事思召して居らつしやるのは、全く貴嬢の杞憂ですわ。そんな事でお断り出来るものか出来ないものか、考へて御覽遊ばせな。』

『いゝえ、杞憂ぢやありません。私は私の心を偽はる事は出来ませんもの。』と藤乃の聲は震へた。

『え？』

此方は黙つたまゝ俯むいて居る。倭文子は次第に穩やかならぬ様子で、

『それぢや伯爵は兎に角、あの可愛い瑞枝さんや勝人さんにまで、失望させやうと仰しやるのですか。』

藤乃は愕然として、

『だつて瑞枝様や勝人様に、何もこの事を仰やつては——』

『それは申しませんが、貴嬢が御承諾遊ばさなければ近い中にお別れ遊ばす時が来るではありませんか。』

『そんな事は——ごいませせん——私はいつまでも、いつまでも、お二方のお傍に離れずにいたいと存じます。』と神經的になつてそして、『それは出来ぬ事ではないと——何かさういふ言ひがいたして居るんですから——』

『藤乃さん、それならいつそ夫人におなり遊ばしたらいゝぢやありませんか。』

『でも貴嬢、それは——それは、私にはどうしても出来ません——』

『なぜですか？』

『罪——罪惡ですもの。』

『え、罪惡？』と驚いて藤乃の顔を見ると、

『倭文子さん、もう何もかも申上ります。私には外に思つて居る方が——』と蒼白になつて俯むいた。

『えッ？！』

倭文子は藤乃に戀人があらうとは思はなかつた。刹那の意外の感に打れて、たゞ藤乃の顔を見詰て居ると、藤乃はやがて面はゆけに倭文子を見舉げて、

『この事は誰にも申上げずに——場合によつては、胸一ツに葬むつて了はうとさへ考へて居つたのです。併し今は最早包みかねますから……貴嬢にだけお打明申ませう。』

倭文子は伯爵の掛念の實になつた事を驚ろきながら、これもひしと胸を打たれて、

『私何も存じませんでしたから——』

『私だけの秘密でしたから。』と苦しげに俯むいて『私の慕つて居る方さへ何も御存知ではないのです。たゞ私一人が思つて居るだけなのですもの、自分の胸一ツに葬むつて了へば、神様の外には、もう誰にも知れずに済む事なので……私は何度も、この——果敢ない戀を葬むつて、伯爵の思召に従がはうかとも考へて見ました。それも決して自分の名譽心や、利害の問題のためではありません。』

數知れぬほどの結婚の御希望者——それもみな立派な御同族の中からお申込のあるのを拒絶遊ばして、私のやうなものを——それほど迄に思召して下さる……その厚いお志を思へば、伯爵のお爲には——自分の身は捨てても厭はぬと……倭文子さん、私は何度自分の戀を犠牲として、この身を伯爵に捧げやうと考へて見たでせう。もし私、今何かの權威があつて、戀を捨てると命ぜられたなら、屑よくその命に従つて名譽の地位に縋るかも知れません。またさうなりました場合には、伯爵に對して、妻としての及ぶだけの事を致す事も必ず出来ませう。だけれども私のまゐります事が、伯爵なり、又伯爵家のお爲でございませうか。心を鎮めて考へて見ますと、上流の生活も、伯爵家の家風も、何も心得ぬ卑しい身分の私が、

お受を申しましたところで、伯爵夫人の體面を恥かしめぬだけの事が出来やうとも存じませず、何かにつけて伯爵のお氣苦勞の種となるばかりに相違ございませぬ。また私には家庭教師といふさへ大役ですのに、なほ更母としての責任がどうして盡されませう。それやこれやも考へて見ましたし、また第一自分はそれで善いにしても、伯爵のお身に取つてどうでございませう。たとひ汚れた思想はなくとも、他人を戀して居る女を、夫人にお迎ひ遊ばして、それで御満足が出来ませうか。また私にしましても始終自分の心を偽つて、お事へ申さなければならぬのですもの。折角伯爵の思召に絆されて参りましたところで、それが却て伯爵のお心の平和を破る基とならうも知れませぬ。若もそんな事になりましたら、それこそどうして申譯を致しませう。また伯爵もこの事を御承知遊ばしましたら、きつと御断念遊ばす事と存じます。どうぞ倭文子さん、貴嬢からよろしくお断わり遊ばして——』と口籠ながら切なげに云ひ終つて藤乃は差俯むいた。『よく仰しやつて下さいました。』と倭文子は吐息と共に『貴嬢の苦しいお心の中は夫でよく分りました。併しお断り申上たなら、勝文様がどれ程御失望遊ばすでせう。』

『御自身が戀ではないと仰しやるだけに、私にはなほ心苦しうございます。』

『ですから貴嬢に戀が無くとも、勝文様はきつと御満足遊ばすでせうに……ですけども、私には貴嬢に戀をお捨てばせと申す力はございません……』

『藤乃さん、貴嬢のお慕ひ遊ばすお方は——』と逡巡つて『別にお約束をなすつた方ではございませんのね。』

『はい。』と極り悪げに『約束どころか、先の方は少しも御存知の無い事です。』

倭文子は好奇心を動かされて、

『立入つて伺ふ事をお許し遊ばせ。御存知の無いことと仰しやつて、まア妙ではございませんか。それではあの何んでございますか。假へ御存知はなくとも、そのお方はいつでも貴嬢と御結婚を遊ばす方なのでございませうね。』

この間に藤乃は寧ろ驚かされた風情で、

『いゝえ、何にも御存知で居らつしやらない位ですもの、そんな事は猶更……私には——』

『だつて貴嬢……』と意外の面持で『それならもしや——そんな事は決してありませんまいけれども、萬一その方にお約束でもなすつた方があるとか——また何かの事情で、貴嬢をお望みなさ

らぬとか、ほゝ、そんな事のある道理はございませんけども、たゞ萬一の場合そんな事かありましたら、貴嬢はどう遊ばします。』

『たゞ私は運命に従ふより外は——』と首垂て『私は生涯獨身で終つても決して恨事には思ひません。』

この思ひ込んだ言葉に倭文子は深く動かされたが、何氣なく、

『でも貴嬢、萬一さういふ場合には、獨身をお守り遊ばさずとも、よろしいではございませんか。假へば勝文様のやうなお望み手があれば——』

藤乃はこれに答へなかつた。倭文子も敢て答を促さうとはしなかつたが、暫らくして、話頭を轉じ、

『藤乃さん、貴嬢にそれほどまで、慕はれて居らつしやる方はほんとお羨ましくございますわ。』

藤乃は疾には言葉もなく俯むいて居たが、淋しく、

『いゝえ、私はきつと御迷惑遊ばすに違ないと存じます。』

『あら、そんな道理がございませぬのか。』

藤乃は黙つて膝のあたりを見詰て居る。

「貴嬢、その方のお名を仰しやつては下さらなくつて？」と笑ひかけて「私の知つてる方では
ありませんわね。」

「え、あの……」

「知てる方だつたら仰しやつて頂戴、私に出来る事でしたら、きつと貴嬢の御利益を計ります
から……」

「倭文子さん。」と顔を擧げて「それでは御親切を無にした事をお含みもなく——？」

「あら私がそんな事を根に持つと思召して居らつしやるんですか。」

「いゝえ貴嬢を決してそんな方とは——でも私があんまり我まゝですから……」

「出来る事ならきつとお力にもなりません。ですけども藤乃さん、私の知つてる方ではありま
せんわね。」

「それはあの——貴嬢が一番よく御存知で居らつしやる方でございます。」

「え、私が善く知つてる方——？ 誰方せう。」

「貴嬢には何も最早お隠し申しは致しません。私はその方をアノ——十七の年からお慕ひ申し
て居るのでございます。」と幽かに云つた。

「え？ 貴嬢が十七の時から——？」と倭文子は藤乃が如何に深くその男を思つて居るかに驚

きながら「そして夫はほんとに誰方なのでございます。相手の名を知りたしとの好奇心が制、
難きまで倭文子の胸に高まるのであつた。」

「それは——それは、アノ正木さんでございます。」と俯いた藤乃の耳の根までが靨くなる。

「え、あの正木を——」と耳元に砲弾の破裂したほどに驚いた倭文子の顔は、藤乃と引かへ
て、見る／＼土のやうに蒼ざめたのである。

(八)

今大學から歸つて来た正木貞雄が、制服のまゝどかりと踞座を組んで、巻煙草を吹し始めた
ところへ、倭文子からの使があつた。使の口上は今でも後程でも都合のよい時に来てくれとの
事であつたが、正木に取つては倭文子の命となれば都合も何もないので、直ちに立つて倭文子
の居室に行く。

倭文子は机に凭れて何か考へて居る様子であつた。思ひなしか、血色さへ優れず、心配でも
あるらしく見えたので、正木は胸を傷めながら黙つて座に着くと、倭文子は向直つて淋しく、

「おや、今でなくつてもよかつたのよ。……ちやもつとこつちへ寄つて下さい。」

正木は前へ進んで、正しく膝を折りながら、懸念の眼光を倭文子の顔に澁いだ。倭文子はそ

の色を見て取ったのか、

『正木、私の事ぢやアないの。ちつとも私に關係した事ぢやアないの。』

『はア、さうでしたか。』と正木はやゝ寛いだ容子である。

『私の事ぢやないけどもね、正木、お前に。』と云ひさしたが、すぐ云ひ直して『貴君には關係がある事なのだから——』倭文子はこのごろから正木に對して『貴君』の敬語を使ひ始めて居るのである。

『え、私に關係が——？』

『あの藤乃さんの事についてなのですがね——』と倭文子は俯むき氣味になる。

『はア、遠山さんの事について——？』と貞雄は何の事やら分らぬ。

『あの、大變にいゝお話があつたのよ。』と言葉が沈んできれんくである。

『はア？』

『それはね、正木、ほんとにいゝ事だつたの。……あゝ厭だ！』と低かつたが投げるやうに云ふ後から、小さな溜息が漏れる。

正木にはいよく何の事か分らぬ。その事が自分に關係があらうとは、猶更判斷のつけやうがない。

『遠山さんにどういふいゝ事があつたんですか。』

倭文子は暫らくハンカチを両方の指で弄つて居たが、

『あのね、正木、昨日梅小路さんから私にお使なので、すぐあがつて見るとね……伯爵からアノ藤乃さんの事について、いゝお話があつたのよ。その事なの。』

『はアどういふお話で——？』

『藤乃さんはあゝいふ感心なお心がけの方だし、おまけに子煩悩なので、二人のお子はそりやあよく懐いて、まるでほんとのお母さんのやうに思つていらつしやるんですわ。伯爵もどんなにか満足して居らつしやるるところへ、藤乃さんはまた音楽や文學の趣味も持つてお出ですし、なほど伯爵がお氣に召たのでせう。伯爵はこれまで方々から縁談があつても、二人のお子を他人の手にかけるに忍びぬと仰しやつて、獨身を守つて居らつしたのですけれども、藤乃さんをお大層お見込なすつたものですから、どうかしていつまでも二人のお子と放したくないと、いろく御思案遊ばした末、藤乃さんの方に差支がなければ、夫人になさりたいと御決心遊ばしたのですわ』と詞を切つて倭文子は息を次ぐ。

正木は追がに意外なので、

『どうもえらい事になりましたね。それで——？』と覺えず膝を進める。貞雄も倭文子に次ぐ

藤乃の大なる同情者なのである。

『それで伯爵は直接に藤乃さんに思召の次第を仰しやつたさうですけども、たゞ熟考を求めて置いたといふだけなので、態々私をお呼になつて、なほよく藤乃さんに御自分の意志を傳へて貰ひたし、返事も聞いて欲しいとそれはもうよく御決心遊ばした熱心な御依頼でしたの。』

『はア、なる程、伯爵は決して軽卒にそんな事を口外する方ではありますまいから、よく決心なすつた上の事でせう。遠山さんに取つては實にこれほどの幸運、いや寧ろ光榮はありませぬ。そして伯爵のやうな品性の高い紳士から申込される事は、實に女と生れた本懐でせう。尤も遠山さんなら伯爵夫人として恥かしからぬ淑女で、また令夫人らしい風采を備へた人ですから、伯爵が人爵を眼中に置かずに、遠山さんを選んだといふことには僕も最も敬服します。』

貞雄の最後の言葉は倭文子の胸に或印象を興へた。併し倭文子はそれについては何も云はず、たゞ貞雄を見つめたまゝ、

『ねえ、正木、誰だつてさう思ふわねえ。こんな出世は——と云ふと語弊があるかも知れないけれどもあの方に取つて、これほどお仕合な事はありませんもの。』

『さうですとも。』と首肯いて『貴嬢は最早遠山さんにお遭になつたのでございませう?』

『あゝ先刻いらつしつて、お歸りになつただけどもね……』と倭文子は眼を落して吐息を漏

した。

『で遠山さんはまさか厭だとは云はんでせう。』

『それはお厭とは——伯爵がそれほど迄に思召して下さるならば、御自分のお身體を犠牲にしても厭はないと——それはどんなにか感激して居らつしやるんですけどもね正木、アノ藤乃さんにはね。』

『は、遠山さんには——?』と倭文子の顔色を見て『或は結婚した人でもあるんですか。』

『結婚なすつた方は無いんだけどね、藤乃さんには深く思ひ込んで居らつしやる戀人が——』と倭文子は正木の顔を讀む様に見た。

正木は自分が其戀人であらうなどゝは少しも思ひがけぬから、眉を顰めながら、

『遠山さんにそんな戀人があるんですか。』

『それも十七の時から、今まで思ひつめて居らつしやる方なのよ。』

『それぢやアもう四五年來思つて居る譯ですね。全體何もので——? 遠山さんからそれほど思はれれば、これも男の本懐かも知れませぬね。』

『正木、貴君はきつとさうお思ひなんだわね。』と貞雄を見た倭文子の眼光が異様に輝やいたので、貞雄は何か不安を覺えながら、

「え、まアそんなものぢやアないかと——一寸思つて見たんですが、併し遠山さんにそんな戀人があると、進退を決するのに大難關ですな。」

「あ、それは私も察して居るのよ。藤乃さんもいろく〜と煩悶なすつたのに違ないんだわ。」と正木の膝の邊を見て云つたが、眼を擧げると優しく「正木、貴君ならどつちを取つて？ 云つて頂戴。」

「そりやア困りますね。」と迷惑さうに「男の考と女の考は違ひますから。」

「だから貴君の考を仰しやつて下さればいいの。」

「云へと仰しやるならそりやア申しませう。肩よく伯爵を斷念するのみです。」

「え！」と倭文子は軽く叫んで、すぐ眼をそらすと暫らくはあらぬ方を見詰て居たが「藤乃さんもお斷りをしてくれと仰しやるのよ。私にだつてそれほど思つて居らつしやる戀人を……斷念遊ばせとはお勧め出来ませんもの。」

「御尤もです。」

倭文子は黙つて居たが、

「貴君、ほんとにさう思つて？」

「はあ、でもそんな場合——」と正木は倭文子の言葉に何か意味がありさうなので、答を濁し

た。

「さう。……それならいゝの。」と神經的に呟やいて「正木、私はね、藤乃さんにそれほど思つて居らつしやる方なら、御一緒になれるやうに、お力添をさせうとお約束までして了つてよ。」と淋しく云つた。

「然しさうする方には何も障害はないのでせう。」

「え？」

「その戀人とはいつでも結婚が出来るのでせう。」

「そりやア出来るに違ひないと思ふわ。だつてその方は藤乃さんにそれほど慕はれ〜ば男の本懐だと、思つてる位なんだもの。」と倭文子の聲は震へた。

「え？」と正木は俄かにまた不安の念を覺えて、鋭く「全體その男は誰です。」

「正木、誰と思つてるか當て御覽な。」

「お嬢様、そんな事が私に分るもんですか。」

「ほんとに分らなくつて？ ぢやア云つてあけます。藤乃さんに慕はれてる方は、正木（と力を入れて）貴君ですよ！」

「えッ！」と慌てた正木の顔に軽い紅が上つたが「そ、そんな事があるものですか。冗談を仰

しやつては困ります。』

倭文子は眼を放さず、正木の顔を守りながら、

『こんな事を冗談に云へると思つて？ 始めから貴君に關係のある事だと、云つてらちやありませんか。』

『然し遠山さんが私を慕ふなどと、そんな事は斷じてありません！』と正木は赤くなつて叫んだ。

『だつて事實だから仕方が無いわ。』

『事實だと仰しやつても、少しも私の知らん事です。』

『貴君が知らない事でも、藤乃さんの方からお思ひなされるのは自由だわ。』

『それは自由ですけれども、四五年來僕を思つて居つたといふ、そんな道理は決してありません。また私が如何に無神經でも、それを悟らずに居る筈はないでせう。そんな事を云はれては私は非常に迷惑します。』

倭文子は貞雄の激した容子を細に注意しながら、

『貴君は藤乃さんの性質をよく御存知ないから、そんな事を仰しやるのよ。それは私だつても、あの方が貴君をそれほど迄慕つて居らつしやるとは、今日まで夢にも心づかなかつた位ですも

の。貴君が知らなかつたのも當然だわ。そりやアね。あゝいふ克己心の強い方なのだから、そんな事は素振にもお出しなされないけれども、それはまあどんなに深く正木を思つてお居らう。私はもうちやんと見抜て了つたのだから——』と次第に倭文子は伏目になつて、調子が沈んで来る。

正木もどうやら藤乃に思はれて居る事を自ら否認する餘地が少なくなつたやうに思ふ。何といふ意外なる事であらう。彼は茫然として腕組をしたが、

『もしそれが事實とすれば、藤乃さんは間違つた戀をして居るのです。私は實に非常な迷惑です。』

『藤乃さんのやうな方に思はれて何も迷惑する事は無いわ。そのために伯爵夫人の地位まで、捨ようとなさるんぢやありませんか。貴君だつて満足に思ふでせう。全く男と生れた本懐に違ないんだもの。だから正木結婚してあげたらいゝぢやありませんか。』と倭文子の聲は震へる。

『お嬢様が縦へ何と仰しやつても、私は遠山さんとは結婚しません！』

『おや、なぜ？』と倭文子の眼は輝やいて『貴君は藤乃さんに不足があるんですの。』と詰るやうに云つた。

『いや、遠山さんにどうして不足がありません。不足どころか私が敬意を拂つて居る女は、遠

山さんと、失禮ですがお嬢様の外にはありません。それにも拘はらず、私には少しの戀愛もないので、山さんとの結婚なら、飽までも御免を蒙ります。」

「おや、なぜなの？」と倭文子は胸を騒がせながら云つた。

正木は只冷やかに、

「餘地がないから無いと申上る外ありません。」

倭文子は暫らく黙つて居たが、

「でもその戀愛は今無くとも、だんく／＼培ふ事が出来るでせう。」

「私の心にはそんな戀愛を培ふ餘地はありません。」

「でも藤乃さんは、どんな場合にも決して断念なさらないわ。」

「私は是非断念させます。是非とも私のやうなものに對する戀愛を捨て、伯爵の厚意に従ふやうに勸告します。お嬢様、どうか遠山さんをお邸へお呼下さい。」と貞雄は熱心に主張した。

「それは呼んであける事は何でもないけれども——」と云つたが後は呟やくやうに「そんな事で藤乃さんが断念なさるかしら。」

「断念するもしないもありません。お嬢様、僕は男ですよ、遠山さんと結婚せぬと云つたら断じてしないです。またその方が遠山さんの爲です。貴嬢もさう思召すでせう。」

倭文子は暫時言葉が無く俯いて居たが、

「そりやアね、貴君がどうしても結婚なさらないと仰しやるなら、どんな事にしても伯爵の方へ行つしやる様にお勧めしますけども——」と濟ぬ様子で云つた。

(九)

川上邸の庭の隅、木立に隠れた若葉の中の四阿に、今相對して居るのは藤乃と倭文子である。

倭文子は正木と藤乃を會見させるため藤乃を呼迎へたので、正木には時刻を計つてこゝへ来るやうにと告げ、まづ自から藤乃をこゝへ導いたのである。

「藤乃さん、よく来て下さつたのね。實は昨日、あの何でしたから——正木に話したものですから……」

「おやさうでしたか。私まアどうしませう。」とやゝ緩らんだが、すぐ舊の冷靜な聲色に返つて

「私の胸一ツに葬むつて了へばようございましたものを……」

「あの正木に話しますとね。」と倭文子は云ひ懸さうに「あの正木は、自分から貴嬢に御返事をしたいと申すものですから——」

倭文子の冴ぬ顔色は藤乃をして悟るところあらしめたのであらう。

「倭文子さん、私、何もお返事など何ふ必要はありませんものを……どうせ決心をして居るんですから——」と沈んで云つて『ですけれど、あの正木さんは私にお遣遊ばさうと、仰しやるのでございますね。』

「は——」と云ひ知れぬ氣の毒の感が湧くので、倭文子は俯むいた。

「ではもうこの胸に葬むる事も出来ませんのね。」と吐息と共に藤乃は呟やく。

倭文子は胸を刺れるやうな傷を覚えるので、暫らく無言で居たが、

「それではあの、兎も角正木を呼んでまゐりますから……」

「それでは——さうお願ひ申しませうか。」

「暫らくお待ち遊ばせ。」と倭文子が立上ると、

「あの倭文子さん、貴嬢も御一緒に入らしつて下さい——と力を籠めて云つた。

倭文子は逡巡つて藤乃の顔を見たが、その思ひ込んだ容子を見て、

「は、あの何なら……、私もまゐりますから。——それでは呼んでまゐりませう。」と倭文子は何か心に責られながら、四阿を出る。實は倭文子が呼びに行かずとも正木は来る筈になつて居たのである。

暫らくすると正木貞雄は只一人、紺飛白の袴に袴を着けて四阿へ入つて來た。藤乃は立上つ

て正木を迎へたが、追がにその顔には軽い紅が上るのである。今まで藤乃は嘗て正木の前で報らんだ事は無かつた。併しその紅の色も双方の會釋が済むころには、若葉の縁に消されたやうに褪せて居た。

「あの倭文子さんは御一緒には入らつしやいませんでしたか。」

「は、後から入つしやるやうに仰しやつて居ました。」

「おや——左様でございますか。」と伏目になつて「あのすぐ入らしつて下さるのでございませうね。」

「はア、入らつしやるでせう。」と正木はいつもの淡白な調子である。

藤乃は眼を落したまゝで居る。正木が四阿へ入つて來る時、青葉を背景にスラリとした藤乃が立上つて迎へた時の姿は、正木の眼にいつもより氣高く見えた。今相對して居る藤乃の姿にも、何かの信念を得て居る婦人のやうな沈んだ氣高さが見える。これは正木の頭に豫期に反した印象を與へたに違ない。いつも正木は藤乃と語つて居ると、何か一種の清新の氣を感じるやうな心持がするので、藤乃に對しては常に敬慕の念を拂つて居た。今とても藤乃に對する感情に少しの異りもない。たゞ、自分に對する誤れる戀を捨て、伯爵夫人の地位につかせたいといふ念が火のやうに燃えて居るので、如何なる手段を取ても自分を斷念せしめねばならぬと、

一心にそれを考へて居る。併しその激して居る心が、藤乃の冷靜な姿を見て緩和された。

やがて藤乃は顔を擧げて、

『正木さん、倭文子さんから飛んだ御迷惑な事をお耳に入れまして……。今更取返しは附かぬ事をいたしました。』

『はア、お嬢様から伺ひました。それで實は貴嬢にお出を願つて頂いた譯ですが——』と正木は頭から何か説破しようといふ意氣込で居たのが、面と向ふと追がに鋒先が鈍るのであつた。

藤乃は俯むき氣味になつて黙つて居る。『實は貴嬢のやうな方が、僕のやうなものをお慕ひになつて居る事は、僕には殆んど信する事が出来ませんでした。今も心の中では、殆んど疑つて居ます——全く信する事の出来んほどに意外な事ですから。』

『貴君は嗚御迷惑でございませう。』と藤乃は沈んで云つた。

『はア。』と藤乃の顔を見て『迷惑かと仰しやれば、僕は全く迷惑です。貴嬢が僕をそれほどに愛して居らつしやるといふのが事實なれば、僕は斷然その戀愛を捨て頂きたいのです。』

藤乃は豫じめ自分の運命を覺悟して居たので、別段にそのため血色を變ずる事はなかつた。靜に、

『それは——私には出来ません。正木さん、どうぞそれだけはお免し遊ばして——』

『そんな事を仰しやつては困ります。僕は是非その間違つた戀愛を捨てる事を要求します。』

『ですけれども貴君をお慕ひ申す事は、私の自由でございませう……。その代り私、決してこの上の御無理はお願ひしません。私をお愛し下さいとは決して申上げません。私は自分一人の果敢ない思ひに満足して居るつもりでございませう。』

『併しそれは無理です。貴嬢は假にそれだけで満足なさるにしても、僕が困ります。』

藤乃は俯むいたまゝで居る。

『藤乃さん、そんな僕を困らせるやうな事を仰しやらすとも、屑よく僕を斷念して下さい。僕は貴嬢のやうな方が、何の見るところあつて僕の如きものを愛されるのかと、實に貴嬢のために悲しみます。僕は貴嬢を敬慕して居る一人ですけれども、それ以上に出る事はどうしても出来ぬのですから、結果の無い戀愛の爲に貴嬢の一生を誤らしむる事があつては非常に遺憾です。是非とも僕を斷念して下さい。そして梅小路伯爵の令夫人になつて下さい。』

『それも私には——』

『出来ないと仰しやるのですか。』と貞雄は少しく聲を勵まして云つた。

『ハイ。』ときつぱりと云つて『私、最早決心いたして居ります。』

貞雄は鈍く藤乃の顔を見詰て、

「藤乃さん貴嬢はなぜ伯爵夫人にならないのです。」と熱の籠つた調子で「僕と伯爵と比べものになりますか。貴嬢は伯爵のどこに不足があるのです。門閥と云へ、地位と云へ、名譽と云へ、華族の中でも伯爵の右に出づるものが多くあります。品性の秀でた點において、風采の優れた點において、伯爵は眞に華族らしい華族、紳士らしい紳士ではありませんか。如何なる地位を有つて居る婦人でも、伯爵を夫にせられたなら、必らずそれを誇とするでせう。僕は何人も伯爵に重きを置く譯ではありませんが、伯爵ほどの方に熱望されれば、實に女に生れた本望ではありませんか。「人生意氣に感ず、功名誰かまた論ぜん。」です、これが男なら伯爵の馬前に打死しても厭はんとところでせう。女だつて違はありません「女は己を知るものゝために容くる。」といふでせう。知遇も知遇、これほどの知遇がありますか。藤乃さん、なぜ貴嬢は伯爵の意氣に感ずる事が出来んのです。なぜ貴嬢の一生を伯爵のために捧げようとはなさらんのです。」と力を籠て説く貞雄の眼には熱涙を宿すのであつた。

俯むいて居る藤乃の束髪のリボンが胸かに揺ぐ。胸には刺れるほどの痛があるだらう。貞雄は言葉を次いで、

「それも伯爵がたゞ貴嬢の色に迷つたといふやうな、そんな輕薄な戀愛のためならばいざ知らず、伯爵の如き思慮に富み常識に富まれた方が、直接に貴嬢を説いたといふのは、分別に分別

を重ね、よく／＼決心なされたからの事で、若し貴嬢が輕々に拒絶なされたなら、伯爵は非常の苦痛を味はれるでせう。貴嬢はそれをお考にはならんのですか。」

貞雄は言葉を切つたが、藤乃がなほ黙つて居るので、調子を改ため、

「僕は貴嬢がそれまでに僕を慕つて下すつても、決して貴嬢の良人にはなりませんぞ。これは明かに斷言して置きます。貴嬢がそれにも係はらず、意地を立通したところでそれが何になります。無論貴嬢の美德にもならなければ、貴嬢の良心を満足せしむる途にもならんでせう。よしまた貴嬢はそれで満足を得られるにしても、僕は絶えず貴嬢のために苦痛を感じて、伯爵は長く失望の傷手を負ふでせう。」

遠山さん、貴嬢はなぜその心を翻へして伯爵のために一身を捧げようとはなさらんのです。不幸な伯爵の家庭に光明を添へようとはなさらんのです。僕は貴嬢がそれほど剛情な自我主義の強い人とは信じて居ませんでした。……さうです、僕は敢て自我主義と斷言します。若し自我主義でないとは仰しやるなら、肩よく僕に對する戀愛を捨て、伯爵のためにその半生を捧げられる筈ではありませんか。そしてそれは實に女らしい美しくい事ではありませんか。」

藤乃は漸やく顔を擧げると、

「貴君のお言葉はよく分りました。何と仰しやられても致方がございません。……」

それは伯爵の思召の勿體ない事は、私のやうなものでもよく存じて居ります。どうせ貴君の妻となる望の絶えた身なら、自分の戀を捨て伯爵に此身體を捧げる位決して出来ぬ事はございせん。ですけれども、それは私の良心が許しませんのですから——決して未練にこんな事を申しはいたしません。

今貴君は私を自我主義だと仰しやいましたけれども、こればかりは私、お怨みに存じます。今更辯解がましい事は申しませんが、私、伯爵のところへまゐりましたところで、伯爵に御満足を與へる事が出来ようとは、どうしても考へられませんが。

伯爵は姫様や若様のために母になつてくれるやうと仰せられます。それは私もお二方が生の子でも、これほどに可愛いものかと思ふ事もある位ですから、お二方に母らしい愛情を持つといふ事は、或は出来ない事もあるまいかと考へるのでございます。併しそれだけで伯爵が御満足遊ばしますでせうか。なるほど殿様——伯爵は戀愛の問題ではないと仰しやる位ですから、御自分を愛してくれとはお望み遊ばしません。ですけれども良人となりまた妻となりました上で、最後に御要求遊ばすものは、妻の愛でなくて何でございませう。

若し妻の愛はなくともよいと仰しやるなら、今の私の地位にお捨置遊ばして、それでもよい道理ではございせんか。それに私、こんな身になりましたからは、いつまでも姫様方のお傍

に居ります積りでございませう……言葉を改めて『私、決心いたして居ります。汚れた心を抱いて伯爵夫人となりましては、伯爵を欺むくも同じ事ですから、私、一生獨身を守る考でございませう。』

貞雄は藤乃の深い決心を示した顔色を見て、太息を漏しながら、

『併し貴嬢の仰しやる事は、僕にはどうしても辭を設けたものと思はれません。貴嬢は伯爵に對する愛がないから、夫人にはなれんと仰しやるのでせう。併し始めから愛の成立を條件としたら、日本のやうな國では、大部分の男女は結婚する事が出来ませう。人生は必ず意の如くなるものではありません。思つて居る同志が離れて、思はぬものが合する。これが社會の状態で、それに巧く適應して行くのが、一面われわれの社會に盡す道です。それは何も汚れた事でも人を欺くのもありません。』

『御尤もの仰せですが、私丈は自分にも持ちあづかつて居る除物なのでございます。貴君は愛を捨てばよいと仰しやいますけれど共それは私の愛がどんなものか御存知無いかから……私は五年以來貴君を深くお慕ひ申して居ります。私はきつと死ぬ迄貴君をお慕ひ申して居るでせう。縦ひ貴君が何と仰しやいまして、また自分で何なに思ひましても、私にはどうする事も出来ませぬ。大方母の血を受繼いだ私の愛は遺傳とでも申すのでございませう。私、假に伯

爵に嫁いで、どれほど妻の道を盡さうと致しましても、決して貴君を忘れる事が出来ようとは思はれません、私に伯爵夫人となれと仰しやるのは、罪悪の人となれと仰しやるのも同じ事でございます。私、もう深く決心致しましたから、どうぞもうその事はお勧め遊ばさないようにお願い申します。』

正木は眼を睜つたまゝ藤乃を見つめた。暫らくは口を開く事も出来なかつたほどに強い感じを受取つたのである。長い沈黙のあつた後、

『併し僕はどんな場合にも、貴嬢の良人にならん事を、重ねてこゝに明言します。』
藤乃は顔を擧げて、きつと正木を見て、

『その事はよく承知して居ります。貴君のお心を動かさうとして、こんな事を申上げはいたしません。私が伯爵夫人にならぬと申上げますのも、貴君が私を妻に遊ばさぬと仰しやるのも同じ道理でございます。私、それはよく得心致して居ります。』

貞雄は藤乃の覺悟に驚ろきながら、

『併し貴嬢はそれでよくつても、僕が安んずる事が出来ません。結果は貴嬢が僕を苦しめるも同じ事です。』

藤乃は双手を胸に置いて頸垂て居たがやる瀬なげに、

『私の決心が貴君に御迷惑をおかけ申すなら、なぜ私は胸一ツに葬むつて了はなかつたのでせう。あゝどうしたらようございませうね。』と呟やきながらハンケチを噛しめて『正木さん、此上はどうぞ私の今日申上げました事を、永久にお忘れ下さいまし。私も最早この果敢ない胸の思を二度と貴君には申上げません。どうぞ何もかもお忘れ遊ばした上、貴君のお氣に召した夫人をお迎へ下さいまし。私、陰乍ら貴君の御幸福を祈つて居ります。』

『僕が妻を迎へるか迎へんか、そんな事は考へても居ませんから、今日こゝで云ふべき問題ではありません。貴嬢が僕の幸福を祈つて下さるなら、僕とても熱心に貴嬢の幸福を祈つて居る一人です。それであるのにその僕が事實においては、貴嬢を不幸の境遇に陥れて居ると知つては、どうして不安を感じずに居る事が出来ませう。』

『貴君は私を不幸の境遇に陥れたと仰しやいますけれども、私は只今の境遇を不幸のものとは思つて居りません。實際現在の地位にこの上もない幸福を感じて居るのでございますし。獨身で居ります以上は、長くこの幸福な地位を保つ事も出来て、伯爵の御恩にも酬いられる道理ですから、私少しも不幸と思ふところはございません。』

『藤乃さん、それならば貴嬢はなぜモ一步進んで、伯爵家の家庭の人になつて下さらんのです。それこそ眞に貴嬢の幸福で、また僕始めお嬢様の非常に満足を感じる所です。』と正木は溢

れるばかりの熱誠をその顔に示して云つた。

『正木さん、何度仰しやるも同じ事でございます。どうぞもうお免し遊ばして——』と情の迫る風情で藤乃は顔を打蔽ふ。

正木は腕組をして太い息を吐いた。

(十)

瑞枝と勝人を學校へ送り出して後、藤乃は何か心の淋しさを感じるので、久しく省しなかつた飯田町の伯母の許へ訪づれやうと、服装を改めて伯爵邸を立出でた。門を出て、ふと見ると、一町ほど彼方からこなたを指して走つて来る車がある。車の上には薄納戸の蝙蝠傘をさして白い肩掛をかけた令嬢らしいのが乗つてゐる。遠目ではあつたが、藤乃は倭文子らしく感じたので立留つて居ると、果してさうであつた。倭文子は車を止めてにつこり、

『やつぱし藤乃さんね。貴嬢どつかへ行つしやいますの。』

『は、暫らく伯母のところへまゐりませんか、一寸行つて來やうと思つて出かけたんですが——別段用が無いんですから私よしませうかしら。』

『何なら伯母さんの方は後程に遊ばしたら如何でございます。』

『は。』と云つたが考へて『倭文子さん、私に御用なのぢやアありませんわねえ。』

『いえ、あの……貴嬢にもお目にかゝらうと思つて來たのよ。だつて貴嬢が居らつしやる方がいゝわ。あの勝文様はお留守ぢやアないでせうね。』

『居らつしやいます……でも私。』とまた考へて『やつぱり飯田町へ行つて來ますわ。』

『さう、それなら早く歸つていらつしやいな。私の居る中に。』

『は、さうしますから——』と首肯いて。

『ではよろしくお願申します。』

『それは大丈夫よ。勝文様はそんな方ぢやアないから——。ぢやお早く、屹度よ。』

藤乃は倭文子に別れると淋しい飯田町の方へ急いで行く。

藤乃は昨日正木に遭つてから後でも、倭文子からさまざまに勸められた。倭文子の心では、一たび愛を失なつて枯木のやうな冷かに返つた伯爵さへ、このころでは温かい心が湧て來て居るのに、厚く伯爵の知遇を感じて居る藤乃が、夫人になつた上で愛情の出ぬ筈はないと固く信じて居るのだ。併し藤乃はどうしてもその決心を翻へさぬので、倭文子は藤乃の決心を伯爵に傳ふべく餘儀なくされ、今日はそのため伯爵家へ來たのであるが、併し心の中ではなほ伯爵に依つて藤乃の決心を翻へさせる望がないのかと思ひ煩らつて居る。倭文子はどんな事をして

藤乃と伯爵と結びつけたのである。

倭文子はなぜそれほど藤乃の決心を驚かしたのであらう。いやそれとても無理もない事かも知れぬ。誰にしても藤乃の爲を思ふものなれば、この際伯爵夫人にしたいに違ない。いよいよ藤乃が伯爵夫人にならぬとすれば、こんな惜しい話はない譯だ。倭文子は藤乃の唯一の友としてこれを惜む心も一しほ深いであらう。殊にまた一方の伯爵には深い同情を持つて居る倭文子であるから、伯爵が藤乃の如き淑女を得て、再び幸福な家庭の人となる事を熱心に希望して居るに違ない。この間に何の疚しい事があらうぞ。

倭文子が正木に對して藤乃を妻にしてはと勧めた事も事實である。併しその方は單に形式に止まつて居た。併し一方の藤乃のためにより大なる幸福があるとすれば、小さい方を顧みぬのは當然である。尤もいよいよ藤乃が伯爵夫人とならぬ曉には、今度こそ眞剣に正木を勧めて藤乃と握手せしむる手段を取るであらう。わが倭文子を信ぜんとするものは、必らずこの事あるを信するに相違あるまい。

倭文子はすぐに伯爵の居室へ通される。伯爵が待設けてるらしい顔色を見ると、何とも云へず、心の沈むのを覚えるのである。

勝文は次の間から小間使を斥けて、倭文子の話を聞いた。倭文子は忍んで何事も語らねば

ならなかつた。尤も藤乃の場合によつては、勝文に一切を打明て貰ふ事を希望して居たのである。

勝文の顔には苦痛の色は見えなかつたけれども、必らず精神的に打撃を受けたに相違あるまい、靜かに聞き終つて、

『よく分りました。なるほどさういふ事情では致方がありません。私は肩よく申込を撤回しませう。藤乃さんにはこの事について少しも氣にせぬやう、よく貴嬢から傳へて下さい。』と此上もない捌けた調子である。

倭文子は氣が安まるにつけても、何だか氣の毒が先に立つ。

『私さへちつともそんな事には氣がつかなかつたものですから、よし始めは藤乃さんが辭退なさるにしても、お勧めさへすれば御承知なさるものと、輕卒にお引受申しまして、今更申譯がございせん。』

『そんな事があるものですか。輕卒と仰しやれば、私こそ輕卒だつたのです……倭文子さん、もうこの事はお互ひに忘れる事にしませう。たゞ藤乃さんがこの後居悪いといふやうな感起さずに、居られる限り居てさへ下されば私はそれだけで満足を表します。』

『え、それは藤乃さんの方で、どんなに望んで居らつしやる事でせう。それはもう瑞枝さん

や勝人さんと、片時でも離れるのを淋しがつて居らつしやる位ですから——』
『それなればこそ私もつい、二人の母にといふ考も起したのですが——』と伯爵の調子は沈む。

倭文子は同情を表して俯むいて居たが、

『ほんとにさうなればお二人はどんなに、お喜びなさいますでせうに。……ですから私、この上にもし出来ます事なれば……、思召も伺つた上、モ一度是非——』と力を入れる。

『は——？』

倭文子は胸を騒がせながら、

『藤乃さんはどうせ獨身の決心をなすつて居らつしやるのですし、もう正木との縁は無いものなのですから、いつそそれなら藤乃さんの決心を變させた方が、あの方のためちやアないかと——。尤も藤乃さんは他人を戀ひ慕つた身體で、よし汚れた思想は無いにしても、良心に咎めるからと、何よりもそれを仰しやるんですから……、思召を伺つた上では、なほ立入つてお勧めして見ようかと——』

勝文は考へて、

『では私さへそれを承知なら、藤乃さんは承諾するかも知れんと仰しやるのですか。』

『ええ。』とためらつて、『私、是非承諾なさるやうお勧めして見るつもりでございます。それはどこまでも厚い思召を伺へば、藤乃さんととも——』

勝文は暫らく腕を拱いて居たが、

『藤乃さんさへ決心をかへれば、私はいつでも喜んで握手しませう。併し私は一度愛情の枯た男ですから、どうなつたところで多寡が知れてます。それに引かへて藤乃さんは青春の血に充てる方ですから、只今の事情を承はつて何よりも氣の毒の感が先に立ちます。私は此上自分の妻にしたいと考へるよりは、どうかして正木君に添はず方法はないかと、考へる方が至當のやうに思ひます。』

『え？』と倭文子は眼を睜つたが、自ら恥るやうに俯むいた。

『それに正木君が大學を出るまで、出てから別に配遇を擇ぶまでは、藤乃さんの機會がまだ失はれたものとは云はれますまい。それより先に無理に望んで藤乃さんの身を定めて了つては、取返しつかぬ事にもなりません。また私もその期間を利用するやうで心苦しいですから。』

倭文子は俯むいたまゝで居る。

『倭文子さん、全體正木君はなぜそれほどまで藤乃さんを排斥するのです。外に戀人でもあるのですか。』

「え？」と驚ろいたやうに勝文を見た倭文子の顔は軽く赧らんだ。

倭文子は嘗て正木の戀人といふ事には想到しなかつたのである。勝文の詞に驚ろいたのもそのためである。併し何のために少しでも顔を染たのであらう。

「戀人もないのに、無意味に拒絶するといふのも變ではありませんか。」と云つたが急に或考が閃いたので「倭文子さん、若しや正木君は、藤乃さんを私の妻にするために、心にもなく拒絶したのではありませんか。」

「いえ、そんな事はございません。」と倭文子は言下に打消した。

勝文は意を得ぬやうに倭文子の顔を見て居たが、

「併し許嫁の妻があるとか、戀人があるとか、また何か重大な事情のない限り、藤乃さんにそれほど迄慕はれて願ひぬといふには、説明がなくては叶はんでせう。」

それは倭文子にも充分に判らぬのだ。

「ですけれども正木は變人で、一度心に極めた事はどこまでも立て通す男でございますから。」これでは不得要領に止まる。が勝文は最早深入はしなかつた。

「貴嬢の父上もよく正木君が意志の強固な有爲の青年であると自慢して居られました。私の戀から離れて見れば、藤乃さんとは實に好一對の配偶であるに、甚だ遺憾な事と思ひます。倭文

子さん。」と言葉を改めて、

「私はこの事のために藤乃さんに對して少しも悪感を起す事はありませんから、どうぞよ、貴嬢から私の意志を傳へて下さい、これはくれぐれも願つて置きます。」

「ハイ、よくお話致して置きます。藤乃さんはどんなにか御安心なさいますでせう。それにつけても、私、このお話の纏りませぬのが何より残念でございます。」

「私はいつでも幾年の後でも藤乃さんを歓迎します。貴嬢の第二段のお話は他日に譲つて下さる。」

「ハイ、それでは仰せに従がふより外ございません。」と倭文子は次第に心を動かされて云つた。

藤乃は伯母のところへは行つたが、心にかゝつて沈着いて居られぬ上、倭文子も自分を待つて居るだらうと、三十分あまり居て、また伯母の家を辭して出た。無論今度の縁談の事については伯母には何事も言はなかつたのである。

伯爵邸へ着いてわが居室へ歸つて見ると、倭文子はまだ歸らずに、病める伯爵の母君を見舞つて居るとの事である。小間使に自分の歸つて來た事を知らせにやつて待つて居るとすぐ倭文

子は入つて来て『今歸つて居らつしたの。』

『これでも早く歸つて来たつもりですけども、貴嬢は嘸お待遊ばしたでせうね。』と藤乃は倭文子の顔色を注意しながら云つた。

『いゝぞ、そんなに待ちませせんよ。今少し先にお話が済んだばかりですから。』

『そして何もかもお話し下さいまして？』

『は、何もかも——』と眼を落して『併し御案じなさる事は何もなかつてよ。伯爵は却つて貴嬢に濟ぬ事をしたと、思召して居らつしやる位ですから。』

『ではあの感情を害して居らつしやるやうな事は？——』

『そんな事は少しもないのよ。貴嬢にはどんなに同情を持つて居らつしやるでせう。』

『倭文子さんほんとうでございませうね。』

『えゝ、ほんとうですとも、そればかりか——御自分は一度愛情の枯て了つたお身の上だし、どうなつても大した違はないが、貴嬢の御決心を伺がつては何よりもお氣の毒でならぬ。御自分の方はどうでもよいから、貴嬢のお望を叶へる法は無いものかと、そんな事までも仰しやいましたよ。』

『それほどまでに私の事を——』と藤乃は心を動かされて涙ぐむ。

『それほど迄に貴嬢の事を案じて居らつしやるのよ。』

『まア何といふ——私、もういつそ——』と身を震はせて居たが『なぜ、私は正木さんを忘れる事が出来ないのせう。』聲も身體と共に震へて居る。

倭文子は弱い女の言葉もなく、その有様に打れて居た。

『やつぱし母の遺傳ですわねえ。』と淋しく云つて藤乃は胸を押へる。

倭文子は猶黙つて居たが、

『そして藤乃さん。』と優しく『勝文様は貴嬢が御決心をかへる場合があればいつでも喜んで手を遊ばすと仰しやいました。』

『まア、ほんとうにそれほどまで、私のやうなものを思召して下さいるのでございませうか。』と胸を抱たまゝ無量の感慨に閉される様で、太い息遣ひと共に俯いたが『あんまり我儘ですわねえ。』と幽かな咳が漏れる。

倭文子は附入つて、

『藤乃さん、貴嬢はどうしても決心をおかへ遊ばす事は出来ませんか？』

藤乃はほな暫らく俯むいたまゝで居たが、やがて蒼ざめた顔を擧ると、

『倭文子さん、もう其事は仰しやつて下さいますな。私、胸が裂るやうでございませう。』

藤乃の決心の到底動きさうにもないのを見て、倭文子は長い息を吐いた。そして何か云はうとして暫らく逡巡つて居たが、

二一〇

『あの藤乃さん、それほど御決心遊ばして居らつしやるなら包まず申上ますがね。實は先刻勝文様の思召を伺つたものですから、なほも一度貴嬢にお勧めして見やうと申し上げたのです。さうしますとね。勝文様は、正木が別に許嫁でもあるなら格別、大學を出て配偶者を探ふまでは、まだく間があるのだから、藤乃さんの機會が失なはれたものではない、それより先に貴嬢の身を定めて了つては取返しつかぬ事にもならう。何か利用するやうで心苦しいから、この上貴嬢を勧める事は見合はしてくれと仰しやるのです。』

この伯爵の深い思遣を傳へた言葉は、今までも神經の昂ぶつて居た藤乃に強い感覺を與へた。藤乃はこの言葉に何とも知れぬ痛苦を覺えたと共に、何か腸を見られるやうな羞恥の念を感じたのである。有様に云へば、無論藤乃は固く獨身の決心もして居れば、また到底正木とは添はれぬものと覺悟もして居る。併し自分には意識せぬけれども、心の底のどこかには母が十幾年の後に戀を遂げたやうに、自分も何年かの後、正木を我ものと呼び得るかも知れぬといふ、一點の希望が螢火のやうに残つて居るのだ。藤乃が我にもあらで羞恥の念を感じたのは、胸の奥の琴線が思ひ設けぬ音を立たからである。

藤乃は漸やくに心を鎮めて、

『伯爵の思召はどんなに難有うございませう。ですけれども倭文子さん、私、獨身で居れば、いつかその中に正木さんのお心の折れる事もあらうと、そんな事を考へてお断りして居るのでございませんから——』と一所懸命に云つた。

(十一)

倭文子が他人の身の上の事で、梅小路邸に訪づれて居る間に、一方には己が身の上に関する重大な相談が、両親の間に熟しつゝあらうとは夢にも知る筈がなかつた。

倭文子が元園町の邸を出てから一時間の後、男爵夫人民子を訪づれた女客があつた。それは鍋島海軍中佐の母堂で、民子と共に某婦人會の幹事を勤め、かねてより川上家と親しく交際して居る間柄である。併し今日訪づれて来たのは婦人會の用向ではなく、我子の友陸軍少佐久松喬のため、倭文子に其妻に得たしとの懇望を述べるが爲であつた。

民子は兎に角本人の意志も聞き、益荒とも相談した上何分の返答をしやうと答へて、鍋島老夫人を歸したが、心の中では少なからずこの懇望を喜んだ。民子の胸には良人は云ふまでもなき事、倭文子とても今度こそ異存はあるまいと固く期するところがある。實は始めて久松に遭

二一一

つたその奇遇を喜んだ時から、既に倭文子に擬して居たので、先方からの申込は民子の思ふ壺に拵つたのである。で老夫人が歸ると、民子はいそ／＼と良人の居室に赴むいた。

益荒は机に凭れて頻に自作の詩を推敲して居たが、民子が入つて來たのを見ると、眼鏡越にその方を見て、

『何ぢや。』と折角の詩思を亂されたのが腹立しいやうな容子である。

民子は構はず靜かに座について、

『今鍋島の奥さんが倭文子さんの縁談について入つしやつたのですが……』

『倭文の縁談ぢや？』とまだ机に向つたまゝ、少しも氣乗のせぬ風で『どこぞからまた呉ろといふのぢやな。』

『はい、今度は大層いゝ口のやうに思ひますから——』

『どうもそちこちから煩さくて困るの。倭文もあゝして當分どこへも行きたくないといふのぢやから、大概なら斷つて了ふがよいぞ。』

『はい、それはもうそのつもりで大抵は如才なく斷つて居りますけども、いゝ口がありさへすれば、極るに越した事はあるまいと存じますから。』

『いゝ口があればぢやが、あまりあせると飛んだものを掴む道理ぢや。倭文の幸不幸の岐れる

基ぢやからのう。此前なども松平にやつて了つて見い。取返しつかぬところぢやつたぞ。』

『それは私もあの時は輕卒でございました。ですから今度こそ云ひ分のない立派な婿をと、心配致して居るではございせんか。』

『ウム、それで今度欲しいといふのは何ものかの。』と矢張冷淡な調子である。

『私は今度こそと思ふのでございますが、それはあのこの間入つした久松さんでございませう。』と民子は誇つた色で良人を見る。

『ウム、何ぢや、久松が欲しいといふのか。』と老將軍は俄かに筆を抛つて膝を妻の方に押し向けた。

『ですからいゝ口のやうに思ふと申上げたのでございますが——』

『さうか。それならばなぜ始めから久松と云はぬのぢや。……ウム、久松がよく倭文を望んでくれたの。』と益荒の顔色は美しく輝き渡る。

『久松さんなればお身元も知れて居りますし、倭文さんと大した不似合のやうにも存じませんが。』

『これ／＼誰が不似合ぢやといふた。乃公は實は久松のやうな男に倭文をやりたいと考へて居つたところぢや。』

『それではこつちは願つたり叶つたりですが、倭文さんの方はどうでございますう。』

『いや、倭文の事は案ずるに及ばん。かねて乃公達に選擇を任して居る位ちやから、何の異存があるものか。松平に不服のやうぢやつたのは、彼女の眼が高かつたのぢやが、今度こそ乃公の眼鏡に曇はないわい。第一乃木が惚込んだる位の男ぢや。』

『でも親が嫁くのはございませんから——』

『これ、倭文が承知をすれば善いではないか。彼女は今時のハイカラ娘のやうな我儘は云はぬから大丈夫ぢや。善は急げぢや。まだ倭文は歸つて來ぬかの。』

折柄歸り合した倭文子、何の心もつかず、父の居室へ挨拶に來て、

『お父様お母様、只今歸りました。』

『お、倭文、よいところへ歸つて來て呉れた。』

『貴嬢のお歸りを待て居たところですよ。』

倭文子はすぐに両親の言葉と素振とで今まで二人はわが身の上に就いて語つて居たのだと悟つた。我身の上の話と云へばいふ迄もなくまた縁談であらう。倭文子は松平子爵の方を斷つてから後も、そこよから煩さく申込の絶えぬ事を知つて居る。その都度心を寒くするので、なぜ縁談といふものはこれほどまでに厭なものかと、このごろはつく／＼身に沁て思ふやうにな

つて居るのだ。

あゝまたかと俄かに心の沈むのを覺えながらも、何氣なく、

『何か私に御用でございますか。』

『ちと話があるのぢやが——』

『倭文さん、こちらにお進みなさい。』

倭文子が前へにじり出ると、

『倭文、また縁談ぢやがの、今度こそ乃公の方から惚込んだ男ぢやから、その積で聞いて貰はんと困る。そちらはこの間乃公達が充分に選擇したものなら、決して異存はないといふたの。』

『はい……』と幽かに云ふて倭文子は胸を打れながら俯む。

『貴郎、そんな無理押付を仰しやつてはいけませんわね。』と民子はたしなめるやうに益荒を言つても、決して無理にとは仰しやらないのですから、お厭ならお厭と遠慮なしに云つて下さいよ。實はね、鍋島の夫人が先刻その事で入らしたのですが——あの倭文さん。』と調子を碎いて『この間お出になつた久松さんね、あの方が是非貴嬢を欲しいと、大變な御執心なのです。』

かう聞くと倭文子は、少なからず驚ろいて俄かに胸騒を覚え始めた。久松が自分に意があつたらうとは夢にも思はなかつたばかりか、自分が軍人の妻にならうなどいふ考へは、不思議に今まで心に浮んだ事がなかつたのである。久松が参謀部内の俊才である事は人からも聞いて居る。第一父はひどく久松を賞たゝへて居る。母も久松を懐しく思つて居る。併し父母が久松の噂をして居るのを聞いても、何か底意があつての事とは今の今迄も心づかなかつたのである。倭文子は久松を嫌つて居る所は何も無かつたが、然しこの縁談を聞くと同時に、まづ何とも言ひ知れぬ物悲しさの念に襲はれるのだ。

俯むいたまゝ兎角の返事も出さず、黙つて居ると、

『どうぢや、倭文、久松ならば立派な人物ぢや。將來必ず有数の参謀官として名を成す男ぢや。乃公の婿として恥かしくなければ、そちの良人としても決して不足はあるまい。嗚、倭文、そちはどう思ふかの。民のいふ通り、そちの考へを遠慮なく云ふて見い。』

それでは遠慮なく云へさうな筈がない。民子は引取つて、

『お父様がいくらお氣に召しても、貴嬢がお厭ならそれまでの事、無い縁と諦らめるよりほか仕方がないのですから、私達はそれでもと云ひません。ですけどもね、倭文さん、私は今までの縁談は餘り不似合のやうでもなし、今こそまだ少佐で居らつしやるけれども、行々は將官に

もおなりの事は、もう目に見えてるのだから、まアこんないゝ縁は無からうかと、……それに久松さんへは私の小さい時分、よくお遊びにあがつたもので、これも何かの縁だらうと思ふのです。何なら纏めるに越した事はありませんから、倭文さんもそこをよく考へてね——』

父は短兵急に、

『嗚、倭文、どうぢや。久松が氣に入らんかの。』

『え、お父様、決して——』と慌てゝ父の顔を仰いだが、倭文子の顔は蒼くなつて居た。

松平の時には父があまり進まなかつたから、首尾よくその難を免かれたが、今度は父も母も乘氣であるから、全く思案に餘る難關である。倭文子には殆んど切抜る道がないと思ふと、胸元を搔むしらるゝやうな心地がする。

民子は倭文子の顔色をちつと注意しながら、

『倭文さん、久松さんはその通りみなさんに囑望られてる位の方だから、嫁にやりたいといふ申込が、煩さいほどあるのを、貴嬢でなければいけないと、その方は一切お断して居らつしやるのださうですよ。』

『嗚、倭文、久松がそれほどそちを望んだものぢや。乃公はそちほどの幸福者はあるまいと思ふとるが、どうぢや、嫁つてくれるぢやらうの。』

倭文子は進退に窮まつた。どうしても久松の妻になりたくない。いや誰の妻にもなりたくない。人の妻になるといふ事が、何よりも物悲しいので、此上はたゞ一日でもこの問題を延し得るだけ、延すより外に途がないと考へるのである。

『お父様私はこの間お願申して置いた通り、當分どこへも嫁かずに、邸に居りたうございませ。』と精一杯に云つた。

『これ倭文、乃公は何も焦ることもあるまいと思ふたから、そちに同意したやうなものぢやが、善い縁があるのに、それ迄断つて了ふといふのは、第一そちの不利益ぢや。』

『さうですとも、ねえ、倭文さん、誰が見てもこれならと思ふ縁があるのにお断りばかりして居ては、私が何か難しい中で、態とするやうに世間からは思はれます。それはお厭なものなれば仕方がないけれども、當分どこへも嫁たくないなど、そんな氣になつてお出だからいけません。氣を變て見たらまた分別も變るものですよ。』

『は……』と俯むいたまふ黙つて居る。

『全體そちは厭なのかの。』と父の調子が變つた。

『……………』

併し民子は優しく、

『倭文さん、それともね、倭文さんに外にこの人ならばと、お思ひの人でもおありなのかえ？』

『あらお母様、私にそんな事が——』と倭文子は赧らんで母を見上げる。

『でもさういふ方でもおありなら、倭文さんが見込んだ人ですもの、私は決して悪いやうには取計らひません。お父様とてきつとそれは御承知遊ばすに極つてるのだから、もしかおありならお有りのやうに——』

『いえ、お母様、そんな方などは決してございませぬ。』

『倭文、あるならあるでいうて見い、許してよいものならば久松の方は断つても乃公が許してやる。』

『お父様、私、決してそんな方があつて申すのではございませぬから——』と大方は口の中で云つて座に堪へぬやうに俯むいて了ふ。

『ウム、それでは別に思ふとるものがある譯ではないの。』と父はほつと息を吐いて『それならどうぢや、久松の方へ嫁つて乃公に安心さしてくれるかの。』

『……』倭文子に取つて沈黙は唯一の武器である。民子は益荒の方をじろりと見て、

た縁談の御返事は誰でも仕悪いのが當然です。それでは倭文さん、かうなさい。二三日よく考へて、そして返事をなさるやうに、ね、鍋島さんへは四五日の猶豫をお頼して置いたのですから——』

倭文子は漸やくに顔を舉げると、

『それではどうぞ——』

『そちもよく分別して見るがよいぞ。』

『は……い。』

倭文子は父母の前を辭して、わが居室へ引取ると、悄然として机の前へ坐つて、暫らくはあらぬ方を凝視して溜息を吐いて居たが、俄かに制へきれなくなつたか、両手で顔を蔽ふと机の上
に泣伏したのである。

(十二)

『お嬢様、お嬢様、お召替遊ばしませんか。』

小間使の磯の聲に驚ろいて、倭文子は涙を隠しながら顔を舉げると、邪慳に、

『いゝから打捨つてお置き。』

『でもお汗におなり遊ばしたらう。』

『いゝつてばね。』と倭文子は傍を向いて了ふ。

『お嬢様。』と呼びかけたが、黙つてるので膝をすり寄せ『お嬢様、なぜお泣遊ばして居らつしやいます。』

『え。』と泣顔を悟られたかと磯を見て『あら、私泣いてはるなくつてよ。』

『それならばお召替を遊ばせ。磯がお話を申上ります。』

倭文子は素直に立上つた。そして次の化粧室に伴なはれた。

磯は十四の歳から倭文子の小間使に来て、今年二十一になるまで、傍を去らず事へて居るのである。両方で氣心を知り合つて、倭文子も磯にだけは我儘をいふ、その代り大抵の事は隔てなく打明るが、磯も此上なしの倭文子思ひで、場合によつては股の肉さへ裂うと思つて居るのだ。

懶うけに大姿見の前に立つた倭文子の後から、磯は花色地井桁崩し銘仙の平常着を着せながら、

『お嬢様のお肌はなぜこんなにお美しいのでございませう、ですからお難儀を遊ばします。』

『知らないよ。いゝから、帯をお出しなね。』とぐつと裾を引いて前をかき合せながら『私がい

つ難儀をして？」

『でもそこちから縁談のお申込にお難儀を遊ばして居らつしやるではございませんか。』

『私はほんとお前と生れ變りたいわ、あゝ厭だ！』と投る様に云つて磯が差出す酸漿草を白抜にして朱色羽二重と博多の晝夜帯を引締る。

磯は慰める言葉もなく後から帯を直しながら、

『貴嬢はあんまりお氣が弱いからいけません。』

倭文子は黙つて机の前へ歩みながら、

『磯、お前何か話があると云つたわね。』

『はい、申しましたが、あのお茶を入れましてから……』

『お茶なんか呑たかないよ。』とべたりと友禪縮緬の座布団の上に坐る。

磯もその傍に座を占て、聲を落しながら、

『お嬢様、私、貴嬢のお泣遊ばした譯をよく存じて居ります。』

倭文子は何とも云はないで居る。

『磯は濟ない事とは存じながら、たゞ今偷聞を致して居りました。』

『まアお前はと——』倭文子は驚き顔に磯の顔を見て『それがお母様に知れてもいゝ事？』

『いゝえ、大丈夫でございます。また知れても立派にお云ひ開きを致します。』

『だけでも磯、それで泣はしない事よ。』

『おや、それでは何でお泣遊ばしました。』

黙つて居たが、

『磯の知つた事ぢやないわ。』

『お嬢様、それでは貴嬢、久松さんへお出遊ばすお覺悟でございますか。』

倭文子は俯むいたまゝ答かない。

『それ、御覽遊ばせ、貴嬢はお厭でございます。磯は貴嬢がお厭な事をよく存じて居ります。』

倭文子はなほ黙つて居る。

『それになぜ貴嬢はお厭とお断り遊ばさないのでございます。私、襖の蔭でハラハラいたして居りました。ほんとにお嬢様は齒痒い御返事ばかりを遊ばして居らつしやるのですもの。』

『だつて磯、そんな事が——』

『でも旦那様は生のお父様ではございませんか。貴嬢がお厭なものを無理にとは仰しやいません、又奥様は義理のなかだけに押つけがましい事をしてはと、却つて思召で居らつしやいませ、ですからどうでも貴嬢のお心の儘になるではございませんか。』

『そんな事が出来るものか、出来ないものか、お前ちと私の身になつて考へて御覧な。』

『お嬢様のお身になるもならぬも無いではございませんか。第一奥様が何と仰しやいました？』

『ええ？ お母様が——？』

『奥様は若し他にお嬢様のお氣に召した方があるなら、決して悪いやうには計らはぬと、仰しやつたではございませんか。』

倭文子は薄く顔を染めて、臆病らしく磯を見詰めた。磯は曇みかけて、

『奥様ばかりではございません。旦那様までが、許せるものなら、許してやるとちやんと仰しやつたではございませんか。』

『だけでもそれがどうして？』

『どうしてとではございません。私ほんとに、齒痒くつて、齒痒くつて……お嬢様は、決してそんな方はないなどと、なぜ御返事を遊ばしました？ あると仰しやればすぐに許して下さる所ではございませんか。』

倭文子は胸を騒がせながら、

『だつて無いものを、仕方がないぢやないか。』

『……いえ、無くつても構ひません。有ると仰しやつたらそれまでとごさいます。』

『あら、そんな事が私に——』

『磯ならばいくらでも申します。私、ほんとに襖の蔭から飛出して、何度かお嬢様のお代りに御返事を致さうかと存じました。今でもよいと仰しやれば、お使にいつてまゐります——お嬢様は外に思召して居らつしやる方がございますから、久松様の方はお断遊ばして頂きますつて——』

『いけません——磯』と倭文子は小間使に恐い眼をして『私は御兩親を欺むく事なんか、出来なから……』

『何もお欺し申すのではございません。たゞちよいと掛引を申上げるばかり——』

『それがお欺し申すぢやないかね。』

磯は親くやうに倭文子の顔を見て、

『それではお嬢様、貴嬢はほんとに何方も思召して居らつしやる方がございますんの？』

倭文子は顔色を變へて磯を見返したが、

『無いから無いと云つてるぢや有りませんか。』

『あのきつとでございますか。』

倭文子は黙つて淋しく首肯いた。磯は改まつて、

『お嬢様、あの伺ひますが、人間といふものはお位やお爵がなければ、立派な方とは云はれな
いものでございませうか。』

『そんな事聞いてどうするの？』

『いえ、是非伺ひます。』

『位やお爵で人の値打は極らないよ。』

『それでは何で極るのでございます。』

『爵位が無くつても、身分がどんなでも、その人に値打さへあれば、それが一番立派な人ぢや
アないかね。』

『おや、さうでございますか。あの旦那様も始からお爵があつたのではございせんわね？』

『お前、知つてお居ぢやないか。』

『念のために伺つたのでございます。さうすれば旦那様も、お位やお爵や身分を當にお嬢様を
お極遊ばすやうな事はございせんわね。縦ひ身分はどんなでも、その人に値打があつて、末
の見込のある方を、もしかお嬢様が思召て居らつしやるやうな事があれば、きつとお許し遊ば
すに相違ございますまい。お嬢様、貴嬢はどうお考へ遊ばします？』

倭文子は自分の眼が何事かを裏切つるのを恐れるかのやうに、俯むいてわが膝を守つた。

『お嬢様、何も御遠慮遊ばす事はないではございせんか。もしそんな方があつて、その方が
大變に望のある方で、そして貴嬢の爲には、火水の中も厭はぬといふほど真心のある方だつた
ら、その方をお婿様にお擇び遊ばすに、何も御遠慮はないではございせんか。』

倭文子の顔は報らんだが、すぐ舊の蒼白さに返つて、やゝ暫し無言で居た後、

『磯、もう何にも云はないでおくれ。第一私にはさういふ方は無いのだし、そしてお父様やお
母様のお擇び下さる方なら、不足は云はぬと申上てもあるのだから——。それに——それにそ
んな事をしては濟ない義理もあるんだし——』

『おや、どんな濟ない義理でございます。』

『お前の知つた事ぢやアないよ。』

『いえ、知つた事でなくつても心配でございます。どんな義理がお有遊ばすのか存じませ
けれども、磯には腑に落ませんから——』

『磯、ほんとうにもう何にも云はないでおくれ。それはね、なにもそんな何ぢやないけども
ね。それやこれやを考へると、わがまゝ許りは云へないのだから……私は何もかも運命と諦ら
めるつもりなのだよ。』

『それでは久松様へ嫁つしやるお覺悟でございますか。』

倭文子は俯むいたまゝ黙つて居る。覺悟をして居るのか、して居ぬのか、容子では分らぬ。
『お嬢様はあんまりお氣がお弱いからいけません。子が親に我儘をするのは當然ですわ。少し辛抱して我儘を仰しやれば、お心の儘になるではございませんか。』
倭文子は堪得ぬやうに、

『磯、何にも云はないでおくれといふのが、お前には分らないのかへ？ いゝからもう彼方へ行つといで。』とぐるり膝を向直して机に凭れ、涙ぐんだ顔を反けた。

『ようございます。それなら私に彼方へまるつて、相談をしてまゐりますから。』
倭文子は驚ろき顔に見返つて、

『お前、誰に相談をおしなの？』
『誰でもようございます。貴嬢のお爲を思つてる方は、私ばかりぢやございませんもの。』

『磯、そんな事をしたら私きかないから——。誰にいふつもり？ え？』
『正木さんでございます。』

倭文子は思はず顔を染めて、
『正木にお云ひだつたら、それこそ承知しなくつてよ。だつて正木が聞ても仕方がない事なもの、またそんな事がお母様のお耳にでも入つたら、私がどんなに迷惑するか知れないぢや

ないかね。』

『ですけれども正木さんに御相談をした事が、奥様に知れやう答はございません。』

『いけないと云たらよしておくれな。』と倭文子は色を變て『正木の知つた事ぢやアないんだから』

『はい。』と磯は止むなく口を噤む。

倭文子はぐるりと磯の方に脊を向て了つたので。磯は溜息をほつと吐いて次の室へ立つた。如何に考へても正木に相談をして見るより外に、倭文子を救ふ途がないと思ひ定めて、倭文子から禁られはしたが、思ひきつて正木の室へ出掛て見た。正木は今日は早く退て、今朝りに調べものをして居るところである。

『正木さん、入つてもよござんすか。』
『やア、お磯さんか。用があるなら入つてもいいです。』

『貴君にちよいと御相談をしたい事があつて、そつと來たのですから——』
『何、僕に相談したい事があつて、そつと來た？ そつと來るのは困るな。』と磯の顔を見たが、何か心配さうなので『併しどんな事か伺はう。』

『實はお嬢様のお身の上について、心配な事が出來ましたので——』

倭文子の身の上と聞いて、貞雄は此方に向直りながら、

『どんな事が——？』

『縁談なのでございます。』

『なに縁談だ。それなら目出度い事ぢやアないか。』と眉一ツ動かさずに云つた。

『あれ、貴君はそんな平気で居らつしやるけれども、ちつとはお嬢様のお身になつて御覽遊ばせ。』

『分らん事をいふね、全體、どこからの縁談です。』

『お嬢様をお望の方はこの間獨逸からお歸り遊ばした參謀本部附の久松さんでございます。』

『ウム、あの久松さんか。』と貞雄の眼は異様に輝やいたが『僕はちらと見た丈で、どういふ人物か知らんが、軍人らしい立派な風采を具へた人のやうだつた。殊に獨逸に居つた時分から評判がよくつて、陸軍部内に囑望されて居る人だといふから、川上少將閣下の令婚として、實に似合の縁ぢやアありませんか。』と冷靜にいふ。

磯は腹立しけに、

『それは久松さんはお立派な方でございます。少將閣下のお婿様には似合の軍人さんでございます。ですけども肝腎のお嬢様がお氣に召さなければ、それまでぢやありませんか。』

『アム。』と貞雄は考へて『それではお嬢様が不承知だと仰しやるんですか。』

『いえ、それを仰しやらないから、貴君に御相談をするのでございます。』

『どうも譯が分らんね。結婚なすつたらそれでいゝでせう。』

磯は齒痒さうに、

『貴君はなぜそんなに冷淡なんでせう。ほんとにお嬢様の身になつて御覽遊ばせよ。正木さん、お嬢様は外に思つて居らつしやる方があるのでございますよ。』

『え。』と貞雄は愕然として、鋭く磯を見詰めたが『そんな輕率な事を口にして、もし人の耳に入つたらどうします。』

『でも、ほんとうの事を申上るのですもの。』と四邊を憚りながら『そして貴君ですから申上るのですわ。』

貞雄は暫らく黙つて居たが、

『いや、僕はそんな事は聞かん。また聞く必要はない。實際聞いたところで、僕には立入つてどうする事も出来ないですから。』

『それでも松平様からの御縁談は、貴君がお止め遊ばしたのだと伺つて居ります。』

『それはお嬢様を不幸に陥るゝものだと思つたから、僕の所信を申上げたまで。』

『それなら今度でも同じ事ぢやありませんか。』

『松平と久松と比べものになりますか。』

『ですけども外にお慕ひ遊ばす方があれば、どこへ嫁つしつても、決してお嬢様のお仕合に氣づかひはございません。』

『それでは——その、慕つて入らつしやる方と——御結婚は出来なですか。』と貞雄はきれぎれに云つた。

『それですから貴君に御相談をするんぢやありませんか。どうぞお嬢様の思を叶へてあけるよう、お考へ遊ばして下さいまし。』と磯は低い調子に力を籠る。

『お嬢様は、どういふ方を……慕つてお出になるのです。』と貞雄はやゝ不安を感ずる様で尋ねた。

『お嬢様が慕つてお出遊ばす方は、……正木さん、貴君でございますよ。』

貞雄はわれにもあらで顔を紅くしながら、許すまじき眼光で、

『何といふ事を云ふのです。實に怪しからん。お嬢様は大事のお身の上です。殊に主従の間柄で——云ふべき事に事を缺いて、なぜそんな不謹慎な事をいふのです。』

『だつてほんとうなら仕方がないぢやありませんか。私は十四の時からお嬢様のお側に置い

て頂だいて、始終お嬢様の事ばかり思つて居るんですものお嬢様のお心はもうちやんと私には分つて居ります。』

『お嬢様のお心が分つて居るやうに思ふのが誤解の基だ。そりやア僕はお嬢様と乳兄妹で、勿體ないが妹のやうにお懐かしく思つて居れば、お嬢様も階級の隔なく僕を兄のやうに頼りにして下さる。それは僕も感泣して居るんです。僕はお嬢様のためにはどんな事でもしようと思つて居るが、二人の關係は斷じてそれ以上には出でない。また出得べき筈のものではないです。お磯さんはそれを誤解して居るんだ。』と、貞雄は躍起となつた。

『貴君がいくらそんなに仰しやつても、私はもうちやんと突とめて居るんですからいけません。』

『そんな事はない——』と貞雄はなほ言張つたが、お磯の動かぬのを見て『併し假にそんな事があるとすれば、僕はお嬢様に久松さんの方の御縁談を承諾なさるやうお勧めするばかりです。』
『えッ、それでは貴君、お嬢様がお可哀さうではございませんか。貴君がさう仰しやれば、お嬢様はもう世の中に頼るものがないと思召して、久松さんの方へいらつしやいます。貴君にそんな事をして頂く位なら、私は一人で氣を揉んだり、御相談にはあがりません。』と磯は泣聲になる。

『併し僕にはその外に取るべき途はないです。』と正木はきつぱり云放つた。

一四四

(十三)

倭文子は居室の中でさまざまに思ひ亂れて居る。どう考へても今度の縁談を断り了ふせさうに思はれぬ。よしまた假に断り得たとしても、次へ次へと起つて来る第三第四の縁談をどうして切抜ける事が出来やう、倭文子の胸に今何等の光明もないが、たゞ心の底のどこかには、正木に依つて救はれる道があるかも知れぬといふやうな、果敢ない一點の心憑がある。

今まではそのをり／＼として心にも止めなかつた正木の言葉が、いろ／＼記憶に繰返されて来る——いづぞや立花錦子方で藤乃と三人寄合つて同窓會の打合せをした歸途、意志になき結婚をしたため悲惨な境遇に陥つて、投身を企だてたお豊を、正木と共に救つた時に——それは松平の縁談のあつた時であつたが——この話には何かの教訓があらうと、正木の語つた事が心に浮ぶ。正木は決して意志にない結婚を人に強るものではない。いや現にその時も、松平との結婚が自分の意志に反してゐるなら断ればいゝではないかと、明らかに自分に説いた。今もその言葉を忘れないであらう。倭文子はまた正木が爵位や自分を標準として、人に結婚を強るものでない事を知つて居る。この間梅小路伯爵と藤乃の間を自分が奔走して居た時も、

正木は伯爵が人爵を眼中に置かずに、藤乃を擇んだには敬服すると語つた。そののみか、戀人と伯爵と、正木ならどちらを取るかと迫つて聞いた時に、屑よく伯爵を断念するのみだと答へた事が、今あり／＼と思ひ出される、あはれ、かゝる時頼にするものは、この日頃我心の半を領する正木の外に誰があらうか。

小間使の磯には正木に語つてはならぬと云つた。正木には、自分も語りたくない。無論人には語らせたくない。併し正木に語らずにどうして問々の思を遣る事が出来よう。どうしてこの結婚を拒絶する事が出来よう。しかも正木に語る事は倭文子に取つて大なる恐怖である。倭文子は幾度か室を出ようとして躊躇した。その中思ひ切つて室は出たが、今日に限つて正木の居室に行きにくい。何か家人に後を見られるやうな氣がする。室まで行きかけて三度ばかり外へそれて了つた。最後の時には、心が咎めるので庭へ下りて後園へ廻り、櫻と松の植込の中に設けた榻に暫く身を憩らへて居た。

よくこの木下蔭へは正木が来て本をひろけて居るので、今にも出て來はせぬかと、待設けて見たが、たうとう影も見えないので、また家の中に引返し、幸ひ誰にも姿を見られぬと思つたので、思ひきつて正木の室を訪づれた。併し倭文子が誰にも見られなかつたと思つたのは間違である。尤も不利益な人に見られたのではない。また見られたとて倭文子の心に咎めるだけ

一四五

で、偷聞でもされない限り、そのため倭文子の不利益を醸すやうな事は、まづ有りさうには思はれぬ。

倭文子が正木の室へ入るのを見たのは、倭文子が居室を出た時から、私に注意して居た礎で、と見ると後からそつと来て、正木の室の通路の縁に立ち、袂からレース糸と針を出して、何か巾着のやうなものを編始めた。それは二人の話の模様を知りたい爲であつたか、それとも奥様の付の小間使春などに來られぬやうとの用意であつたか、それは判らぬが、どちらにしても礎の誠心には異りはないから、倭文子の爲には寧ろ安全な番人と云つて善らう。

正木は入口の方に背を向けて机に凭れて居たので、聲を忍んで影のやうに入つた倭文子の姿に心づかなかつた。倭文子は胸を騒がせながら二三歩進みよつたが、正木が何をすることもなく腕組したまゝ茫乎して居るので、

『正木、正木。』と靜かに呼んで見た。

正木は始めて心づき、驚ろいて見返ると、悄然倭文子が立つて居るので、われにもあらで顔を赧くしたが、

『や、お嬢様でしたか。』と居住居を直して『ちつとも存じませんでした。』

『少し話がしたいんだけど、お差支はなかつて？』と倭文子は沈んだ調子である。

『ハ……』と當惑らしく云つたが、立上つて室の隅から更紗の座布團を取つて來て倭文子に遣め『どうぞお敷下さい。』

倭文子は淋しく其上に坐つたが、何か云ひ出さうとしては氣後れしてためらつて居る。貞雄は先刻磯から聞いた話のためだとは悟りながら、これも相對座したまゝ黙つて居る。暫らくして倭文子は口を開いた。

『正木、私は貴君に極めて頂きたい事があつて來たのよ。』

『え。』と貞雄は眼を睜つて『私が何を極めるのですか。』

『それは——あの、縁談なのだから、そのつもりで、どうしていゝか貴君が極て下さればそれでいゝの。——いゝとか悪いとか。たゞ一言云つて頂戴な。』と倭文子は思ひ込んで云つた。

貞雄はト胸をつかれて、

『お嬢様、貴嬢は何を仰しやるのです。そんな事が、どうして私に極められますか。』

『いゝから云つて頂戴。私それで決心するから。』

『私の意見を云へとだけ仰しやるならば、誰方からの御縁談か伺つた上では、或は申上ることもありませう。併し——』言葉が切れると、

『さう。だけでも何處からの縁談でも構はないの。私正木が嫁げと云へば嫁くんだから。どん

なところでも。『倭文子は神經的に云つた。』

『そんな事を仰しやつては私の意見の申しやうがないではありませんか。』

『私どこへも嫁きたい事はないんだから、嫁くんならどこへ嫁つたつて同じ事よ。どこからの縁談だつて、そんな事はもう構はないから——』と聲は咽ぶやうに響いた。

貞雄は太い息を吐いて倭文子を見たが、

『併し私は御縁談先を存じて居ります。』

『エッ。』と倭文子は顔を擧げて『ちやア磯から何か話を聞いて——？』と蒼い顔に紅が上る。

『お磯さんは久松さんから縁談があるといふ事を、ひどく心配して私に話して行きました。』

『それですか。』

『それだけです。』

倭文子は伏目になつたまゝ黙つて了ふ。

『御両親は嫁らつしやるやうにと仰しやるのでせう。』

倭文子は黙つて首肯した。

『御両親に反く事は出来ないではありませんか。』

『貴君が嫁くなと云へば、両親に反いても構ひません。』と力を籠めて云ふ。

倭文子として驚ろくべき決心である。これまではと貞雄は激しく心を動かされたが、勉めて冷静に返つて、腕を拱ぬきながら靜かに自分の位置を考へ始める。

『どつちとも云つて下さい！ え、正木。』

正木は刻んだ石像の如く、答へもせず、身動きもしないで居る、なほ長い沈黙の續いた後、

倭文子は堪られぬものゝやうに、

『正木、どうすればよくつて？』

二人は始めて顔を見合はした。倭文子の懇ふる如き眼光には、全幅の精神が籠つて居る。貞

雄は沈んだ、力の充た低い調子で、

『貴嬢は久松さんへ嫁つしやい！』

見る間に倭文子の顔色は變つた。土のやうに蒼さめてがくりと首垂れたまゝ、やゝ暫し言葉

も無かつたが、

『それでは私、久松へ行きます！』とやがて震ひ聲で云つた。

思はず音に立てゝ泣うとして、慌てゝ袂を唾へながら、忍び足に襖の隙を飛退いたのは小間使の磯である。

貞雄は胸を抉られる程の痛を覚え乍ら、

「お嬢様、どうぞお許し下さい。私のお勧めする途は此外にありません。それでなくてどうして閣下や奥様に申譯がございませう。又さうなさるのが貴嬢の御利益です。」

それが利益であつてもどうして自分の幸福であらう。倭文子は今思ひ決した身にも、嘗て自分の幸福のためには如何なる犠牲となるも辭せじと云つた貞雄に、何か怨じて見なくなる。

「松平さんの時にはさうでは無かつたわね。」

「お嬢様、私の精神がまだ貴嬢にはお分りになりませんか。」とちへと倭文子を見つめて「こゝをよくお考へ下さい、松平さんは貴嬢の良人たるべき資格の無い人で、若し誤つて御結婚なさるやうな事があれば、貴嬢の將來に取返しがつかぬと信じたから、閣下にもその通りに申上たのです。併し久松さんならば、閣下の御満足もさこそと察せられる許か、實に貴嬢の良人として恥かしからぬ方ではありませんか。眞實に貴嬢のお爲を思ふものは、誰でもこの御結婚を夢ばぬものはありますまい。」

かう云はれると倭文子は云ひたいことが澤山ある、併し胸一杯で口へ出しては何にも云へない。

「いゝちやアないかね、正木、もう私は久松へ、行くと極めたのだから——」

「はい、それなればようございしますが、貴嬢の將來の幸不幸は實に貴嬢がお覺悟一ツにあるの

ですから……何事か運命と思召して、安心立命の地をお求め下さる様、切にお願致します。」と熱誠に充た語氣で云つた。

倭文子は首垂れて居たが、

「それは私だつても、決して自暴自棄なんかしないから……安心して居て……」とためらひながら「たゞ夫について正木、折入つて一ツお願ひがあるの。」

「え、それはどんな事です。」

「それは藤乃さんの事よ。」

「は、藤乃さんの事について——」

「どうぞ藤乃さんを貴君の奥さんにして下さいな。」と思ひ込んだ調子で云つた。

併し貞雄は冷やかに、

「それは何度仰しやるも同じ事です。私は決して藤乃さんを妻にいたしません。」と鐵の如き語氣で答へた。

「だつて藤乃さんはそのために獨身で暮すと、覺悟をなすつて居らつしやる位ぢやありませんか。」

「私はたゞ此間のお返事を繰返すのみです。」

『正木、なぜ貴君は藤乃さんを、そんなに冷淡にして？』

『冷淡にするつもりは有りませんが、致方がないではありませんか。』

『それでは正木、それほど貴君を思ひつめてる藤乃さんを放つて置いて、自分はどうするつもりなんです？』

『どうすると仰しやつて私の将来ですか。』

『あゝ。』

『私は生涯獨身で暮すつもりです。』と満身の力をたゞ双の眼光に籠めて、倭文子を見詰めた。

無量の意気が倭文子の胸に通じたのであらう。倭文子の眼には一杯に涙に漲つたが、同時に貞雄に對する一時の怨は霜の如く消えて了つた。

『正木、なぜそんな覺悟をして？』

『それはお答は出来ません。』

『私の爲ちやアなくつて？ 云つて下さい。』と倭文子の聲は震へた。

『お嬢様、お答は出来ぬと申上たではありませんか。私の身體は獨身でも、精神はお嬢様に捧けてあります。いつでも貴嬢のためには犠牲になりますから、どうか長く私ある事をお忘れにならんで下さい。貴嬢が何か私の助を要する場合にはいつでも飛んで上ります、私はたゞ貴嬢

の將來の御幸福を祈つて居るばかりです。』と鐵の如く見ゆる男の眼から、涙が溢れて出た。

倭文子は言葉もなく袖を顔に蔽ふた。數分時を經過した後、

『お嬢様、餘り長く居らつしやると、どんな疑を受けぬとも限りません。さアお居室へいらつしやい。』

『正木、勘忍して下さい。』と倭文子は涙を拭取つて淋しく立上つた。

倭文子は何気なく粧ひながら、鉛のやうに重い足を曳いて、わが居室へ引返して見ると、鐵が疊に俯伏して泣いて居る。怪しみながら、

『鐵、どうおしなの？』と言葉をかけると驚いて半身を起したが、

『おや、お嬢様！ 私、お、お察し申上けます。』と、またがはと泣伏した。

倭文子は亂れた様もなく、靜かに座に就いて、そつと涙を拭ひながら、

『それではお前、聞いてお居でだつたのかへ？』

『は、はい、お嬢様が正木さんのお部屋へお入り遊ばすのを、拜見いたしましたからもし春にでも偷聞されてはと、私が番を致しながら、伺ふともなく、概略のお話を伺つたのでございませす。どうぞお許し遊ばして下さいまし。』

『聞れたのなら仕方がないけども……』と俯いて遺瀨なげに『鐵、ほんとにどうしたらよから

うねえ。』

『私、お嬢様おいとしようございます。もうく久松様へ入つしやらないやうに、お話が出来ないものでございませうか。……お話が出来なければ、何か天災でも降つて来て、久松様が何うか遊ばすか、明日にも亞米利加どこかに戦争が始まつて——』

『磯、お前、まア何をおいひだね。私はもうちやんと覺悟をして居るのだから——定まつた自分の運命だと思へば何でもないのでもの、もう何も云つておくれでない。こゝで心が鈍るやうだつたら、正木に對しても恥かしいぢやないかね。』

『そのお優しい、健氣なお心が、いつを怨めしうございます。……これが私のやうなものなら、世の中の義理も遠慮も捨てかゝつて、思ふ男と添添けて了ひますが、なまなか華族のお邸にお生れ遊ばしたばかりに、思ふ事はお心任せにならず、辛い悲しい思を遊ばします。あゝ、私、出来るものならば、お嬢様のお身代りに立ちたい——』

『磯ッ、お前、もう何も云つておくれでないといふのに……』

『は……はい、磯は最早何にも申上ません。その美くしいお覺悟をお變遊ばせとは最早決して申上ません。たゞ一ツのお嬢様にお願がございませう。』

『お願つて何なのさ。』

『私は十四の歳から二十一の今年迄、お側に置いて頂きましたが、此上ともいつまでもくお側放れず、お事へ申したうございます。久松様の方へ入つしやる事におなり遊ばしても、どうぞ私をお小間使にお連下さるやう、お取計ひが願ひたうございます。』と思ひ込んだ氣色で云つた。

倭文子は心を動かされて、優しく、

『私もね、お前には離れたくないからね……久松へ嫁くやうになつても、きつと連て行くやうにするから。』

『それではアノお連下さいますか。』と磯の眼は涙渡る。倭文子のため唯一人の慰藉者となるのを、せめてもの喜びとするのであらう。

二人の間には暫らく言葉が絶えて居たが、磯の方から、

『お嬢様、久松様には御両親がお有り遊ばすのでございませうね。』

『いえ、この間お母様ばかりだと仰しやつてよ。』

『おや、さうでございますか。それではあのお妹さんがあるのでございませう。この間お出になつた時、生意氣で困るとか何とか、貴嬢に仰しやつていらつしやいましたでせう。』

『あゝ、女子大學を途中でお止なすつたのだと仰しやつたわね。』

『まあきつと生意氣な、ハイカラな方でございませうね。お姑さんはどんな方が存じませんけれども、そんな小姑さんがあつては、貴嬢も大抵御苦勞を遊ばさなければなりませんまい。』
倭文子は何とも云はなかつたが、姑や小姑の事は、今の今まで心に浮ぶ暇は無かつたのである。

(十四)

倭文子は兩親に縁談の承諾を與へてから今日は十日を過ぎて居る。其間には鍋島夫人を通じて、川上久松兩家の間にいろいろの交渉があつた。結婚の式は一ヶ月の後と定められたのである。倭文子はこの間にあつて何も口を挿まなかつた。すべて兩親の取計らひに任して居たので、たゞ果敢なき自分の運命に満足して、兩親の意を安んぜんとのみ勉めて居る。

久く藤久に會はぬやうな氣がするので、遣へば互に淋しい心を慰さめ合ふ節もあらうと、この日倭文子は富士見町の梅小路邸を訪つた。早速藤乃の居室に導びかれたが、藤乃の様子がどこかへ出かけるやうに思はれたので、

『おや、貴嬢はお出かけぢやなくつて?』

『いえ、今歸つて來たばかりよ。このごろ佛語の稽古を始めましたものですから。』と笑ひながら

云つた。

『おや、佛語を……』

『は、これまでセルフートなどを見て居たんですが、分らないもんですから、つい四五日前佛蘭西人の處へ通ひ始めましたの。』

『まあさうですの。貴嬢はほんとお羨やましいのねえ。』と倭文子はしみじみ云つた。それは藤乃が終生の戀を失つたにも拘はらず、そのため絶望の人となつた素振もなく、なほ飽までも向上心を失はぬのを見て、實際少なからず羨やましいと思ふと共に、わが弱い心を勵まされたのである。

『あら何が羨やましいんですの。……お羨やましいと仰しやれば、倭文子さん、貴嬢こそ、お目出度う存じます。お喜びにあがらうと思つて居ながら、お取込のところへ上つてはと實は控へて居たのでございますが。』

『え、あの……』と倭文子はためらつて『どこへも嫁きたい事無んですけれども、たうとう嫁かなきやならないやうになつたものですから……』と溜息と共に沈んでいふ、その顔色を藤乃は見咎めて、

『だつて貴嬢、こんなお喜ばしいお縁組はないぢやありませんか。』

倭文子は黙つて首垂れたが、

『どうですか知りませんが、藤乃さん、私はどこへも嫁つしやらずに、獨身生活の出来る貴嬢がお羨やましくございますわ。』と滅入つた調子で云つた。

『え、どうして貴嬢、そんな事を仰しやいます？』と藤乃は驚ろいてつく／＼倭文子の顔を覗き込む。

倭文子は答へはしなかつたが、なぜまた弱い心に返るのかと、われとわが心が責られるのであつた。

『貴嬢は久松さんがお氣に召さなくつて？』

倭文子はなほ暫らく黙つて居た後、

『我儘ですわねえ、世の中は思ふやうにならないものと覺悟すれば、それでいゝんですから—』

倭文子の述べは藤乃には意外である。倭文子に戀の悲劇があらうとは、藤乃の素より思ひも設けぬところであるから、

『だつて貴嬢、お氣に召さない御縁談ならなぜお断り遊ばしませんの。』
倭文子は驚いたやうに、

『いえ、何も久松さんがどうかうといふのぢやないのよ。私、貴嬢とおなじに、たゞ何處へも嫁きたくないですから……』

藤乃は眼を睜つて、

『貴嬢がそんな事を仰しやるのは不思議ではございませんか。』

倭文子はまた黙つて了つたが、暫くして『やつぱし我儘なのねえ、ほゝ。』と笑に打消して『ですけども私、もう覺悟をしてるんですから、決して御心配には及ばなくつてよ。』

併し倭文子の血色も勝れず、云ふ事も何か神経的なので、藤乃は心を傷めたが、深入して聞かうとすると、何氣なく話を他に轉じて了ふので、藤乃も深い意味のある事と思はず、或は結婚前に起して居る一種のヒステリーから、厭世觀に傾むきかけてるので、結婚さへすれば順潮に復する性質のものではないかと考へた。

藤乃は話題を他に導く。

『倭文子さん、その後立花さんは貴嬢のところへ入つしやいましたか。』

『いゝえ、このごろはちつとも入つしやいません。』

『でございますせう、こちらへはよく入つしやいますから……。つい二三日前も入しやいましたが、アノそれに就て貴嬢にお話があつてよ。』と藤乃は意味あり氣の笑顔を示せる。

『さうですか。』と倭文字は誘はれて好奇の眼光を藤乃に向けた。

『そのお話をする前に、この間丸の内のM——俱樂部であつた、日本婦人協會の總會のお話を申上げませうね。その總會には此方の殿様——伯爵も來賓として、講演を遊ばしたさうですが、その外にも演説などがあつて、それが濟むと俱樂部の庭で、何でも餘興やら立食やらの催しがあつたのでございますよ。伯爵は別にその時のお話をなさいませんけども、その翌日婦人協會からお禮に見えた幹事の藤本さんが、私に話していらつしやいましたの。それが錦子さんのお話なのよ。』

『このごろ錦子さんは、どの婦人會へも大抵入會して居らつしやいますつてね。尤も錦子さんを拒絶した婦人會もあるといふ事ですが——これも藤本さんのお話ですけども——そして何の會へもきつと人の目につく盛装をなすつて入つしやるさうで、藤本さんは實に歩くのだつて、悪口を仰しやつて居らつしやいましたが、おほよ、そんな事はございませぬけども……。で總會の時には、別して今日を晴と着飾つて居らつしやいましたつて——薄空色の紋縮緬へ夜會風に、裾から胸の方まで百合の花を友仙で染出した派手な振袖に銀糸で夏菊を織出した洗朱の厚板とかを、矢の字に締めて居らつしやいましたとか、何でもそんな華やかな服装だつたと申しますが、……まアそんな事はどうでもよいとして、肝腎の事を申しませぬ。』

これも貴方ですからそつと申上るんですけども、あの通り錦子さんは、伯爵を何とか思召して居らつしやる所でせう。それでその日も伯爵が接待役の女學生に案内されて、男子の來賓席へいらつしやる姿を、錦子さんが御覧になりますとね。あの方の事ですから、そのお服装ですぐ來賓席の方へいらつしつて、伯爵に御挨拶をなすつたさうで、一時は皆さんの視線がその方を集つて了つたと、藤本さんは形容をなすつて、誇大に仰しやいましたつけが……。まア始めにそんな事がありましたね、こんどは講演が濟んでからのお話よ、おほよ。

講演が濟むと、來賓の方もとんと庭で記念の寫眞を撮つたのださうですがね、その時錦子さんは伯爵のお手を曳ないばかりにそこへお連申し、御自分もそのお傍に並んでお撮りなさいましたのですつて、……それが濟むと今度は餘興の方が始まつたと云つては、會の幹事でもあつたやうに伯爵を御案内し、立食場が開けたと云つては、またお傍へ席を取るなど、一ツはそれをみえのやうに遊ばして、伯爵は飛んだ御迷惑を遊ばしたと申す事なのでございますの。『藤本さんのお話を半分は何つても、伯爵はどれほどか御迷惑を遊ばしたに違ひございませぬわ。そつちこつちでみなさんがいろいろ噂をして居らつしつたほどだと申しますもの、ま、併し總會の時のお話はそれだけですの。』

『私は藤本さんにこのお話を伺つてから、何とかして錦子さんに御忠告をしなければと考へて

居ましたが、さうすると再昨日の事よ。私が伯爵とお庭でお目にかゝつて、暫らくお話を申上げて居る中、婦人協会の事が出たものですから、その折は錦子さんの事で何か御迷惑を遊ばしたやうに承はつて居りますと申上げますとね。——實はそれについて大變に迷惑をしたので、自分分は兎に角、これからまたあんな事があつて、人に注目されるやうになつては、第一立花さんの不利益だから、將來そんな不心得のないやう、立花さんに遭つたらよく話をしなければならぬ、とかう仰しやるのよ。丁度そのお話を伺つて居る時に、不思議とまた錦子さんが尋ねて入しつたぢやありませんか。』

此話が倭文子に感覺を與へて居るのを見て藤乃は詞を次ぐ、

『伯爵に伺ふと、それでは丁度いゝ折だと仰しやるものですから、お通し申しますと、錦子さんからは伯爵に協会の時の御挨拶があつて、今日は是非ピアノを伺ひたいなどと、後ではそんな御所望も出ましたが、伯爵はたゞ當らず觸らずお遇らひなすつて、終に錦子さんに、後程書箱室でお話したい事があるからと仰しやつたまゝ、お引取になつたのでございます、その跡が可笑しいやうな、お氣の毒なやうな——おほ、何でも錦子さんは書箱室でお話があると仰しやつたのを、きつと御自分の方が待設けて居らつしやゝやうな、お話のある事と早呑込をなすつたのでございませう。伯爵がお引取遊ばしてから、大層そわ／＼なすつて私が伺

ひもしない中に、婦人協会のお話をいろ／＼なさいましたが、それが藤本さんに伺つたのと、丸で違つてるから可笑しうございませう。

錦子さんのお話ですとね。伯爵の方から錦子さんのお側へいらつしつて、いろ／＼親切にお世話をなすつたので、——餘興場や立食の席へも、伯爵が錦子さんをお連なすつたのですつて……で錦子さんは、そんなに伯爵がお世話をして下さるので、みなさんがどんなに私を羨やましたがつて居らつしやつたか知れなかつたの、中にはいつ伯爵夫人におなり遊ばすなどゝ失禮な事を云ふ方があつて、顔から火の出るやうな思をしたのと、そんな事を仰しやるでせう。私ちと御忠告を申上げようと思つたのが、もう二の句が次けないぢやありませんか。

その中學校からお二方がお歸りなすつてお庭へいらつしやると、錦子さんは姫様若様つて大騒でございましたが、その時はいゝ加減に時刻が立つて居たものですから、殿様にお目にかゝつて來ると仰しやつて、書箱室の方へ行らつしやいましたのよ、私はその間お二方のお相手をして居ますと、どんなお話のあつた事か、二十分とたゝない中に歸つて入つしつた錦子さんのお顔は、すっかり冴た色が取れて了つて、お氣の毒なほど失望して居らつしやるのを、無理に何でもなくして居らつしやる様でしたが、お話は済みましたかと伺ふと、何か婦人會の事ではないか、お問合せがあつたのだと、そんな事を仰しやいましたね、今まで大騒ぎをしていらつし

つた姫様や若様にはお詞もかけず、何か外へ廻るところがあるからと、そのまゝすぐとお歸りになつて了ひましたの。その時にはほんとお氣の毒で、どうか慰さめてあげたいやうでございましたわ。』

錦子の話はこれだけである。倭文子は如何にも虚榮の影のみを追ふ、錦子に有りさうな、之れも一場の悲劇だと思つた。

右の話を聞いて倭文子はいくらかの慰藉を得て、元園町に歸つた。

元園町へ歸ると小間使の磯が待迎へて、

『おや、お嬢様、お歸り遊ばせ。……あの貴嬢をお待かねのお客様でございますよ。』と眼の色を變ていふ。

『え、誰方——？』と倭文子は不安の様子。

『當て、御覽じませ、女の方でございますよ。』

『え、女……誰方知ら、立花さん？』

『いゝえ、久松様のお妹さんと仰しやる方でございます。』

『ま、さう。』と驚ろいて『二三日前手紙を下すつたつけが、それではお出なすつたの？ 誰方と？』

『いゝえ、お嬢様、それがお一人ツきりなのでございますよ。マア随分ではございませんか。』

『で、どんな方？』

『ま、いらつして御覽遊ばせ、磯には何も分りませんが、御懇親にもならね先に、平氣で入らつしやる位のお嬢様でございますからねえ。』

倭文子は溜息を吐いて、

『そしてどこに居らつしやるの？』

『奥様がお喜びでお相手をして居らつしやいましたが、先刻學校からお歸り遊ばした富美子様をお相手に、只今はお庭の方に居らつしやいます。』

『さう、では私はお母様に御挨拶をして、それからお妹さんにお目にかゝりませう。』

倭文子は進まぬ足を母の居室に向けた。

(十五)

これより先久松喬の妹田鶴子は富美子に伴はれて、幽鬱な夏木立の庭の面をぶらぶら歩いて居たが、次第に背後の方へ廻つて、松と櫻の下の榻の前へ來ると、

『貴嬢、暫らくこゝで休ませうねえ。さうする中に姉様が歸つて居らつしやるでせうから。』

田鶴子は薔薇の香の高い手巾で、榻の上の落葉を拂つて、それへ腰を卸すと、富美子も初々しく並んで腰をかける。

田鶴子は今年十九、兄には似ぬ體格の、いつそ小柄な、段のある長い鼻の、やゝ釣つた切の長い眼、眉毛が濃く額が狭くて、生際は悪いが、色が白い方なので、決して悪い縹緞ではない。髪はエス巻に卵黄色のリボンと白の西洋花を挿して、紫がよつたお召の單衣を着て居た。

『富美子さん。』ともう馴々しく名を呼んで『貴嬢、姉様は愛好？』
富美子は莞爾首肯して田鶴子を見上げる。

『さう、まア、それはいゝわねえ。あの姉様は毎日何をして居らつしやいますの？』

『あのね、姉様はね。』考へて『御本を讀んだり、お琴のお稽古をなすつたり、それから——それから——』

『語學のお稽古はして居らつしやらなくつて？』

『え？、あ、さうよ。姉様はお和歌の稽古に入らつしつてよ。姉様はお和歌を作る事お上手ですつて。』

『おや、さうですか。それから何かまた稽古して居らつしつて？』

『まだ西洋料理のお稽古にもいらつしやるのよ。姉様がお拵へなすつたのをお父様はいつ々』

『層おいしいつて召上つてよ。だけでも私は西洋のお料理きらひ——』

『おほ、さうですか。それなら私は姉様が私のところへいらつしつたら、いろいろ教へて頂きますせうね。私なんぞは何にも出来ないんですから。』

『お父様は私も姉様のやうにならなければいけないつて仰しやるのよ。』

『どうも姉様は何もかもお上手で違つたものでございますね。』と田鶴子は眉をびくりとさせて云つた。

田鶴子が富美子をつかまいて、倭文子の事を根掘り葉掘り聞て居る時、卒業試験を間近に控へた正木貞雄は、いつもの木下蔭で本を讀ふと、何心なく二三冊の洋書を抱へて、丁度榻の背後へ廻つて來たが、見知らぬ女が來て居るとは知らず、倭文子が歸つて來て富美子と話を居るのだと一圖に思ひ込んだので、二人の後へ進み寄ると、

『お嬢様——もうお歸りでしたか。』と田鶴子に聲をかけた。

田鶴子は驚ろいて、後を見返ると、眉目俊秀の青年が立つて居る。思ひがけぬ事だったので、呆氣に取られながら、その顔を見詰ると、正木も人違ひと知つた利那、追がに驚ろいて顔を赧め、

『や、これは失禮いたしました——』

「あら、正木、姉様だと思つたの？ おほよよ。」

「全く私の思ひ違ひで、いや、飛んだ失策を致しました。と頭を下げる。」

「いえ、貴君、どうしまして——」と田鶴子は榻を離れて要領を得ぬ事を慌てたやうに呟いたが、どういふものか顔が赭らんで居た。そして正木の抱へて居た本に目をつけて「貴君、ここで御勉強を遊ばすの……？ ではどうぞ、さ……」と顔には好意の表情が上る。

「え、なに、失禮いたしました。」と正木はたゞ冷やかに一禮して元來の方へ立去つて了つた。何とも知れぬ嫉妬心のやうなものが、むら／＼と田鶴子の心に湧いた、へを湛ええ眠にじつと正木の後姿を見送つて居たが、やがてその姿が隠れると、無意識に榻の上に腰を落した。無心な富美子は田鶴子の素振には何も心づかぬので、

「正木は可笑しいわねえ。姉様と間違へたりなんかして、おほよよ。」

田鶴子は我に返つて、富美子と向合ふと、

「富美子さん、あの正木つて何方？」

「お家の書生だわ？」

「さう。正木誰？」

「正木貞雄よ。大學校に出て居るの。」

「え、ちや大學生と？」田鶴子の眼は輝やいた。

「もう直き卒業するのよ。卒業すると學士になるんですつて、正木はえらいのよ、お父様は今度の卒業式に、天皇陛下から銀時計を頂かなければいけない、軍人が金鷄勳章を頂くのも同じだからつて、そしてね、若し頂いたら洋行させてやると仰しやつてよ。正木はほんとに勉強家なんですから、きつと卒業式には、天皇陛下から銀時計を頂戴してよ。」

「まアそんな方？」と田鶴子は懵乎として「そして御親類か何かの方ですか？」

「いゝえ、あの姉様のお乳母の子よ。お乳母はもう死んだのよ。姉様と正木とは同じお乳で育つたんですつて。だから兄妹よ——ほらお乳の兄妹よ。」

「ほゝ、ちやア乳兄妹で居らつしやるんだわね。」と嫉ましさうな色を浮べて「姉さんとは小さい時から一緒に居らつしやるでせうね。」

「正木は小供の時から來てるんですつて。だからお家の人もおんなじ事よ。」

「今でも姉さんとは一番仲をよくして居らつしやるでせう。」

「え？ 姉様は正木をほんとの兄さんのやうに思つて居らつしやるのよ。」

「こんなとこで。」と榻を指して「姉さんと正木さんと一緒に話する事もあつて？」

「有つてよ。」と富美子は無心である。

「今も正木さんは、私を姉さんと思ひ違ひして、お話をしに入つしたのね。私だもんだから失望して、さつさと彼方へお歸んなすつたんだわ。ほんとにお氣の毒だつたわね——」腹立しけな眼にまた涙が浮ぶ。

「あら姉様が歸つて居らつしてよ。」千度この時富美子は、目敏く姉の姿を認めて嬉しげに榻を離れた。

小間使の磯が先に立つて倭文子を導いて來のである。田鶴子は前をかき合して立上つたが、一目見た刹那、穎敏な直覺で、まさしく自分より優れた美人で、わが兄の如き武人をも、その足下に跪ぶかしむるに足る縹緞であると思ふと、前からの印象も加はつて、嫉ましが深く心の底に刻まれる。併し何氣ない顔色をして此方からも二三歩進みよると、先に立つた小間使が「お嬢様でございます。只今お歸り遊ばしました。」

田鶴子は美しい笑顔を倭文子に向て、

「私、久松田鶴でございます。初めてお目にかゝります。今日はお留守へ出まして、厚かましく長居をいたしました。お待申した甲斐があつて、こんな嬉しい事はございません。」と鮮やかな口上である。

倭文子もこれに對する形式的の挨拶をした後、

「一昨日はお手紙を有難うございました。實はお出をお待申して居りながら、今日とは存せずに出をしまして、飛んだ失禮を致しました。」

二人の挨拶の済むのを待かねて居た富美子、

「あの姉様、今ね、正木が姉様と人間違をして可笑しかつたわ。」

「何です、正木がどうしましたつて？」

「あの何でございますよ。」と田鶴子が引取つて「其正木さんと仰しやる方が、貴嬢を尋ねていらつしやいましたが、どう遊ばしたのか、私のやうなものを、貴嬢とお見違なすつて、言葉をおかけになつたのでございますよ。」

「おや、貴嬢と私とを間違へて、おほ、粗相な人でございますねえ。」と倭文子は何か不穩を感ずる胸を鐘めて云つたが、田鶴子にちつと顔を見られて居たので、われにもあらで緘くなつた。田鶴子はまた妙にそれを注意して、

「ほんとに正木さんとやらにはお氣の毒でございました。」

磯がなにかの暗流を見て取ると、中へ入つて、

「あのどうぞあちらへお出遊ばして下さいませ、お嬢様とお迎ひにまゐつたのでございます。」

「さ、どうぞお出下さいませ。」と倭文子もその尾について云つた。

『お母さん、たゞ今。』

『おや、田鶴さんかへ。大層遅くなつたぢやないか。』と今讀みさしの新聞の續物を傍へやつて、眼鏡越しに田鶴子を見たのは、年ごろは五十四五、切下髪の隠居風で、髯鼻の眼の鋭どい、顔立は寧ろ喬に似た、母のお石である。お石は十年前に寡婦になつたので、その後二人の小供、わけて喬を立派なものに育てあげた事を、自慢の種にして居るが、なるほどどこかに男勝りといふところが見える代り、一寸人づきが六かしくつて、意地の悪さうな女である。

『生憎と倭文子さんが居なかつたので、待つてたからよ。』

『それはお氣の毒だつたね。それでも遭つてお出なのだらうね。』

『えゝ、その中に歸つて居らつしたんだけど、私、窮屈な思ひばかりして詰らなかつたわ。』

『でもお前が勝手にお出なのだから仕方がないわね。そしてどんなだつたへ？ 嫁の様子は寫眞の通りかへ？』

『お母さん、そりやア私見たやうぢやないわ。だから兄さんが熱中なさるのよ。』

『さうかへ、男といふものは綺織さへ善ければそれで大騒をするんだから、喬でも女はもう川

上のより無いやうに思つて、私がいろ／＼と心配してるのも思はず、あれで無ければいけないの、あんな淑女は華族中にも無いの、今時のハイカラ娘とは違ふのと、それはまア大變な吹聴だつたが、まあ喬のいふ事だから間違はあるまいよ。そんな嫁はほんとに勿體なくつて、私なんぞにはお相手も出来まいと思ふと、田鶴、私は嬉しくつて涙が溢れるよ。』

『さうよ、お母さん、兄さんは私に向つても、お前なんぞはお轉婆でハイカラだから、少し見習はなければいけないつて……どうせ私はお轉婆でハイカラだわ。だから今日は見習に行つて来たのよ。』と田鶴子も當るべからざる氣焰である、追がにわが子に雷同するのを氣恥かしく思つたのか、

『お前、少し口をお慎みなさいよ。それだから兄さんにお轉婆だと云はれます。ほんとに嫁が来たらずしづゝも見習ひなさい。』

田鶴子はツンとして膨れて居る。

『だがね、田鶴さん。』と母はまた優しく『嫁はお前には優しくしたかへ？』

『どうせ私のやうなものですもの、たゞ寄らず觸らずになさるのよ。きつと何處かの田舎ものが来た位に、後では笑つて居らつしやるでせうよ。あゝ悔しい。』

母は今田鶴子を誂めた言葉も忘れて、

『さうだらうね、華族を鼻にかけてお前なんぞは見下して居るに違ひないよ。だつて高が男爵ぢやアないかね。喬などは縁故でもなんでもあるのだから、今貰はうと思へば、子爵からでも伯爵からでもいくらでも望手があります。』

田鶴子は暫らく黙つて居たが、

『さう／＼、それからお母さん。』と俄かに思ひ出したやうに『倭文字さんはお琴が上手で、語學が達者で、歌をお詠なされる事が天才で、それから、お、お料理が大變お上手なんですつて（と力をこめて云つて）全く私のやうなものには比べものにならないのよ。だから兄さんが見習へと仰しやるのも無理もないんだわ。』

『おや、それは私もどんなにか楽しみなこつたらう。田鶴さんばかりか、これからは私も腰折でもなほして貰ひませうよ。あゝこれだから年を取ると逆ま事ばかりをみます。やれ／＼。』とまた新聞を取上げた。

(十六)

或朝東京の各新聞の叙任辭令欄に參謀本部附陸軍歩兵少佐久松喬が陸軍中佐に昇進の辭令が載つてそして、同日の第三面には、この新歸朝の新進中佐と川上男爵令嬢倭文字との間に、

婚約成つて、既に結納の取換せさへ済み、來月中旬式を擧げる由の報導が乗つて居た。

この三面記事を見て眞赤になつたのは、子爵松平亮二郎で、新聞紙二三枚を窺みにするに母の居室へ飛んで行つた、母はこれも切髪如何にも人の好さうな上品な御隠居妾の婦人である。

『お母様、實に怪しからん！ 僕は騙されたんだ。實に心——心外です！』

母は驚ろいて、

『これ亮さんどうおしです。血相を變へて——』

『お母様、こ、これを読んで下さい。實に怪しからんです。川上の倭文字さんは此間獨逸から歸つて來た、久松といふ軍人と結婚するといふんです。こ——この通り、結納の取換せさへ、すましてるんです！』

母は差付られた新聞紙の記事に一わたり目を通したが、追がに面白くない顔色で、

『なるほどこれで見ると、少し筋が違ふやうですね。』

『筋が違ふどころぢやアありません！ 全く人を踏つけた仕方です。全體こつちへ何と云ひました？ 倭文字は當分他へ結婚せずに一二年勉強したいといふから、この話は暫らく延期してくれろ、後でまた時機が來れば話を繼續するからと、云つたぢやありませんか。僕はたしかに

前の濠でその投身を助けた、代書人野澤の妻お豊にバツタリ出遭つた。お豊は例の通り赤兒を負うて居たが、

『おや正木様でございますか。いつぞやは飛んだ御厄介様になりました、その後は非お邸へも出ました上、お嬢様にお禮を申上なければ相済まないのでございますが、何分良人があゝいふ風でございますし、また私風情がお出入を致しましてはと、つひ御遠慮を申して居りますやうな次第で……』

正木は心易く、

『なに、そんな心配は要んです。尤もお嬢様はね、時々お案じになつて居らつしやいますよ。併しその後はどうです。僕も一度尋ねて行かうと思ひながら、何分此前辟易して歸つたやうな譯だから……』

『さうでございますよ。何ともお詫の致しやうもありません事……私がお陰で生命拾ひをしましたのを、喜んでくれます事か、なぜ死なかつた、この死損なひ奴と、二言目にはそれでございますもの、翌る日貴君がわざわざお説諭にお出下さいましたのに食つてかゝつて、大きなお世話だの、なぜ餘計な事をしたの、容子が怪しいのとそんな無法を申上るといふ人でございますから……』

『僕もあの時は實に驚ろきましたよ。であれを見たので、その後は察して居るんですが、どうです此節は？』

『ハイ、實に困り切つて居ますんで——』とほろりとして『それといふのも一ツは格氣深い故で、なぜあんなですか、病といふのでございませう。あれからといふもの、いふ事に事を缺いて、貴君と怪しいの、馴合で投身の狂言をしたのだらう、その後も辨叟をしてるだらうなど、この節はそんな邪推を申すのでございます。』

正木は初めて聞いたので驚ろきながら『そんな事をいふですか、實に言語道斷だ。一體そりやア云ひがゝりなんですか、また實際邪推なんですか。』

『ハイ、どうも言がゝりでも有りません様で、いつもまはり氣が嵩じると、狂人のやうになつて了ふのでございますから……こんな事は人様にお話も出来やいたしません、良人の前では滅多に八百屋や肴屋と口も利けないのでございます。その癖外の事では猫のやうな男で御座います……、私一日も添つて居る氣は致しませんのでございます。』

『フム、さういふ風ぢやア全く困るでせう。いつそ離縁をしたらどうです。』
『え、貴君そんな事をしたら殺されて了ひます。』とお豊は身を震はせる。
『それぢやア始末にならん。併しお前さんになぜ死なぬといふ位なら、離縁してくれと云つた

ら、却つて喜びさうなものです。そりやア一種の——さうだ、嫉妬狂とでもいふのか知らん。何にしてもお前さんこそ氣の毒だ。」

「私はたゞ自分の因果と諦めるより他仕方がございません。」

この話をして居る時に、ひよつくり辻角から表はれたのは、古びた臺灣バナマを被つて、怪しげな紺の三ツ紋の羽織に、襷の無くなつた嘉平治平の袴といふ出立、左の手に後生大事と風呂敷包を抱へて、辨當を持つた、赤い丸鼻の、ぎよろツと光つた下り目、そして鼻の下には鬚を生やした三十五六の男で、正木は一目見ると、お豊の亭主の代書人野澤某と知つた。

悪いところだと思つたが、追つかないので、正木はその瞬間泰然として彼に對する覺悟を定めたが、氣の毒にお豊は蒼白になつて了つた。

彼は同時に野澤も正木とお豊とを認めたので、その赤鼻がまづ眞紅に變るとその紅は火のやうに顔中に擴がつて、青筋がその間を稲妻のやうに走り出した。

「やいお豊、このざまア何だ。己が今日は寄道をして居るとも知らずに、すぐ跡から情夫と姉弟に出やあがつたんだな、太え女だ、よくも己の面に泥を塗りやがつたな。覺えて居れ！」と正木に向直つた。

この時は火のやうな色が顔から颯と鼻の先の紅と青筋だけが残つて居た。一大事とお豊は夫

の袖に縋つて、

「あれ飛んでもない、何といふ事をお云ひだね。こゝは往來の眞中ぢやアないかね。人が來るといけないから——」

「なに、往來の眞中だ、その往來の眞中で己に恥をかゝしたのは己等ぢやアないか。放しやアかれ。」と袖を拂つて、いきなり正木の胸倉を捕へ「やい、書生ツ坊。よくも人の女房と姦夫しやがつたな。」

「こゝら無禮ものツ！」と正木はその鍛えた腕で野澤の手をねち上ると突放して「何といふ怪しからん事をいふか。今君の細君に途中で遭つて物を云つたからつて、それが何だ。」

「なに、途中で遭つた？ 約束をして遭やがつたんだらう。おい己の様な奴はな——」

お豊は一所懸命に中に入つて、

「まアほんとに飛んでもない！ 今こゝでお目にかゝつたばかりぢやアないかね。私のやうなものをつかまいて、そんな馬鹿馬鹿しい事をなさる方が、なさらぬ方か……ほんとに呆れて物も云へやしない。」

「なに、呆れて物が言ないだ？ 此不貞腐れ奴！ 貴様は家へ引張て行くからさう思つて引込んで居ろ。己は今姦夫の成敗をするんだツ！」と叫んで又正木の腕を捕へる。

その中周囲に一人立ち二人立つので、血氣の正木は勘忍袋の緒を切ると、
 『姦夫とは何だッ。貴様のやうな奴は道理を云つて聞かしても分らん、鐵拳の制裁を食へ！』
 といきなり野澤の頭を殴りつけた。そして彼のひるむところに乗じて切抜て立去らうとしたの
 である。

丁度その時またこゝへ通り合はしたのは今紀尾井町の自宅を出た着流し姿にステッキを曳い
 た松平亮二郎であつた。

殴られた野澤はいよく狂人のやうになつて、

『己、殴つたな、姦夫だから姦夫と云ふたのが何だ。こら貴様のやうな奴はな、主家のお嬢様
 とも密通する奴だ。』

『あれ、お嬢様のお名まで引合に出すとはあんまり酷いちやアないかね。もういゝから私と一
 緒に家へ歸つておくれ。』とお豊は兎も角も亭主を連歸らうと焦り出す。

『お嬢様の名を出して何だ。密通をする奴だからさう云つたのが何だ。己等が蒼白になつたと
 ころを見ると、もう出来てるだらう。』と手もつけられぬ狂人である。

『おい、正木君。どうしたのか。』と松平は見兼て言葉かけた。

『やア松平さん、始末にならん狂人で——』

『狂人とは何だ？』と血眼になつていきまく野澤の顔を松平は不思議さうに見詰めたが、

『おい貴様は野澤ぢやアないか。』

野澤はじつと松平の顔を見返したが、

『貴方は誰方で——？』

『ウム、野澤だな。我輩は紀尾井町の松平だが、覚えがあるだらう。』

『紀尾井町の松平様？ 夫では貴君が若様で居らつしやいますか。』と野澤は驚いてひどく恐
 縮の様子。お豊はほつとし乍らも、どうした譯かと夫と松平の顔と見比べる。

『さうだ、貴様が邸の書生をして居て、不都合を働いて逃亡したのは我輩がまだ十四五の時
 だつたな。それから貴様は今日まで音信不通で居たのだ。怪しからん奴だ。』と亮二郎は一喝し
 たが、その眼には何か奇遇を喜ぶやうな色が閃めいた。

『何とも面目次第もございませぬ。』と野澤は亮二郎の前では、まるで人間が變つたやうだ。

『全體何だ、往來で飛んでもない事を喚き散して——』と亮二郎は笠にかゝつて云つた。

『女房がこの書生ツ坊と姦夫をしやがつたんで——』

『これく何といふ。正木君がそんな事をする男と思ふか。馬鹿もの、よし／＼野澤、それで
 は我輩が預からう。決して悪いやうに取計らはんから、我輩に預けてくれ。正木君、君は飛ん

だものにかゝり合つて嘸迷惑だらう。いゝから吾輩が引受けたから打捨つて行き給へ。』
『さうですか。それぢやお任せします。實にお話にならん馬鹿々々しい事で、この男は嫉妬狂
なんです。貴君も御承知の筈だ。こゝに居る細君は僕が五番町の濠端でお嬢様と一緒に投身を
助けた婦人です。僕が助けたのが怪しいといふんだから始末に終へんでせう。何分よく説聞し
て下さい。』

かう云はれてる間、野澤は眼をきよろりと光らせて、正木を睨てるだけで何も云はぬ。正木
が立去つても一言も云はぬ。お豊は胸を撫下して、亮二郎に會釋し、

『お蔭さまで、安心をいたしました。御恩のある正木様に飛んだ御迷惑をおかけ申
しまして、一時はどうなる事かと存じましたに……』

『これまだ正木に未練を残して居るか。貴様は今家へ引張つて行つて成敗するから待つとれ。』
とまた敦固始めるのを、

『野澤、貴様には少し言聞かす事がある、ちよいと我輩と一緒に来い。』

『へ……』

お豊は亮二郎に、

『それでは何分よろしく願ひ申します。お前さん、それぢやア私に行くからね。』

『おいどこへ行く。』とまた血色が變る。

『どこへ行くつて、親方のところぢやアないかね。』

『これ、野澤、もういゝ加減にせんか。ぢやア細君、親方の所へでもどこへでも安心して行く
がよい。私が預かつたから……』

人立は減つたが、まだ三四人は残つて居る。お豊はその中を極り悪げに俯むいて立去つた。

『それぢやア野澤、我輩について来い。』

野澤は素直にその後に従ひながら、

『あのお邸へ出ますのでございますか。』

『安心して来い、家扶も代つて居るから貴様の顔を知るまい。裏口の方から入れてやる。』

程なく紀尾井町の子爵邸へ着く。母や家扶には知れぬやう、野澤を一室の中に通すと聲を憚
つて、

『貴様にも實に困つた奴だな……正木と細君が怪しいと云つたところで、何も證據のある譯で
はあるまい。』

『證據は無くつても何も怪いんで——』

『フム、さうか。』とちつと野澤の様子を見て居たが調子を碎いて『併し野澤、お前の細君と何

うかうといふ事は知らんが、正木は女にかけては油断のならん男だからな、どんな事が無いとも限らん。」

一八六

亮二郎は何も正木を人にまで中傷しようといふ考はない。併し正木には學生で居た時から含んで居たのは事實で、彼の不品行を排斥したのも正木である、彼が倭文子の心を得ようとする時に、始終邪魔になる如く思はれたのも正木である。のみならず倭文子の心を久松に傾けしめたのも、正木ではないかとの疑さへある。で彼は態々正木をどうしようといふ積極的の考はないが、正木などはどうなつてもそんな事には關はぬ、何かの時の犠牲にする位差支ないと思つて居る。

「さうです、全く怪しいに違ありません。」ともう眼の色が變りかけた。

「それからお前は、あの男が主家のお嬢様と通じて居るとか何とか云つたね。あれは何か突止めて云つたのかい。」

野澤は目をきよろ／＼させて、

「そりやア——そりやア私の邪推なんで……」

「併しあの男の事だから、どうとも分らんよ。我輩は少し押へてる事もある——」

「いや、あゝいふ奴の事です。今時の書生ツ坊は渴えきつて居ますからな。目上のものだらう

が何だらうが、そんな見界はありませんや。」

「まアそれはどうなつたところで、あの男が川上の邸に居る——り、お前の細君は危険といはんけりやならん。こりやアどうかせんければいかんなア。」

「どうしたらようございませう。」

「それには正木をあの邸から追出す工夫をするに限るな。」

「そんな事が出来ますか。」

此時小間使の茶を運ぶ姿が見えたので、亮二郎は「えへん——」

(十七)

参謀本部の久松中佐に宛て、差出人の名の無い一封の私書——而もそれには秘密親展と添書のしてあるのが届いた、喬は訝かりながら封を切つて読んで見ると、それは久松の今度の結婚に對して、驚ろくべき警告を與へたもので、その手紙には發信者は深く川上家の内情に通じたものであるが、倭文子嬢は決して純潔な處女ではない。同家に書生として養なはれて居る學生某と相通じて居たので、その事が両親に知れたため川上家では俄かに騒ぎ始め、倭文子嬢の嫁入口を求めて居た際、貴下の申込があつたので、奇貨措くべしと二ツ返事で承諾した譯で、何

一八七

にも知らぬ貴下こそ實に氣の毒の限りである。また學生某は倭文子嬢の乳母の子と云はれて居るが、實は男爵と或縁故のあるもので、これはその中機會を見て洋行させ、二人の間を遠ざける計畫である云々との事が認められてある。

この中傷的書面は喬に非常なる混亂を與へた。彼の頭には堪へ難き憤怒と猛烈な嫉妬と、同時にまたこれを打消さうとする念慮と盛んに闘かひつゝあつたが、彼は是非とも其事實の眞偽を確かめぬ中は斷じて結婚せじと、無限の懊惱に驅れながら、退出の時間を待兼て馬を馳せながら自宅に歸つた。

兄を出迎へて軍服を脱かへさせて居た田鶴子は、兄の血色さへも悪く口數も利ずに居るのを訝りながら、

『兄さん、どうかなさらなくつて？』

『どうもしやせん。』と冷やかに云ひ放つ素振がいつもの兄のやうでない。

『さう、でも顔色が悪いわ。あのお湯がもう湧いてゝよ。』と浴衣を差出すのを、

『湯には入らん、今から横須賀へ行つて来るから着物を出してくれ。』

『横須賀へ？ 何にいらつしやるの？』と妹は掛念の眉を寄せる。

『お前の知つた事ではない、着物を早く出さんか。』と怒りつけられてむつとなり、

『ハイ、ハイ。』と邪慳に簞笥を開くと、投るやうに『結城のよござんすか。』

『何でも早くすればよい、そして馬丁を俵屋へやるのだ。』

田鶴子は膨れてる中にも何うした事かと怪しみながら、黙つて着物と羽織と帯を取揃へて差出した。喬は單衣を着て無造作に兵兒帯を巻着たが、何か思ひ浮べた様に、

『お、田鶴。』と時計を見て『まだ時間がゆつくりだ。それでは煙草を一服呑んで出かけよう。卷煙草入を持って来てくれんか。』と前よりは優しく云つた。

田鶴子は卷煙草入と火皿にマッチを添へたのを持って来て、

『紅茶でも召上りますか。』

『紅茶は入らんが、兄さんと少し話をするがよい。』

何だか容子が分らないので、田鶴子は兄の顔色を伺ひながら横坐りに坐つて見る。

『田鶴さん、お前は二度川上の家へ出かけて往つたさうだな。』

田鶴子は黙つて首肯く。

『それでは川上に書生が居るのを知つてらだらう。何でも學生だ。』

『知つてゝよ、大學生だわ。』と兄を見る眼は好奇心に輝く。

『なに、大學生か。』と兄の眼も異様の光を帯びて『ウム、その大學生だ。全體どういふ男かお

前は見たか。』

田鶴子は何か顔を赧めて、一寸躊躇つたが、

『え、あのちよいと——』

『ウム、ではどういふ風な男だ。』

『どういふ風と云つて——困るわ。男らしい人よ。大學校で大變に成績の善い方で、今度優等で卒業なすつたら、川上さんで洋行さしてあけるんですつて。』

『え、洋行させるツ？』と喬の血色は見る間に變る。

『は、夫は倭文子さんのお妹さんのお話でしたけども……』と驚き顔に兄を見詰めて、

『田鶴さん。』と兄はまた柔らいで『その書生と倭文子の間に就て、お前の何か觀察した事はなにか。』

田鶴子は扱はと始めて悟るところがあつた。がたど不思議さうな顔をして、

『いえ、何にも——』

『倭文子の乳母の子だとかいふのだらう。』と喬は忽ち云はんと欲するところを避けた。

『それはさうよ。』けろりと兄を見て『ですから倭文子さんはその方をたよりにしては居らつしやるらしいのよ。』

『お前にもたよりにして居る風が見えたか。』と兄の眼光はまた鋭く輝やく。

『あら、兄さんは何か邪推して居らつしやるんだわ。』と兄の腸を抉つて『倭文子さんに限つてそんな事決して無つてよ。』と妙に力を籠る。

母の前では倭文子を陥れて顧みなかつた田鶴子は、兄の前では却つて倭文子を辯護する撞着をして居る。併し田鶴子には田鶴子の理由があるだらう。田鶴子の此言葉は不思議なほど喬の神經を柔らけた。が喬はそんな容子は見せぬ。

『馬鹿、己が何を邪推して居るのだ。お前こそ己の話といふと、いつも下らぬ邪推をする癖に……』

田鶴子はツンとして、

『どうせさうよ。私のやうなものは今にどんな邪推をするか知れやしないから、さう思つて居らつしやい。』

『どれもう俾は來て居るか。』と喬が立上らうとする時、入つて來た下女、

『あの鍋島様が入つしやいました。』

『ウム、鍋島が來たか。』と喬は思はず叫んだ。

『ちや、横須賀へ入つしやらずともいゝんでせう。』と田鶴子はまた妙に兄を見て笑顔を作る。』

『どうもお前の想像力の豊富なものには驚ろく。だから邪推深いのだ。まあいゝわ、書齋へ通すがよい。俵は返して置け。』

尋ねて来たのは鍋島海軍中佐であつた。喬は直ちに鍋島に遭ふと、

『實にいゝところへ来てくれた。僕は今から横須賀へ出かけようとするところだつた。』

『ウム、それはよかつたね。僕は鎮守府の用事で東京へ出かけて来たんだが。用はもう片づいた。何か急用でも起つたのかい。』

『いや少し君の判断を要する事が出来たので——』

『僕の判断を要する事？ 可笑しいねえ。何だい。』

『實はかういふ匿名の手紙が舞込んだので、何も信する譯ちやアないが、非常に不快を感じるんだ。』と以前の手紙を出して見せる。

鍋島はそれを受取つて読んで見たが、腑に落ちぬ様でモ一度繰返し、なほ筆蹟を吟味しながら、

『こりやア驚いた中傷をする奴があるね。それで君は煩悶してるのかい。』

『併し君はそれを中傷と信するか。』

『中傷と信するかつて、僕が海軍中佐である如く、明らかに中傷さ。全體何ものがこんな中傷

をやつたらう？ 断じて許すべからざる卑劣漢だ。』

川上一家をよく知つて居る鍋島が自分の口氣を聞くと、また喬の神経が安まつた。妹の辯護を聞いた時の比ではない。

『僕も中傷だらうとは信じて居たのだが、門外漢の知らん事まで書てあるから……』

『ウム、そりやア多少川上家の家庭を知つて居るものでなければ、こんな巧みな中傷は出来ん、……どうも何ものだらう？』と鍋島は深く怪訝に堪ぬものゝ如くである。

『僕は飽までも君を信頼するつもりだが、君の見るところでは決してこんな事は無いのだね？』

『無いのかつて、それは断じて無いさ。川上の家庭にさういふ事のあり得べき道理もなし。倭文子さんがまた、決して親の許さぬ不義をするといふやうな女ではない。これは僕が責任を以て保證するよ。それからこゝにある書生だが——これは正木といふのだがね。僕は川上家の誰

も信用するが、僕は將軍よりも倭文子さんよりも、最終まで信用するのはこの正木だ。』

『君はどうしてその書生を、そんなに信用するかね。』

『なぜ信用するかと聞かれると、君に満足を與へるだけの説明が出来るかどうか知らんが、兎に角信するから信するといふ外ないね。この信用は長い間に養はれたのだらう。正木は倭文子さんの乳母の子で——この書面には何かそれに就ても秘密があるやうに書いてあるが、實に怪

しからん、紛れもなく、極めて實着な主家思の乳母の子で、川上將軍がその志に酬いるため、厚く正木を養なつて居るといふだけだ。』

『全體倭文字さんの母と僕の祖母とは縁故のある間柄だったので、僕は小さい時にはよく川上家へ遊びに行つたものだが、僕の目にまだありくと浮ぶのは倭文字さんが七ツか八ツ位、正木が十三四、僕がまた五ツ六ツ上で、この年違ひの三人がよく仲を善く裏の林の中で遊んだ時の事だ。さういふ譯で僕は正木の子供の時から知つて居るが、その時から正木は人に變つて、何か頼もしい強いところのある少年だつた。僕が江田島へ行つてからは夏休に一遍位川上家を尋ねるだけで、それでも必ず正木の安否を尋ねて、若し居れば必ず遭つて歸つたものだ。』

かういふ風で僕は正木を知る事は決して誰にも劣らんが、殊に近年僕がたま／＼正木に遭つて感ずるのは、彼が非常に堅實な青年であるといふ事と、一ツは彼が主家に忠ならんとする觀念の非常に深い事だ。この正木が如何なる場合に臨むとも主家の令嬢を傷つけるといふやうな事を敢てする道理は斷じてない。僕は海軍中佐の軍服の手前にかけて責任を以て君に保證しよう。』と熱誠の語氣溢るゝばかりである。

それでも若し疑ふならば、見下果た男であるといふやうな意氣込が鍋島の顔に見える。又實際鍋島の如き男にこれほどまで云はれて疑ふものは恐らく女の腐つたのか何かだらう。

う。』

『いやさう云つてくれると僕も大きに話し甲斐がある。全體君、考へても見給へ、匿名の手紙などを人に寄越すといふのは卑劣極まる所爲だ。若し實際君のためを思つてのことなれば、自から出て来るなり、また名を署するなりして、正々堂々と君に忠告するのが當然だらう。こりやア何でも倭文字さんを狙つて居た男が、それとも君に怨のある奴の仕業に相違ない。世間普通の場合から考へても、既に纏まつて居る縁談なれば、假に面白くない噂を聞いたとしたところで、口を噤んで圓滿な成行を望むのが、普通の人情だらう。また一面から云へばそれがわれわれの社會に處する徳義だ。その點から考へて見たところで、其中傷の手紙を書いた奴の陋劣の心事は明らかにわかるぢやアないか。』

『全く一言もない。』

『君は戰の參謀は巧いか知らんが、人情の偵察はまだ小學校だね、あは／＼。』

『さう油を取り給ふな、併しお蔭で僕は光風露月の如くになつた。大いに祝杯を擧げよう。』

『よし大いにやらう。僕も頗る愉快だ。雨降つて地堅まるの感があるね。』